

関西外国語大学大学院外国語学研究科

博士学位申請論文 2023年4月

和製新漢語に関する研究
— 中国語での受容と和製新漢語の造語法 —

関西外国語大学大学院
外国語学研究科 言語文化専攻

陳紫軒

目次

第1章 序論	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
1.3 本論文の構成	4
第2章 和製漢語に関する先行研究と和製新漢語の提起	7
2.1 和製漢語とは	7
2.1.1 日本語における漢語の概要と和製漢語の由来	7
2.1.2 辞書の記述	10
2.1.3 和製漢語の諸名称とそれぞれの定義	11
2.1.3.1 日本製漢語	12
2.1.3.2 新漢語	13
2.1.3.3 和製漢語のそれぞれの定義	16
2.2 日本語における和製漢語に関する研究概説	18
2.2.1 日本側の研究について	18
2.2.2 中国側の研究について	20
2.3 和製新漢語の提起	23
2.4 本章のまとめ	27
第3章 中国における和製新漢語の流入	29
3.1 近代の社会背景	29
3.1.1 日本における近代化	30
3.1.2 中国における近代化	31
3.2 近代の日本留学の高まり	34
3.2.1 日本への留学の契機	34
3.2.2 中国人留学生の教育とその成果	39
3.3 中国人留学生による翻訳活動	41
3.3.1 漢訳された日本語書籍の種類と数量	44
3.3.2 漢訳された日本語書籍の中国への流通	47

3.4	和製新漢語の中国語への流入	48
3.4.1	日本側からの提供	48
3.4.2	中国側の受け入れ	49
3.5	本章のまとめ	51
第4章	『新爾雅』における和製新漢語の中国語への受容	55
4.1	和製新漢語の確立—中国語母語話者の観点から	55
4.2	『新爾雅』の内容	56
4.2.1	編纂の社会背景と作者	56
4.2.2	編纂の目的	57
4.2.3	版本の状況	58
4.3	『新爾雅』とその語彙の考察	60
4.3.1	『新爾雅』における語彙の意味分野と語の構成	60
4.3.2	『新爾雅』における語種の分類とその分析	70
4.3.2.1	語種分類のための方法	70
4.3.2.2	2字語	72
4.3.2.3	3字語	77
4.3.2.4	4字語	81
4.3.2.5	5字語	82
4.3.2.6	6字語以上	83
4.3.3	『新爾雅』から見える漢語	84
4.4	『新爾雅』における和製新漢語の意味分野	84
4.5	本章のまとめ	87
第5章	『NEW TERMS』における和製新漢語の中国語への受容	89
5.1	和製新漢語の確立—非中国語母語話者の観点から	89
5.2	『NEW TERMS』の内容	90
5.2.1	編纂の社会背景と作者	90
5.2.2	編纂の目的	92
5.2.3	版本の状況	93
5.3	『NEW TERMS』とその語彙の考察	95
5.3.1	『NEW TERMS』における語彙の意味分野と語の構成	95

5.3.2	『NEW TERMS』における語種の分類とその分析	108
5.3.2.1	2字語	108
5.3.2.2	3字語	115
5.3.2.3	4字語	119
5.3.2.4	5字語	119
5.3.2.5	6字語以上	120
5.3.3	『NEW TERMS』から見える漢語	121
5.4	『NEW TERMS』における和製新漢語の意味分野	122
5.5	『NEW TERMS』から見える新語の語種の変遷	124
5.5.1	各版本の考察と比較	124
5.5.2	版本の比較から見える語種の変遷	128
5.6	本章のまとめ	131
第6章 和製新漢語の造語法		133
6.1	『新爾雅』における各字語の構成	133
6.1.1	3字語	133
6.1.1.1	漢語の語基	133
6.1.1.2	和製漢語の語基	135
6.1.1.3	和製新漢語の語基	136
6.1.2	4字語	138
6.1.2.1	漢語の語基	138
6.1.2.2	和製漢語の語基	141
6.1.2.3	和製新漢語の語基	141
6.1.3	5字語	142
6.1.3.1	漢語の語基	142
6.1.3.2	和製漢語の語基	143
6.1.3.3	和製新漢語の語基	143
6.1.4	6字語以上	144
6.2	『NEW TERMS』における各字語の構成	145
6.2.1	3字語	145
6.2.1.1	漢語の語基	145

6.2.1.2	和製漢語の語基	147
6.2.1.3	和製新漢語の語基	148
6.2.2	4字語	149
6.2.2.1	漢語の語基	149
6.2.2.2	和製漢語の語基	152
6.2.2.3	和製新漢語の語基	152
6.2.3	5字語	153
6.2.3.1	漢語の語基	153
6.2.3.2	和製漢語の語基	154
6.2.3.3	和製新漢語の語基	154
6.2.4	6字語以上	154
6.3	和製新漢語の造語法をめぐって	155
6.3.1	日本語における語基の問題	155
6.3.2	和製新漢語の統計	158
6.3.3	各字語の構成パターンとその特徴	160
6.3.3.1	2字和製新漢語	160
6.3.3.2	3字和製新漢語	161
6.3.3.3	4字和製新漢語	162
6.3.3.4	5字和製新漢語	163
6.4	本章のまとめ	164
第7章	結語	167
7.1	各章のまとめ	167
7.2	今後の課題	169
	参考文献	171

第1章 序論

1.1 研究の背景

東西を問わず、古来より新しい知識や見識を得るために人間の移動は盛んに行われてきた。とりわけ西洋における中世からの大学などの教育機関の成立と発展は、民族と文化の異なる国々の若者たちの留学に支えられてきたものである。優秀な学生たちは遠隔地に生活拠点を移し、学術と技芸を修めた。外国で学ぶことは他国の進んだ知識や技術を吸収するための一つの手段であった。

欧米における留学がこのような教養的なものであったのに対して、日本など近代化を目指す国にとっては、国を代表して先進の文明を学んでくるといった気負いを伴ったものであった。アジアにおいては、日本と中国は一衣帯水の隣国で、古代から近代、今日に至るまで、互いの交流が絶えずに長く頻繁に続けられてきた。古代の隋、唐や宋、元、明の各時代には、日本の留学生や留学僧が海を越えて、中国に渡っていた。

人間は交流と離れにくく、交流は言語と離れない。日本と中国においても、例外ではない。日中両国の交流は歴史が長く、それぞれの領域に深い繋がりがある。遣隋使と遣唐使は日中間の交流の代表であり、それは東アジアの中心国、先進国である隋朝と唐朝の先進的な技術や政治制度、文化、ならびに仏教の経典等の受容が目的であった。遣隋使や遣唐使はおよそ十数年から二十数年の間隔で使者の派遣を行った。それは200年以上にわたり当時の先進国であった隋唐の文化や制度、そして仏教の日本への伝播に大きく貢献した。

しかし、近代に入ると、明治維新を経た日本は積極的に西洋文化を吸収するようになった。このことは、中国文化の受容から西洋文化の受容へという、国家的方針の歴史的な大転換が起きたことを示す。明治期前後の急速な近代化の時期に、日本は新しい概念や用語を日本語に取り入れるために、翻訳活動に注力した。その翻訳活動の遂行にあっては、日本の知識人が持つ漢語の造語能力を向上させることと、日本において蘭学を隆盛させることとは不可分の関係にあったと言える。蘭学を介して、西洋の学問を修めることを目的として、蘭学塾も私塾として広まった。その結果、翻訳ができる人材が大量に育成され、西洋の書籍が次々と日本語に翻訳された。その際、翻訳に従事した知識人は、

中国の古典作品や古典中国語に慣れ親しんでいたため、西洋の概念を漢語によって表現した。彼らは、中国の古典にある漢語を再利用する形で、その漢語を日本の近代化に伴い導入された新しい概念に充てた。さらに、中国語にはない漢語を漢語の語構造に基づいて漢字を組み合わせることで、「和製新漢語」を作り出して、これを新概念に充当した。

このことは、漢語の一方向的な借用から日本国内での漢語の創出を体現していることから、日中語彙交流史における一大転機と言える。その結果、西洋の学問や知識などの訳文中で、新概念を簡潔かつ厳密に表現できる漢語が用いられるようになった。以上の変革に伴って、訳本は文明開化や明治維新の原動力となったばかりでなく、日本人に対し、先進的な西欧の文化・学問に触れる機会を提供した。西洋の学問や知識は、日本の近代思想に重要な基盤を提供して、日本に近代化という名の発展をもたらした。

一方、近代の中国の状況に目を転じると、中国（当時は、「清朝」）は、アヘン戦争によって鎖国が破られたのち、列強各国の侵略の対象となったのである。中国の先覚者たちは、亡国の危機感を目の前にして、内憂外患を抱える中国を救うために、西洋の先進技術や思想を国内に取り入れることを決めた。経済的、時間的余裕がなかったため、一衣帯水の隣国である日本が明治維新によって近代化への転換を行ったことに目を向けた。

そして、清朝が1896年に初めて日本への留学生派遣を行うと、それを皮切りに大勢の中国人留学生が学びを求めて、日本の地を踏んだ。派遣された彼らは、重要な使命を担っていた。それは、近代化に成功した日本を発展のモデルと見なし、日本を通じて、西洋の先進科学や技術を学ぶとともに、新しい思想や知識を中国に広めるために日本語を学び、様々な日本語書籍の漢訳に取り組むことであった。

その漢訳された書籍が中国に渡ると、西洋諸国の近代文明が中国にもたらされた。それと同時に、多くの「和製新漢語」も中国語に持ち込まれた。この近代の新概念を表した「和製新漢語」は、日本の近代化に大いに寄与したばかりでなく、日本と同様に漢字を使用している中国語へと流入し、中国語の語彙として現在まで使用されている。

1.2 研究の目的

19世紀の中国では、清朝の支配が衰え、大規模な社会動乱と経済停滞が起き、これらに加えて、食糧供給が逼迫していた。このような内憂外患状態にある清朝の国力は、急速に衰えていった。中国では鎖国が破られると、列強各国の侵略の対象となった。

中国における亡国の危機感を目の前にして、中国の知識人らは内憂外患の中国を救う

べく、西洋の先進技術や思想を国内に取り入れることを決め、西洋の国々に留学生を送りだそうと考えた。しかし、当時半植民地、半封建的な状態にあった中国は、経済的にも時間的にも余裕がなかったため、隣国の日本に目を向けた。近代化完成のモデルを日本に求め、必要な学びを日本の各分野に向け、習い始めた。

なぜなら、その頃の日本は西洋文明を取り入れ、明治維新を行い近代化に成功していたからである。特に日本は、西洋よりも距離的に近く、経費も安く済むなど利点があったので、日本に留学生を派遣することとなった。この日本への留学気運の高まりは、日中文化の交流と語彙の交流を力強く推し進めることになった。中国渡日留学生たちや中国に滞在する日本語学校の卒業生たちの手により、日本語書籍の翻訳活動が大規模に展開された。これにより、日本語書籍の翻訳ブームが始まった。中国渡日留学生による翻訳活動は、西洋の先進的な知識や文化、思想などを中国に流入させただけでなく、多くの語彙—和製新漢語—を中国国内にもたらした。それまで中国になかった新概念などの表現に用いられた「和製新漢語」は、日本語からの借用語であるにも関わらず、中国語本来の語彙と共存することとなったのである。それらの語彙は中国に入ってから、日常生活に溶け込み、中国語を豊かにし、中国語の表現力を大きく増加させることとなった。このように、「和製新漢語」は近代中国語の発展に重要な役割を果たしたのである。

そのような状況から「和製漢語」研究の課題が浮き彫りになったのであるが、これまでの研究のほとんどは、「和製漢語」の形成・背景及び分類に重きを置いており、その研究範囲の具体化や、中国語に受容された「和製漢語」の分析に関する研究は十分なものとは言えない。加えて、中国側による「和製漢語」の受容の動機と、受容による中国語への影響に焦点を当てた研究も限られている。特に、本研究で提起した「和製新漢語」という概念に相当する語彙に焦点を当てた研究は多くない。「和製新漢語」の造語法に関する研究も十分なものとは言えない。

20世紀に入ってから、近代化を成し遂げた日本は西洋から先進的な知識、思想や概念などの漢語訳を自ら行った。「和製新漢語」はその漢語訳から生まれたものであるが、その一部は中国語に持ち込まれた。それらが中国語に浸透した結果、同じ漢字文化圏で近代化に必要な知識、思想や概念などが共有できるというメリットがもたらされた。そのことから、「和製新漢語」についての研究は不可欠なものとなった。また、様々な観点から研究が行われているが、研究者の面では、非中国語母語話者（非漢字文化圏）の観点から詳しく分析を行った研究は不足している。さらに、中国語母語話者の観点からの比

較研究も必要であると考えられる。

これらの問題を解明するために、本研究は、近代の新しい概念や思想などを表現する「和製新漢語」という概念を提起する。それを研究対象として、非中国語母語話者（非漢字文化圏）と中国語母語話者の2つの観点から、「和製新漢語」の特徴を中心に明らかにするとともに、その流入の背景や経路の解明も試みる。また、出版年の異なる複数の版本を比較することは、「和製新漢語」の中国語での受容と変遷について明らかにするうえで重要である。そのような取り組みは、近代における日中語彙交流の状況や近代新漢語の形成、「和製新漢語」と「中国製新漢語」との関係の解明に役立つものである。

1.3 本論文の構成

本論文は、序論を含めて7つの章からなる。各章の内容は次のとおりである。

第1章の序論では、本研究の背景を指摘するとともに、研究目的を示す。

第2章では、和製漢語に関する先行研究を概観し、問題点を指摘したうえで、「和製新漢語」という概念と「準和製新漢語」という概念を提起し、本研究の主眼点と提起の意義を述べる。

第3章では、中国における和製新漢語の流入を検討する。まず、近代の社会背景を通して、日中の近代化を考察する。次に、近代の日本留学の高まりと中国人留学生による翻訳活動を詳しく紹介し、和製新漢語の中国語への流入の経緯と伝播について述べる。

第4章では、中国語母語話者が作成した語彙集である『新爾雅』を取り上げ、和製新漢語の中国語への受容を検討する。和製新漢語の抽出方法を説明したうえで、『新爾雅』における語彙の意味分野と語種について検討し、中国語母語話者（漢字文化圏）の観点から和製新漢語の受容された状況を考察する。

第5章では、非中国語母語話者（米国人）が作成した語彙集である『NEW TERMS』を取り上げ、和製新漢語の中国語への受容を検討する。第4章と同じ抽出方法により、『NEW TERMS』における語彙の意味分野と語種について検討する。また、非中国語母語話者（非漢字文化圏）の観点から和製新漢語の受容された状況を考察する。さらに、和製新漢語の中国語での受容と変遷を明らかにするために、資料となる書籍の出版年の異なる複数の版本を詳しく比較分析する。

第6章では、『新爾雅』と『NEW TERMS』における和製新漢語について、造語法の観点から、その語構造の特徴を明らかにする。

第7章では、本論文の考察結果を総括する。また、今後に残された研究課題として、中国製新漢語の変遷と現代の中国語への影響の問題、及び、中国製新漢語が日本語にもたらした影響の問題に触れる。

第2章 和製漢語に関する先行研究と和製新漢語の提起

2.1 和製漢語とは

2.1.1 日本語における漢語の概要と和製漢語の由来

日本語の語種構成に関する分類は、時代と共に変化してきたが、現在、一般的に「和語」、「漢語」、「外来語」、「混種語」に分類されている。第一に、「和語」とは、古代から日本語に存在した語、およびそれから転化・派生した語のことをいう。第二に、「漢語」とは、日本語に借用された古代中国語、および、日本人の手によって、既存の中国語の漢字を利用したうえで、中国語の造語法に従いながら作られた語のことをいう。第三に、「外来語」とは、外国語から日本語へ借用された語のことをいう。この用語を広義にとらえると、「漢語」も外来語に含まれる。しかし、狭義にとらえられるのが通例で、主として欧米諸国の言語から入ってきた語のことを指す。借用の有無という点で、「漢語」と「外来語」は、「和語」と対極をなしているといえる。最後に、「混種語」とは、上述した3種類の語彙のうち、2種類以上の語彙を結合させることで成立した語彙のことをいう。

日中両国の語彙交流は、古くから19世紀の中期まで、大体中国から日本へ伝播されていた。日本語の漢語は長く中国語から影響されていたので、漢語は日本語のシステムにおいて重要な地位を占めていた。日本では古くから先進的な中国文化を受容する手段として、漢字および漢語が用いられてきた。多くの古典漢籍や仏教経典は中国語により日本にもたらされ、漢籍や仏典の内容を吸収するとともに、その媒体である中国語語彙を「漢語」として受容し、現在の日本語の「漢語」語彙の形成に至っている。このように、中国語に由来する「漢語」は日本語の発展に大きな影響を与えたため、日本語において重要な位置を占める「漢語」に多くの研究者が注目し続け、今日に至るまで重層的な研究成果が収められている。

日本と中国における「漢語」の研究は、1990年以降、急激に増加するが、その観点と研究方法は多様化の状態を呈している。このことから、日本語の体系に占める漢語の重要性と、それへの関心の高さがうかがえる。

日本語にみられる「漢語」の分類を確認するために、山田（1940）、飛田（1989）、朱

(1994)、野村 (2008) を概観する。

第一に、日本における日本語の「漢語」研究の研究成果を初めてまとめたのが、山田 (1940) である。山田 (1940) は、日本国内において、日本語にみられる「漢語」に関する初の研究成果である。この研究では、日本語の「漢語」の定義、特徴、分類、変遷などに考察が加えられており、「漢語」が体系的にまとめられている。山田は、「漢語」を「国語の中に用いられる中国起源の語で、主として漢音、呉音で唱えるもの」として定義付けるとともに、「漢語」が日本語語彙において重要な位置を占めているとみなした。それとともに、山田は、日本語にみられる「漢語」を共時的及び通時的に整理したうえで、漢語研究の方向性を提示した。山田は、「漢語」を以下の 4 種類に分けている。

1. 直接的あるいは間接的な交流によって日本語に流入した語彙
2. 古典漢籍によって日本語に流入した語彙
3. 仏教書籍によって日本語に流入した語彙
4. 西洋学術書を翻訳した語彙

1 から 3 は、古代から中世にかけて、漢籍や仏教経典、風俗習慣などを通じて日本語に流入したものである。他方、4 は、近世から近代にかけて西洋の学術書を日本国内に紹介することを目的として、これらを翻訳した際に作り出された「新漢語」である。「新漢語」は、概略、「欧米の宣教師が手掛けた漢訳書から直接借用された語彙」と「江戸期の蘭学書の翻訳と明治時代以後の洋学書の翻訳による新訳語」の 2 つに大別できるとされる。

第二に、飛田 (1989) では、「漢語」が、以下に示すように、2 分類されている。以下の分類は、日本語に及ぼした影響の発信元 (i.e., 中国文化と西洋文化) が基準となっている。

1. 中国文化を反映した語—呉音語、漢音語、唐音語
2. 西洋文化を反映した語—翻訳語 (新造語や借用語)

第三に、朱 (1994) は、語源に基づいて「漢語」を以下のように分類している。

1. 「中国製漢語」
 - a. 古典漢籍と仏教経典からの語彙
 - b. 渡華欧米人宣教師の中国語書籍と翻訳書からの語彙
2. 「和製漢語」
 - a. 江戸末期以前の「和文」・「変体漢文」からの語彙
 - b. 江戸中期以後に西洋の学術用語を翻訳した語彙

最後に、野村（2008）は、現代の「漢語」の諸相を、以下のように分類している。

1. 借用語と和漢語。つまり、中国から借用した語彙（例：「世界、人間、文化」など）と和製による語彙（例：「火事、出張、科学」など）。
2. 同音の漢字により書き換えられた語。近年の漢字使用範囲の制限により、字音語以外の表記が変わったものを指す（例：「庖丁」から「包丁」に書き替え）。
3. 混種語と派生語。送り仮名の付いた漢字語彙（例：「棒読み、買い物」など）。

以上が日本における「漢語」分類に関する先行研究であるが、各研究から自明であるように、すでに提出された日本における「漢語」の種類/分類の基準は、研究者毎に異なっている。そして、上述した研究の多くが「漢語」自身が持っている特徴に加え、「漢語」と中国語との関係を論じることに終始している。一方、中国における「漢語」に関する研究では、学習者の視点から、日本語の「漢語」の種類、由来などや中国語との対照研究を行ったものが多い。そのような状況において、日本語に中国語の表記文字である漢字を取り入れたことは、日本語と中国語の語彙交流にとって極めて大きな原動力となった。さらに、時間の流れのなかで日本語は中国語の語彙をそのまま受容する一方、中国語にはない漢字を用いた独自の語彙である「和製漢語」を作り出した。

次に、「和製漢語」の創出にいたるまでの歴史的経緯を概観する。日中両国の語彙交流は、古くから19世紀の中期まで行われていた。しかし、「交流」という用語が使用されているにもかかわらず、押しなべて見ると、実情は、語彙が中国から日本へ伝播するという一方的なものであった。その結果、日本語にみられる漢語は、中国語から継続的な影響を受け続けることになった。一方で、日本語への流入後に漢語がどのようなものかという点にも注目してみる。実のところ、漢語は、日本語に入った後も、高い造語

力を発動しており、漢語が伴う語形成過程の中には、本来の中国語にはなかったと思われる新しいものもある。この点で、漢語の日本語への流入は、日本語の仕組みに質的変化をもたらしたと言え、このことは、研究に値する。

そして、まさにこの新たな語形成こそが、「和製漢語」誕生の契機になったのである。日本語は中国語の語彙をそのまま受容する一方、漢字を用いた独自の語彙「和製漢語」を作り出した。特に中国文化の受容に代わり西洋文化の受容を開始した明治期前後の急速な近代化の時期には、大量の「和製漢語」が作り出されている。日本語が中国語の表記文字である漢字を取り入れたこと自体が、日本語と中国語の語彙交流にとっての極めて大きな原動力となってきたのであるが、このような「和製漢語」の創出は、日中語彙交流における一大転機となった。

2.1.2 辞書の記述

「和製漢語」の定義を見る前に、「和製」の意味を確認しておく。この意味を明らかにする手掛かりとして、漢字「和」の歴史的用法、意味に注目する。

元来、「和」という漢字ではなく、「倭」という漢字が用いられたとされている。古い時代、殊に紀元前には、中国は日本の事を「倭」という風に呼称していたが、奈良時代（710年～794年）中期ごろ、この呼称がそのまま日本でも使われるようになると、日本の中で、「倭」と同じ音を有する漢字「和」が充てられるようになり、その結果、「倭」が「和」に変化した。したがって、「倭」という漢字から、直接的に「和」が派生したのではない。「和」には、様々な意味があり、日本に関係する「和」の意味としては、日本の古い名、日本語の略称、日本を意味する文化的概念などが挙げられる。元明天皇の治世（707年～715年）に国名を二字で用いることが定められ、「倭」と通じる「和」の字に「大」をつけて「大和」と表記し、「やまと」と訓ずるように取り決められた。¹ただし、『徒然草』²の199段では、「和国」という表記もある。「和」という漢字は、“落ち着く”という意味のある「なごむ」（和む）や「やわらぐ」（和らぐ）という語にも用いられている。

さらに、大和（やまと）は、現在に至るまで、現在の奈良県の旧国名としてのみなら

¹ 元明天皇は、都を藤原京から平城京（ともに、現在の奈良県に所在）へと遷した天皇である。大和は、現在の奈良県の旧国名である。

² 『徒然草』第199段：横川行宣法印が申し侍りしは、「唐土は呂の国なり。律の音なし。和国は、単律の国にて、呂の音なし」と申しき。（岩波文庫）

ず、日本国全体を指す古称や雅称として使用され続けているので、「和」は日本の古称や雅称として見られている。以上で明らかになった「和」の意味に、「製」の意味を加えれば、「和製」という語の意味は、日本で製作する古称、あるいは雅称であるということになる。

また、辞書の記述としては、「和製」という語の辞書記述における初出は、1800年刊行の『俗書正偽』で、そこには「見当、和製なり」という記述が見られる。現在においても、「和製」という言葉は使われ続けており、例えば、現代日本語の辞書である『広辞苑』第7版(2018)には、「和製」の項目が収録されている。「和」や「和製」という言葉の背後にある歴史や意味を概観したところで、次に、本研究の主眼である用語「和製漢語」の歴史に注目してみる。辞書類における独立した項目の見出し語としての「和製漢語」は、『国語学大辞典』(1980)にも『国語学研究事典』(1996)にも見られない。見出し語としての「和製漢語」は、1996年の『漢字百科大事典』が初出である。

『漢字百科大事典』では、「和製漢語」の定義を以下のように述べている。

「漢語の日本語化の一つとして、日本で生まれた漢語（字音語ともいう）を和製漢語と言ひ、本来の漢語（中国語）にない漢語である。」(p. 88)

要約すると次のようになる。「漢語」というのは元来、中国の語彙であったのであるが、「漢語」に属する語の中には、日本で創出されたものもあり、それらが「和製漢語」と称されるようになった。

以上、用語「和製漢語」の初出を確認するとともに、『漢字百科大事典』に従って、「和製漢語」の定義を確認した。

2.1.3 和製漢語の諸名称とそれぞれの定義

近年では「和製漢語」の研究は盛んに行われているが、「和製漢語」の具体的概念は、漠然と捉えられている。とりわけ、和製漢語の定義と出現時期は、研究者によって異なっているため、未だ学術的な定説を見ない状況である。加えて、用語の不統一もみられる。日中では、「和製漢語」を(A)「日本製漢語」、(B)「新漢語」とも称することが多い。そこで、筆者は、「和製漢語」の上にあげた各別称とそれぞれの定義について、少し検討したいと思う。

2.1.3.1 日本製漢語

まず、(A)「日本製漢語」という別称は、特筆に値するほどの長い歴史を持ってはいない。各辞典ともに、独立した項目として、「日本製漢語」を所収していない。そこで、筆者は、「日本製漢語」と関連がありそうな項目をも調査対象としたが、各項目の記述はともに「日本製漢語」を定義づけるまでには至っておらず、他の見出し語の説明として出現しているに過ぎなかった。

他方、「日本製漢語」の定義や意味を探るうえで、有力な記述が山田（1940）の第8章「漢語の影響によりて起こりたる国語の種々の状態」にみられる。

「ここに日本製の漢語といへるは、形は漢語と同じく漢字を用ゐてそれを音読するとも、それは本来の漢語にあらずして本邦にてつくれるものをさす。」(p. 510)

また、山田はその成立の過程に従って、つぎのように分類している。

1：漢字を字形により分解して二三字にしてこれを一の熟字の如くにせるもの。たとえば、「米」を「八木」の二字にわけて「ハチボク」を読む。

2：もと国語にあてたる漢字を後に音にて読み漢語のさまになれりし語。

たとえば、

火の事＝火事＝カジ

かえりごと＝返事＝ヘンジ

腹を立てる＝立腹＝リップク

心を配る＝心配＝シンパイ

出張る＝出張＝シュツチョウ

この類には、またもと漢語を含めるものによって造れるものもある。たとえば造作なし＝無造作＝ムゾウサ、骨なし＝無骨＝ブコツ、念を入れる＝入念＝ニュウネン。

3：そのあてたる文字が誤りにして、それを音にてよむことは頗るむりなるもの。たとえば、

札をあらためる（正しくは「検札」）

（改める）＝改札＝カイサツ

おなじことわり（正しくは「同理」）

(断る) = 同断 = ドウダン

ここで、次の2点に留意したい。第一に、山田(1940)は、ある漢語を「日本製」であると見做すための条件として、「日本で作られたもの」という制限を付している。このことは、山田の発言「漢語と同じく漢字を用いてそれを音読みするものなれども、それは本来の漢語にあらずして日本にて作られるもの」からも明らかである。

第二に、日本語の「漢語」の定義、特徴、分類、変遷などに考察が及び、「漢語」を体系的にまとめている。加えて、日本語の「漢語」を共時的及び通時的に整理した。山田(1940)では、「日本製漢語」の語が用いられているが、そこでは「漢語と同じく漢字を用いてそれを音読みするものなれども、それは本来の漢語にあらずして日本にて作られるもの」と述べられているように、「和製漢語」とする条件として「日本で作られたもの」と制限をかけている。つまり、そこでは、山田における日本語の漢語の4分類のうち、4つ目の「西洋の学術書を翻訳した語彙」というのが「和製漢語」に相当するものと考えられている。

2.1.3.2 新漢語

本節では、本研究の標題にも用いられている「新漢語」という用語の初出や定義を確認する。「新漢語」という用語は、論文や各研究などでは、1980年代前後から多く見られるようになった。本節では、用語「新漢語」の初出と定義を、日本国内の研究と中国国内の研究それぞれに注目しながら、確認する。

まず、日本国内の研究に注目してみる。『国語と国文学』第55巻第5号(1978)に所収の「幕末明治期における新漢語の造語法—『経国美談』を中心として—」において、鈴木英夫は、「新漢語」という用語を使用している。鈴木はこの論文は、幕末明治期に使われていた新漢語が、どのようにして創出されたのかを究明するために、明治時代の代表的な『経国美談』に見られる新漢語を抽出して、考察を行ったものである。彼は、新漢語を明確に定義していない。しかしながら、彼の研究指針を見れば、新漢語がどのような特徴を持っているかが理解できるようになる。鈴木は、以下のように述べている。

「新漢語とは、「涙腺」のように「腺」という日本の国字を用いて造られた稀な場合を除いては、既存の漢字を用いた。しかし、新しい構成による漢語ということになる。」(p. 5)

上記の鈴木 の指摘からは、次のことが判明する。すなわち、彼の考える新漢語とは、幕末明治期に使われている漢語のうち、日中両国における従来の文献資料にその出所を持たず、日本国内で漢字を用いて、新しく造られた新造語のことをいう。

また、鈴木英夫に加え、「新漢語」という概念は、鈴木修次の『国語学』第132集に所収される「嚴復の訳語と日本の「新漢語」」（1983）という論考の中にも見出される。本論考では、近代に活躍した著名な啓蒙思想家・翻訳家である嚴復の著作について考察が加えられている。その研究の冒頭において、鈴木は、以下のように述べている。

「日本の近代化の過程において、たくさんの知識人たちは、ヨーロッパの諸科学を消化するために、「新漢語」をもって称される漢字によるもろもろの訳語をくふうして、諸科学に内包される諸概念を説明してきた。それらの「新漢語」は、日本社会の公教育の普及にともなって、現在では日常の生活用語の中にまで滲透し、現代日本語語彙の主要な部分を占めるに至っている。」（p. 40）

鈴木修次は、研究の標題と冒頭において、直接に「新漢語」という用語を用いたうえで、嚴復の著作を取り上げ、日本語における新漢語の素性を究明した。この論考において、鈴木は、新漢語の創出につながった経緯を以下のように述べている。

「幕末から明治における、日本社会の洋学者たちは、「漢字文化圏」の人々にとってはまったくの異質文明であったヨーロッパ近代の文明を、漢学を駆使した訳語をくふうしながら、消化し続けてきた。こうして明治初期には新しい概念にともなうおびただしい数のいわゆる「新漢語」というのが、世に現れた。」（p.40）

要するに、彼は「新漢語」を幕末から明治において、日本が西洋の近代文明や先進文明を取り入れるために、洋学者の翻訳から使われた訳語である、と見做していることになる。

次に、中国国内の研究に注目してみる。中国において「新漢語」という概念を用いる代表的な研究者として、沈国威が挙げられる。彼の研究書として、沈（1994）を挙げる

ことができる³。本研究書中で、彼は、『英中辞典』と『英日辞典』に依拠しながら、近代以降日本から中国に流入した日本語の漢語（新漢語）を取り上げている。このことに加え、彼は、中国におけるそれら新漢語の受容の過程やその弁別方法などを体系的に論じたうえで、最終的に受容された新漢語が定着するか否かを明らかにした。沈の研究は、特別な意義を有していると考えられる。なぜなら、この研究は、近代以降に日中両国内で上梓された書籍の中でも、初めて書名に新漢語という用語を用いたものであるためである。沈の「新漢語研究に関する思考」（1998）では、新漢語の定義と新漢語の創出にまつわる経緯が、以下のように述べられている：

「19世紀は、西学東漸の世紀であった。西洋文明を内包する新しい概念が怒濤のように東洋に流れ込んでいる。東洋諸国が、民族の存亡を賭けて、これらの新概念を必死に受け入れようとした。その際、漢字圏の国々が、宿命的に西洋文明の受容に古き漢字を用いねばならなかった。このように創出された新しい言葉を、本稿では「新漢語」と呼ぶ。」（p.37）、「新漢語」が、中国語や日本語という個別言語の枠組みを超越し、媒体としての漢字、及び表出する意味にのみ注目するタームである。」（p.37）

沈（1994、1998）に従えば、「新漢語」とは、中国の既存漢字を用いて創出されたもので、漢字文化圏において西洋文明や先進文明を表す新概念を受容することに供されたものであるといえる。

21世紀に入ると、中国側には、「新漢語」という概念を用いた研究がみられるようになった。孫（2015）の表題には、沈国威の研究書と同じように、用語「新漢語」が使用されている（『近代日本語の起源—幕末明治初期につくられた新漢語』）。孫は、新漢語を以下のように定義している：

「新漢語」とは、17世紀以来、西洋の諸概念を言い表すため中国または日本で生成された新しい訳語・漢字語を指すものであると定義し、それに関する研究は新漢語研究と呼ぶことができる。」（p.7）

³ 沈国威の研究は日本で行われているものであり、正確には中国国内の研究とは言えないが、ここでは便宜的に中国国内の研究として扱う。

孫による「新漢語」の定義は、沈（1998）による定義とは異なっている。後者では、新漢語の創出時期を 19 世紀としているのに対し、前者では、17 世紀以来としている。また、前者では、後者よりも限定的に、日中における新漢語の定義を、「訳語」あるいは「漢字語」に定めている。

2.1.3.3 和製漢語のそれぞれの定義

つぎに、「和製漢語」の様々な定義について見てみる。「和製漢語」の定義は、研究者によって異なっている。第一に、高野（2004）では、次のように定義されている。

「和製漢語」は、日本が西洋語を日本語に置き換える際に造語した訳語が主流である。」
(p.3)

また、高野（2004）の序章には、近代日本の和製漢語への言及がみられるのであるが、その内容をまとめると以下の通りとなる。

「本来、漢語は中国語であり、それを日本語が借用した。ところが、近世の蘭学は、西洋の知識を吸収するために、中国からの借用語だけではまかないきれず、多くの和製漢語を生産した。近代の英学も蘭学が開拓した和製漢語による翻訳法を踏襲したものの、事情は蘭学の時代と大きく異なった。」(p.4)

第二に、華（2005）では、「和製漢語」が次のように定義されている。

「漢語が日本に伝わってくる時から、日本語に浸透しつつ、音韻・形態・意味などの面にわたって中国本土のものとはずれが生じて、さまざまな変化が起きている。その変化が発生した主な原因は、日本における漢語の受容にある。言い換えれば、中国の言葉が日本語の中に入り、だんだん日本語化しているうちに、いろいろな変化が出てくる。さらに、漢字の表意性と造語力を生かして、本来中国本土にない新しい形や組み合わせを日本語の中で独自に作り出すことも出てくる。それは「和製漢語」である。」(p.7)

さらに、「和製漢語」の範囲を具体的に分析すると、広義と狭義の二つの見解が出てく

る。狭義の見解をとる山田（1958）は、以下のように主張している。

「漢語と同じく漢字を用いてそれを音読するものなれども、それは本来の漢語にあらずして本邦にてつくれるものをさす。」(p.510)

この見解を見ると、山田は、「和製漢語」の範囲を狭くとらえていることがわかる。すなわち、彼は、ある語彙が和製漢語とみなされるための要件として、「日本で造られること」を加え、ある語彙が「和製漢語」であるとみなされるための条件を厳しく制限している。それに対して、広義の見解をとる研究者の論に注目してみる。華（2005）は、以下のように述べている。

「時代を問わず、とにかく日本的な意味の発達や使い方、あるいは日本で新しく造られた漢語は全部和製漢語に含まれる。この広義の語彙範囲によって、日本で造られるという制限が緩んで、本来中国言葉であるが意味や使い方を日本語化した語も和製漢語に含まれる。」(p.9)。

このことから、華が「和製漢語」の範囲を広くとらえていることがわかる。

また、陳（2012）では、和製漢語が以下のように定義づけられている。

「日本語の中で形成され、造られた漢語をさしている。それを判別する物差しは形態と意味の二つの側面がある。形態から見て漢字の表意性と造語力を生かして、日本語の中で独自に作った中国本土にない新しい形や組み合わせを日本製漢語と呼ぶ。」(p.217)。

以上のように、「和製漢語」の定義は、研究者によって異なっているのであるが、定義の基本は、おおよそ以下のようにまとめられる。

- (1) 漢語の語構造に基づいている
- (2) 字音読みの語
- (3) 日本で作られたもの

このうちの(1)と(2)は当該の語を「漢語」とであると判定するための条件である。それに対して、当該の語が「和製漢語」とであると判定されるためには、この「漢語」となる条件(1)(2)に加え、(3)の「日本でつくられたもの」という(1)～(3)の3つの条件が揃わなくてはならないのである。要約すると、次のようになる。「和製漢語」とは、(A)漢語の語構造に基づいて、日本で新しく造られたもの、または、(B)古典漢籍から転用した漢字語で、音読みで読まれるものである。当時、日本の近代化を担ったのは知識人であり、彼らは漢籍に精通していた。彼らは、再利用できる語彙に対して新しい意味を付与して、これらを新語として生かした。また、漢籍の語彙の再利用では対応できない概念の場合には、漢語の語構造に基づいて漢字を組み合わせることにより新語を創り出したのである。

2.2 日本語における和製漢語に関する研究概説

2.2.1 日本側の研究について

「和製漢語」は、研究者の関心の的であり続けたために、日中両国の学者により、そのテーマに関する研究成果があげられてきた。筆者はまず、日本側の先行研究とその主な成果を以下にとりあげ、概観したい。日本側の代表的な学者として、西周、山田孝雄、実藤惠秀、鈴木修次、飛田良文などを挙げるができる。

山田(1958)では、上述のとおり、日本語にみられる漢語が、次の4つに分類されている。

- 1:「直接的あるいは、間接的な交流によって、輸入された語彙」
- 2:「古典漢籍によって輸入された語彙」
- 3:「仏教書籍によって輸入された語彙」
- 4:「西洋学術を翻訳した語彙」。

最後の「西洋学術を翻訳した語彙」とは、西洋の先進的な学術に関するものを翻訳するための「和製漢語」である。加えて、山田は、「日本語のいわゆる漢語はすべて中国からという認識は正しくないのである」と指摘している。

飛田(1987)において、飛田は、中国と西洋という2つの視点から、日本語の中の「漢語」を2つに分類した。一つは、「吳音語」、「漢音語」、「唐音語」のような「中国文化を

反映する漢語」で、もう一つは、「新造語」、「借用語」のような「西洋文化を反映する漢語」である。また、飛田は、飛田（1992）の中で、日本語にみられる漢語を、さらに深く論じている。

鈴木は、鈴木（1981）において、現代中国語に広く浸透して使用されている「社会」「法律」「警察」といった語彙の由来を明らかにした。鈴木は、中国語にみられるこれらの日本語の新漢語は、中国に受容された結果、中国人の生活に浸透したと述べている。

日本側の数量的な研究として、実藤（1973）があげられる。そのなかで、実藤は、中国語に流入した和製漢語は 830 語であると主張している⁴。さらに、『中国人日本留学史』（1960）の第 7 章では、「日本語彙の中国語文への溶け込み」が論じられており、「中国人の認めた日本語来源の中国語」という節では、784 語の日本借用語が挙げられている。実藤の研究では、日本語の流入経路、方法、中国語における受容の可能性、中国語に溶け込む過程、日本語に対する反応などの考察が加えられるとともに、中国における研究成果の詳細な紹介も行われている。

日本人以外の研究成果としては、漢学者であるイタリアのマシニが手掛けた Masini（1840）があげられる（本書は、汉语大词典出版社で 1997 年に出版された『現代汉语词汇的形成—十九世纪汉语外来语研究』）。中国でキリスト教を布教していた宣教師は、19 世紀に中国の研究者と連携して、西洋学書を翻訳し、その翻訳過程において漢語を創造した。宣教師による翻訳活動の先例があったため、19 世紀の中葉以降に日本人が西洋学書を訳した際、日本人は、これらの漢語を採用して、再加工することができたのである。マシニは、この翻訳活動により創出された漢語こそが、現代中国語における常用日本語の漢語の大部分の起源であると論じた。

また、「和製漢語」を近代語として扱った研究も多く見られる。広田の『近代訳語考』（1969）や齋藤毅の『明治のことば』（1977）、中国洋学書の語彙について詳述している佐藤亨の『近世語彙の歴史的研究』（1980）、『近世語彙の研究』（1983）、『幕末、明治初期の語彙の研究』（1986）などは、近代における訳語の成立過程の解明に着目した研究である。とりわけ、英華字典の近代語に与えた影響を論述した森岡健二の『近代語の成立—明治期語彙編—』（1969）は、それ以降の研究に大きな影響を与えた。その後の進藤咲子の『明治時代語の研究』（1981）や松井利彦の『近代漢語辞書の成立と展開』（1991）

⁴ 実藤（1973）と関連する研究成果として、実藤恵秀の『中国人日本留学史』（1960）、その増補版（1973）、『中国留学史談』（1981）があげられる。

は、いずれも近代の漢語研究に寄与するものであり、そこでは、和製漢語研究の問題点と解決すべき主な課題が示されている。

これらの研究で明らかにされたのは、日本での訳語の成立には、英華字典や漢訳洋書の記述言語である中国語が深く関わっている、ということである。すなわち、中国語にある「日本借用語」には、もともと中国で創られたものが日本語に流入し、その後再び中国に逆輸入されたものを数多く含んでいるということである。

荒川は、荒川（1997）において、地理学用語を中心とした近代日中学術用語の形成と伝播を研究し、「熱帯」「回帰線」「海流」「貿易風」などに関して、近代中日言語交流の立場から語源や語彙の系譜の問題を取り上げて、詳しく分析した。また、論文としての研究成果に、荒川（1998）がある。そのなかで、彼は、中国語に入った日本漢語の全貌を網羅的に考察している。

佐藤信は、佐藤（2009）を発表した。この論文は、七、八世紀における日本の貴族（朝廷）と地方豪族の間で展開された漢字を基にした漢字文化の受容を考察したものである。そこでは、このことに加え、古代日本における漢字文化の受容と学習をめぐる教育制度も論じられている。

上記の論文の他に、1983年には、「和製漢語の歴史」と題された論文が、佐藤喜代治により発表された。また、曾根博隆は1985年に「現代中国語の語彙」を、1988年に「日中同形語に関する基礎的考察」をそれぞれ発表した。さらに、荒川清秀は、1979年に「中国語と漢語—文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて—」を発表した。

2.2.2 中国側の研究について

次に、「和製漢語」に関する中国側の研究に目を向けよう。中国人研究者による初期の研究として、彭文祖の『盲人が盲馬に乗る新語論』（1915）（原題『盲人瞎馬新名詞』）という書籍があげられる。その本では、日本から借用された漢語が研究の対象とされている。そして、日本から中国へと借用され、中国語にとっては新語に相当する語彙（「法人」、「取消」、「第三者」、「強制執行」）を「きてれつな」ものとして定義した。彭は、漢語の借用に対して抵抗的な態度を示したうえで、日本から借用された漢語は中国では使うべきではないと批判した。

さらに、中国側を代表する研究者として、高名凱と劉正焱の名が挙げられる。彼らの著書『現代漢語外来詞研究』（1958）は、文字改革出版社によって出版され、現代漢語外

来語を扱った書籍としては、中国国内初のものである。本書では、現代中国語における数多くの外来語が網羅的に収録され、それらについて詳述されている。本書に収録された語彙の分類項目として、「日本語から借用した中国語の外来語」が設けられており、それによると、中国語に流入した外来語の数は、1270語にのぼる。そのうち、日本に起源をもつ語の数は、458語にのぼることが指摘されている。1984年に、高名凱と劉正焱は、『漢語外来詞辞典』を上海商務印書館から出版した。それは、中国初の外来語辞典であり、語源も備え、当時までの中国語に存在する外来語をおさめている。収録された外来語の中には、日本語から中国語へと伝播した大量の外来語が存在する。

その後、中国では、1977年に普通高等学校全国統一試験 (*Nationwide Unified Examination for Admissions to General Universities and Colleges*) が再開され、大学入試が全国で統一的に実施されるようになった。1980年代に入ると、その統一試験を経て大学に入学し、卒業した人の中から、優秀な人材を選抜して海外の大学へ留学させるようになった。留学生の派遣先には、日本も含まれており、留学生たちは、日本の研究や文献を参照して、新たな研究成果を出すようになった。このような経緯の下、研究成果が増加を見せるようになり、言語研究なども一層進展した。

その以降の「和製漢語」の主な研究者としては、沈国威、朱京偉、陳力衛などが挙げられる。沈国威の体系的な研究書として、『近代日中語彙交流史』(1994)がある。その書では『英中辞典』と『英日辞典』に基づき、新漢語(近代の和製漢語)の生成と受容の過程と日本語借用語の定義、範囲、その弁別方法などをまとめて論じている。この書は、日中語彙交流史における和製漢語の研究に大きな転機をもたらした。特に注目されるのは、近代の日本語借用語の歴史を概説し、伝播の過程を論じている点である。さらに、この書は、「関係」と「影響」という2つの単語を例に挙げ、日本発の語彙が中国語に受容される過程を記述している。そこで採用された事例に基づく実証的な研究方法は、本研究にとって極めて有益であった。

沈国威はまた、『近代日中語彙交流史における一新漢語の生成と受容』(2008)という著書も出している。そこでは、102語がリストアップされており、英華字典と英和字典を用いたうえで、日本語にみられる近代語の成立過程の究明がなされるとともに、日本語語彙が中国語に借用された時期、媒介、規模にも考察が及んでいる。また、その書は、これまでにない新しい観点からの研究方法を採用したものであると言える。この書は従前の研究とは異なって、日本の資料や文献をも援用して、中国語と日本語の両面からア

アプローチを試みている。

沈国威のその後の著書『近代中日词汇交流研究』（2010）は、中日両言語の語彙交流に立脚しつつ、中国語による和製漢語の受容に焦点を合わせている。そのほか、論文としては「近代における日中語彙交渉の一類型—「関係」について—」（1988）や「近代語彙体系における訳語の造出と借用—類型—「影響」を中心として—」（1992）などもある。

次に、近代日中両国の語彙交流を史的観点から論じた研究者としては、朱京偉が挙げられる。朱京偉は、『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に—』（2003）を出版した。そこでは、哲学用語、音楽用語と植物学用語の3つの分野における近代日本語による新語の創出と中国語の語彙交流が論じられている。特に、語彙の創出に関する記述は、きわめて特徴的である。その書では、各書籍における語彙の使用状況、造語能力などが系統的に論じられている。さらに、その書では、『明治の言葉辞典』（1986）に収録されている語彙をも考察の対象に加えたうえで、それらの語源の特定を行いつつ、借用関係を明らかにしている。

21世紀に入ると、さらに多彩な研究成果が次々と発表される。その中で注目すべきは、陳力衛の研究である。陳力衛は、『和製漢語の形成とその展開』（2001）という著書を出版し、和製漢語の形成と展開を論じた。また、『语词的漂移：近代以来中日之间的知识互动与共有』（2007）において、次の問題を提起している。すなわち、中国語に存在する西洋に関する漢語は、日本から借用されたのかどうか、一部は中国国内にその起源を有しているのではないかと、という問題である。この問題を解決するため、19世紀に刊行された英華辞書で、その西洋訳語を一つ一つ考証することを試みたのである。

また、「和製漢語」の計量的な研究としては、王立達の「現代漢語における日本からの借用語彙」（1958）があげられる。この論文では、現代中国語に吸収された日本語からの語彙数は、588語にのぼるとされる。また、その分析に従えば、その受容の過程には、次の3つのものがあるという。第一の過程とは、日本語において外来語が音訳された結果生み出された語彙が、現在中国語に採用されたもの。第二の過程とは、漢字で表記されるにもかかわらず、訓読みしか持たない日本語の語彙が中国語に転用されたもの。第三の過程とは、日本人の手により生み出された外来語の意識語としての漢語が、中国に伝来したものである。また、中国語に流入した外来語を研究した最初の専門書である高名凱・劉正焱の『現代漢語外来詞研究』（1958）では、近代における日本語の優越性や中国語に流入した漢語外来詞と日本語の関係を論じつつ、458語の和製漢語をあげている。

最後に、上記以外の研究をいくつか追加しておく。翟鵬の「新世紀現代漢語新詞与日本語同形詞及外来語の関係」(2004)では、日本語から流入した新語の同形語に焦点をあわせたうえで、その変容に論点が置かれている。

潘鈞の「日中漢語の交流」(2005)では、歴史の面から、日本語の中国語への流入が論じられている。彭広陸の「中国語の新語に見られる日本語からの借用語」(2013)では、対照言語学の立場から、現代日本語から中国語へと流入した新語が考察されている。また「日本における中国語新聞の用語に関する考察」(2001)において、中国語新聞の用語の状態を論じている。さらに、「中国語と外来語」(2005)では、現代日本語から中国語へと流入した外来語が網羅的に論じられている。

劉徳友による『日本語と中国語』(2006)は、日本から伝来した新語に対する中国語母語話者の使用態度、これらの新語の使用実態などの論考に、3つの章を割り当てている(第三章「中国人は日本製の漢字言葉が大好き」、第四章「中国の新語事情」、第五章「中国人がみた日中の外来語」)。李運博は、「近代中国に移入された日本借用語」(2003)において、中国語語彙の一部が日本語からの借用に由来していることを明らかにした。

劉曙野は、『中国語、日本語、韓国語—その源流を探す—』(2005)という著書のなかで、日中漢字の語源と発展を分析し、両国間の語彙交流の歴史を述べている。また、夏曉麗は「現代漢語の中の日本外来語研究」(2006)という論文を発表した。

劉凡夫は『漢字を媒介にする新語の伝播—近代中日観語彙交渉の研究』(2009)を出版し、そのなかで日本語から流入した漢語の生成過程や影響を論証した。また、劉凡夫の「以黄遵憲『日本国志』(1895)為語料的日語借詞研究」(2012)は、黄遵憲の『日本国志』(1895)を研究資料として語彙調査を行った結果、559語を日本語からの借用語であると判定した。そのうえで、彼は、559語のうち、178語が既存の日本語であり、381語が幕末・明治期に作られた新漢字語であると指摘している。

このように、21世紀に入り論文や書籍が次々と発表されたことによって、和製漢語研究が大きく進展したのである。

2.3 和製新漢語の提起

前節で概観したように、数多くの論文や著作が次々と発表されるようになったことで、「和製漢語」に関する研究は大きく前進した。歴史上、近代は日中両国における言語交流と文化交流の一大転換点である。言うまでもなく、近代に西洋諸国からもたらされた

先進文明や思想は、日中両国間の言語的、文化的交流に影響を与えた。この近代における日中両国間のこれらの分野における交流は、隋・唐の時代以来、過去に例を見ないのであった。したがって、本研究では、近代という、時代状況から考察を開始する。そのためには、近代文明から影響を受けて誕生した新しい和製漢語、つまり本研究で提起する「和製新漢語」に焦点を当てて、これらに関する詳細かつ網羅的な研究を行う必要がある。

本研究では、先行研究の問題点を踏まえた上で、「和製新漢語」を提起し、これに対する定義付けを試みる。はじめに、「和製新漢語」における「和製」に対し説明を加えておくことにする。「和製」と意味的に類似する語に「日本製」があるが、本研究が「日本製」ではなく「和製」を選択した理由は、以下のとおりである。

先行研究で指摘されているように、「和」という字は、漢字「倭」に代わって使用されるようになったもので、基本的に「和」は、日本国の古称を表すことができるだけでなく、日本文化にも言及することができる。したがって、「日本」という言い回しよりも、日本そのものに言及し、かつ、日本の文化的特徴にも言及できる漢字「和」を冠する「和製」の使用が妥当である。加えて、「和製」という語が初出したのは1800年であり、日本の近代化の時期に近い。つまり、「和製」という用語は、近代化推進のために、西洋の近代文明を取り入れた際に創り出された言葉である。このことから、近代に創出された「和製」という用語を、本研究の対象である近代の代名詞的用語として用いること取りは妥当であると言える。

次に、「新漢語」の「新」が指す概念の範囲を見ていく。先行研究の中には、日中における「新漢語」に対する解釈や定義が見られる。しかし、より広い視野で「新漢語」を見るためには、前述した「新漢語」という用語の概念に存在するいくつかの問題点を明らかにする必要がある。日本側の研究として鈴木（1978、1983）に、中国側の研究として沈（1994）と孫（2015）に注目したい。

まずは日本側の研究である。鈴木（1978）が述べた「新漢語」とは、漢字を用いて新しく創出された新造語であり、かつ、幕末明治期に使われている漢語のうち、日中両国における従来の文献資料にその典拠を持たないものである。鈴木は、新漢語を定義づける際に、典拠の有無のみを問題としている。その結果、新漢語の定義づけにおいて、従来の文献資料には存在しなかった新しい意味が認められるかどうかという点が等閑視されている。実際には、近代西洋からの新思想や新知識などを表す際に、古典書籍や文献

資料を典拠とする漢語を流用して、これらに新しい意味を付与した事例がある。この事例に当てはまる漢語は、これらが従来の文献資料に典拠を持っているという点で、鈴木という「新漢語」には属しえないことになる。しかし、西洋の新思想や新知識を表すために、新しい意味が与えられているという点では、このような漢語は「新漢語」と見なされうる。このように、鈴木 の定義では、「新漢語」の諸相を網羅的に説明、記述することができない。

また、鈴木 (1983) では、「新漢語」を「日本漢語」と呼称している。ところが、「日本漢語」に生起する「日本」がどのような意味で用いられているのかが不明であるため、幾通りもの解釈が可能である。ある漢語が日本で作られた (日本=場所) ということか、ある漢語が日本人によって作られた (日本=日本人)、あるいは、日本人の誰がその「新漢語」を作ったのか、日本のどこで作られたのかが不明瞭である。

次に、中国側の研究に着目する。先述したように、沈 (1994) では、「新漢語」が、19世紀に始まる本格的な西学東漸を契機として漢字文化圏において創造された一連の新しい語彙を指すものとして定義されている。さらに詳細に述べると、彼のいう「新漢語」が指す範囲は、西洋からの新文明や新知識を取り入れるために、中国の既存漢字を用いて日本と中国で新しく創出された語ということになる。

しかし、沈の定義では、これらの「新漢語」が創出された期間への言及が見られない。19世紀は、おおよそ近代期にあたるため、新漢語の創出時期は、19世紀であると推定される。しかし、その後、「新漢語」の創出がいつ、どの時点で終わりを見せたのかが不明である。加えて、それらの新漢語の語形と意味の区別をもとに定義していない。つまり、語形が新しく創出されたのか、中国語に存在していた語形に西洋からの新文明や新知識を取り入れるために新しい意味を付加したということなのかが定義において区別されていない。

次に、21世紀の研究における定義を見てみる。孫 (2015) において、「新漢語」は、17世紀以来、西洋の諸概念を言い表すため中国または日本で生成された新しい訳語・漢字語を指すものであると定義されている。しかし、そこでいう「中国または日本で生成された新しい訳語・漢字語」という定義においても、従来の漢字語に比べて、どの部分が新しいのかということが明らかではない。「新漢語」が西洋の諸概念を表すために創出されたものである以上、「新漢語」の意味は、西洋の諸概念を表すためのものである。しかし、語形に対しては説明が加えられていない。

以上の「新漢語」の定義をみると、1978年から2015年にかけて、「新漢語」に対する解釈や定義は漸進的に精緻化されていったことがわかる。しかし、先行研究の定義では、

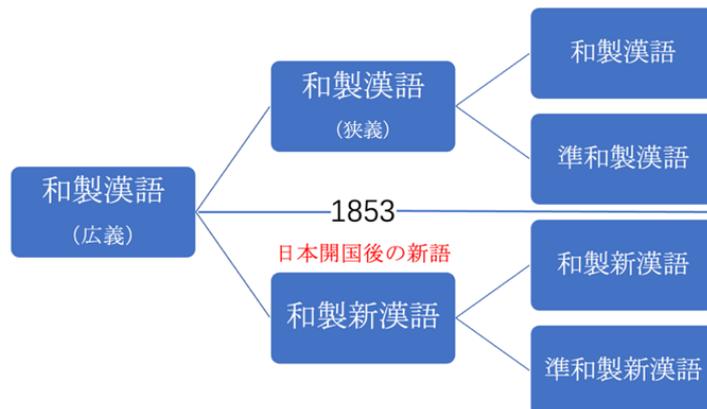
(1) 意味的側面、(2) 「日本製」・「日本漢語」における「日本」が指す具体的内容、(3) 創出時期、(4) 新漢語において何が新しいのか、が不明である。加えて、先行研究では、語形と意味の区別が十分なされていない。

そこで、本研究では、語形と意味を区別したうえで分析を行う必要があると考える。そして、より広い視野で「新漢語」を見るために、上述した「新漢語」の定義を参考しながら、「新」の意味を「従来の漢籍に出所がなく、語形と意味が新しいもの」と捉える。その上で、本研究では「和製新漢語」を、「明治以降、漢語の語構造をもとに日本で新たに造られたもの、または、中国語に存在した語に新しい意味を付加して用いたもの」ということにする。

近代の「和製新漢語」の語形に関する研究は多数あるものの、語形と意味の区分を考慮して詳しく考察した研究は多くない。本研究は、中国語に存在した語に新しい意味を付加して用いたものを明示するために、それらを「準和製新漢語」という概念で捉えることを提案する。「準和製新漢語」は、近代に新しい意味を付与されたという点では「和製新漢語」と見なされうるが、中国の古典に典拠を持つ語形であるという点では和製新漢語としては変種である。

「準和製新漢語」の例を挙げておく。例えば、中国の漢籍において、「民主」は「民ノ主」、すなわち、人民の支配者を意味する。しかし、後年、「民主」に「デモクラシー」(Democracy)の意味(一国の主権が人民にあること)が新しく与えられ、「民主」が政治や制度の意味で用いられるようになったのである(このような意味で「民主」を初めて用いたのは、西周(日本の啓蒙思想家、西洋哲学者)である)。

以上をもとに和製漢語の体系を図表化すると以下のとおりとなる。



「和製新漢語」の定義の中に「明治以降」という但し書きがついている点に再度注意しておきたい。「和製漢新語」は、西洋の近代文明を導入して、新思想、新知識などを受容し、日本を近代国家へと生まれ変わらせるために創出されたものであり、西洋の近代文明の導入は、明治時代の幕開けとともに始まったのである。

上記の図表に関して、広義の「和製漢語」と狭義の「和製漢語」の区別に触れておかなければならない。広義の「和製漢語」と狭義の「和製漢語」の相違は、それぞれの成立の時期が異なっている点にある。狭義の「和製漢語」は、古代に創出されたものであり、日中語彙交流の最初期から存在するものである。一方、広義の「和製漢語」は、狭義の「和製漢語」と「和製新漢語」を合わせたものである。その意味において、狭義の「和製漢語」は、「和製旧漢語」と呼ぶことができる。

2.4 本章のまとめ

本章では、先行研究を概観した。そうすることで、「和製漢語」研究の課題が浮き彫りになった。これまでの研究の多くは、「和製漢語」の形成背景及びその分類に重きを置いてきた。しかし、その対象範囲を具体化したり、中国語に受容された「和製漢語」を詳しく分析した研究は少ない。加えて、中国側での「和製新漢語」の受容の動機と、受容による中国語への影響に焦点を当てた研究や、非中国語母語話者（非漢字文化圏）の観点からの分析も不足していることから、「和製漢語」には再考の余地があると考えられる。

特筆すべきは、本研究で提起した「和製新漢語」という概念に焦点を当てた研究が少なかった点である。特に、「和製新漢語」の造語法に関する研究は十分ではない。近代の日本は、その近代化の過程で、西洋から先進的な知識、思想や概念などを翻訳して取り

入れた。「和製新漢語」はその翻訳活動から生まれたものであり、その一部が中国語に持ち込まれた。それらが中国語に定着した結果、同じ漢字文化圏で近代化に必要な知識、思想や概念などが共有されることになった。その点において、「和製新漢語」に関する研究を行うことには大きな意義がある。

第1章でも述べたように、本研究では、先行研究を踏まえながら、近代において西洋の新しい概念・事物などを表現した「和製新漢語」に着目する。非中国語母語話者（非漢字文化圏）と中国語母語話者の2つの観点から、和製新漢語の流入の背景や経路の解明を試みるとともに、造語法をもとに和製新漢語の構造的な特徴について考察する。また、出版年の異なる複数の版本を比較することにより、中国語に受容された「和製新漢語」がその後どのような変遷を辿っていったかという点も検討したい。

第3章 中国における和製新漢語の流入

3.1 近代の社会背景

18世紀頃、欧米列強国は産業革命⁵の影響で、商工業は目覚ましい発展がみられた。それらの国々は海外に植民地支配の拡大をもとめて、市場拡大を急いでいた。また、大量生産された工業商品を外国に輸出するために、東南アジアに目を向けた。そのため、近代の日中は、領土の保全も危うくなった。日本は1854年のペリー来航⁶によって、中国は1842年のアヘン戦争⁷の敗北によって、両国とも開国をよぎなくされたのである。まず、日本の開国を見てみる。ペリー来航によって、日本において当時政治権力を掌握していた幕府は強い危機感を持つようになった。列強は、海を自由に走る蒸気船と遠くからでも目標を狙い撃ちできる大砲によって清朝を打ち破った。この列強の武力脅威の矛先がひとたび日本に向けば、日本は清朝と同様の道をたどることになる。そこで、日本は、この武力脅威に敏感に反応し、日本を守るという思いを持って、西洋文明に学ぶ姿勢への政策に転じた。

1868年に幕府から政権を受け継いだ明治政府は、政権を引き継ぐと、西洋に倣って中央集権国家の建設を目指し、次々と新政策⁸を実行した。また、明治政府は、学問分野から産業分野に至るまで、従来の日本文化とはまったく異なる西洋文明を受け入れるために、欧米の知識人たちを招いた。それによって文明開化した明治時代の日本は、首尾よく西洋の技術や文化を取り入れることができた。この動きこそが明治維新であり、明治維新によって日本は本格的に近代化の道を歩み始めた。近代国家を目指すために、明治政府は「富国強兵」⁹や「脱亜入欧」¹⁰という国策に基づき、積極的に西洋諸国に様々な学びを求め、政治制度から経済システム、科学技術などに至る諸分野において短期間で大

⁵ 産業革命 (Industrial Revolution) : 18世紀後半にイギリスから始まった手工業に替わる機械の発明、蒸気機関の出現、石炭利用によるエネルギー革命、技術革新による一連の産業構造の変化および経済発展のことである。産業革命は時代を近代へと推し進め、資本主義生産様式を確立させ、基本的な生産基盤を農業社会から工業社会へと転換させた。

⁶ ペリー来航 : 1853年、東インド艦隊司令長官のペリーは4隻の軍艦で浦賀に入港した。ペリーは日本の開国を求めるアメリカ大統領フィルモアの国書を提出し、開国を迫った。

⁷ アヘン戦争 : 1840年、アヘン密貿易をめぐる行われたイギリスの中国に対する侵略戦争。

⁸ 新政策には、版籍奉還、廃藩置県、徴兵制度などの措置が含まれる。

⁹ 富国強兵 : 国を富ませ、兵力を強めること。

¹⁰ 脱亜入欧 : アジアを離れ、ヨーロッパ諸国の仲間入りを目指すこと。

改革を行ったため、諸外国からは感嘆の目で見られた。このようにして成し遂げられた明治維新での日本の変革は諸外国に影響を与え、特にアジア諸国では、この明治維新を模範に改革運動や独立運動が盛んになった。

他方、当時の中国では、19世紀に清朝の支配が衰え、大規模な社会動乱と経済停滞が生じ、さらに食糧供給が逼迫していた。このような内憂外患状態にある清朝の国力は、急速に衰えていった。中国では鎖国が破られると、列強各国の侵略の対象となった。特にアヘン戦争終結後の1842年には、清朝にとって初めての不平等条約である「南京条約」¹¹が締結された。その後、清朝は1844年にフランスと「黄埔条約」¹²を、アメリカと「望厦条約」¹³を締結したことで、イギリスをはじめとした列強が中国に侵出することとなった。さらに、動揺が続いていた清朝は日清戦争で敗北し、日本と「下関条約」¹⁴を締結した。日清戦争で勝利した日本は、アジアの近代国家と認められ、国際的地位が向上し、受け取った賠償金で国内産業を発展させ、本格的な工業化へと歩んでいった。その結果、清朝は国土が分割され、半植民地状態に陥るとともに国力も衰えた。国内では政治、経済、軍事、教育の諸方面で危機に陥っていった。

ここで、近代化について考察する前に、本研究における「近代」の範囲を確認しておく。「近代」という言葉は日中において、その具体的な時期が一致していない。日本では、「近代」という言葉は明治維新(1868年)から第2次世界大戦終了(1945年)までの範囲を指している。それに対して、中国ではアヘン戦争(1840年)を近代の始まりとし、五四運動(1919年)までの期間を指している。

3.1.1 日本における近代化

日本は1639年の鎖国以来、オランダと中国以外の海外諸国との貿易を断っていた。200年後の19世紀中頃、日本の港に「黒船」と呼ばれる蒸気船がしばしば現れ、1853年、

¹¹ 南京条約：イギリスへの香港島の割譲や上海など5港の開港、領事裁判権の承認、関税自主権の喪失などがもたらされた条約。

¹² 黄埔条約：1844年、中国広州市付近の黄埔に停泊するフランス軍艦アルシメード号の艦上で、フランスと清政府との間で結ばれた通商条約。

¹³ 望厦条約：1844年、中国、マカオ近くの望厦村で、清政府とアメリカの間で結ばれた最初の条約。いわゆる不平等条約で、アメリカはこれにより、イギリスが南京(ナンキン)条約とその追加・補足条約で獲得した権利(五港開港、領事裁判権、関税協定権、開港場における土地租借権と家屋・教会の建設権など)のほとんどを獲得した。

¹⁴ 下関条約：イギリスなど列強に対して外債を発行し、借款と関税収入などを担保にした条約。これによって列強の諸国は、鉄道敷設権や鉱山採掘権などを獲得する。また、香港、マカオなど中国の主要な港を清朝政府から租借という形で奪い取った。

マシュー・ペリーが率いるアメリカ合衆国海軍東インド艦隊の蒸気船2隻を含む艦船4隻が江戸湾に入った。その目的は、200年にわたって鎖国を続けていた日本を開国させ、海外と貿易させるためである。そして日本に開港を迫り、遂に1854年、日米和親条約が結ばれ開国に導かれた。それまで260余年も続いた江戸幕府は、欧米列強による開国を起因として倒壊することとなった。

欧米列強によるアジアの植民地支配の拡大は、明治維新のあとも続き、隣国の清朝は次第に列強に浸食され、領土の保全も危うくなった。日本もまた幕末に不平等条約を結ばされるなど脅威にさらされていた。このような国際情勢のなかで、日本は列強の脅威に敏感に反応し、日本を守るという思いを持って、西洋文明に学ぶ姿勢へと政策を転じた。風雲さかまく激動の中で、日本の有志たちは国のために奔走し、やがて新時代を迎えることとなった。

明治元年（1868年）に、明治天皇は五箇条の御誓文を発し、世界の文明を取り入れ近代的な立憲国家として発展していく方針を諸外国に対して示した。同年、江戸は東京と改称され、新しい時代に入ったという実感が待たれるに至った。

明治政府は政権を打ち立てると、西洋にならって中央集権国家の建設を目指し、版籍奉還、廃藩置県、徴兵制度などの新政策を次々に実行していった。民間でも、廃藩置県の前後から、中村正直が翻訳した『西国立志編』（1871）や、福沢諭吉の『学問のすゝめ』（1872）などが広く読まれ、多くの新聞や雑誌が発刊された。私立の学校や塾も開かれて、欧米諸国の生活や風俗、思想を紹介するようになった。人々の生活にも大きな変化が生じ、東京などの都市では、文明開化の流行が生まれた。学問から産業まで幅広く西洋化した文明開化の日本は、社会を大きく変化させていった。

こうして、日本は明治維新以来、西洋諸国に学び、積極的に先進技術や文化を導入することに成功した。新しい教育制度や法律制度も西洋から取り入れ、政治革新にも成功し、富国強兵を進め、卓越した成功を収めることになったのである。

3.1.2 中国における近代化

一方、当時の中国は大きな危機に直面していた。17世紀から18世紀の清朝は「康乾盛世」¹⁵と呼ばれ、国力が盛んで繁栄した。その時代の中国は全盛期と言うことができ、

¹⁵ 清の康熙帝（第4代）、雍正帝（第5代）、乾隆帝（第6代）の治世より、平和が保たれ、文化が興隆し、国力が盛んで繁栄した時代であった。その時期、清の領土は最大版図に達した。

人口も急増した。しかし、18世紀末から、国内の社会不安や外圧などから次第に動揺が顕わになり、長い衰退期に入っていった。

19世紀になると、イギリスは中国から大量の茶を買い入れるようになり、輸入超過の額を銀で支払わなければならなくなった。そのため、大量の銀が清朝に流出し、対中貿易は赤字になった。イギリスは清朝から銀の回収をはかるため、清朝国内のアヘンを吸う習慣に目をつけた。清朝では、雍正時代以来アヘンを禁止していた。そこでイギリスは、インドで栽培されたアヘンを清朝民間に密輸し、それによって得た銀で中国の茶を買うようにした。その結果、中国ではアヘン吸飲者が激増し、銀の価値も暴騰し、財政難に陥った。清朝政府は1729年以降、5回の禁止令を出したが、効果はあがらなかった。そのような状況で、清朝はアヘンの取り締まりのために、1839年に林則徐を広州に派遣し、イギリス商人とのアヘン強制買上げ貿易を厳禁した。この清朝の強硬策に反発したイギリスは、それを不当として、武力で対抗したため、翌年の1840年にアヘン戦争が勃発することとなった。清朝はイギリスに敗れ、1842年に南京条約を調印した。南京条約の内容は公行廃止、香港島割譲、5港開港を含むものであった。その後、1843年に追加条約でイギリスは治外法権を獲得し、フランスとアメリカも1844年に条約を結んで同様の権利を得た。中国は開国と自由貿易を強制され、半植民地化へ向かっていった。アヘン戦争は、中国社会の封建制度に警鐘を鳴らすものであり、近代化の道を進ませる結果をもたらしたのである。

アヘン戦争後の中国の情勢について、區(2009)は、次のように述べている。

「中国に現れた改革動向を見れば、基本的に従来の「大一統」の王朝体制を維持するという枠内にあったのである。魏源の「師夷長技以制夷」に代表された思想には、世界への開放的態度、科学技術の面で西洋に学ぶ必要性の自覚、欧米の民主政治制度への正面評価、国の運命を憂慮する愛国的な意識が示されてはいるが、しいて近代化に対する萌芽的な自覚だと言える。曾国藩、李鴻章らによって推進された洋務運動は、軍事と産業の近代化を進め、科学技術に立脚した教育を興し、近代化のための要素を育てたが、あくまでも従来の王朝体制を維持するための「自強」でおり、近代国家の形成を目指す運動ではなかった。鄭観応、王韜ら早期の維新派は、「公法」の体制に入って万国に列するという主張において、華夏中心主義放棄の思想が現れており、また政治と経済面の改革を求める志向において、洋務派の「自強」思考を超えたが、「中体西用」の方針を脱し

たのではない。そこでは、中国民族のアイデンティティ形成、または国民形成の意識が現われていない。近代国家を作るというナショナリズム運動の発生は、少なくとも日清戦争の衝撃を受けた後である。」(p. 1)

確かに、19世紀の50年代、60年代の中国では、太平天国運動¹⁶及び各地の騒乱が起こり、曾国藩、李鴻章、張之洞らの洋務派官僚により、産業の育成や軍備の近代化を図る洋務運動¹⁷と呼ばれる動きが活発化した。李鴻章も、外交において「師夷長技以制夷」¹⁸という政策を取るべきだと明言した。

洋務運動は積極的に欧米の先進的な知識や技術などを摂取し、軍事関係の工場を設立するものであった。洋務運動の時期は、近代化の希望を託された時期であったが、それは表面的な受け入れに留まり、根底にある近代化の思想や制度などが取り入れられることはなかった。政治体制の維持を前提として近代化しようとしたために、表面的な改革に終わったのである。

中国は1840年から1900年にかけてのおよそ60年の間に、5回の大規模な侵略戦争を受け、数多くの不平等条約を締結し、領土の割譲も強いられることとなった。西洋列強の侵略を受けた中国では、侵略に抵抗して国家を強くするためには、強大な軍事力を持つだけでなく、国家の政体を整えることも必要であるという認識が生まれた。そこで、近代西洋の学問を取り入れることを始めた。中国の多くの知識人たちは、「国を救い、民族の生存を求める」という信念を持ち、中国を振興させるために、近代的な改革を経た隣国の日本に注目したのである。

日本の明治維新をモデルとし、明治維新と同様の近代化革命を目指した。日本の明治維新の影響で、中国では「戊戌の変法」¹⁹が起こった。中国の知識人たちは、近代化のモデルを日本に求めたうえで、日本の諸分野から学びを得る一環として、日本をモデルとした教育の近代化を進めていった。近代化が進められる中で、留学生派遣の問題が取り上げられるようになった。中国の近代化を考えるうえで欠かすことができない、日本へ

¹⁶ 太平天国運動：1851年、清朝に対して、太平天国という組織が揚子江流域を中心に広く各地で起こした大規模な反乱。洪秀全を指導者とし、1864年に鎮圧されるまでおよそ13年間続いた。

¹⁷ 洋務運動：清朝末期、ヨーロッパの近代文明などの技術は取り入れるが、思想は中国の伝統を維持するとともに、国力増強を目指した運動。曾国藩・李鴻章・左宗棠らにより推進された。

¹⁸ 師夷長技以制夷：夷の長技を以て、夷を制する。

¹⁹ 戊戌の変法：清朝末期に実行された一連の政治改革の総称。伝統的社会体制を変革する必要性に伴って、新しい社会体制を樹立しようとした。

の留学生派遣についての詳細は、次の3.2で取り扱うことにする。

以上、日中両国における近代化の経緯を概観した。近代における日中の接触を再度確認しておこう。相次ぐ列強各国の侵入により動乱が続いていた清朝は、それらの国々との条約によって19世紀末に国土が分割され、半植民地状態に陥った。日清戦争で勝利した日本は、アジアの近代国家と認められ、国際的地位が向上し、戦争による賠償金で国内産業を発展させ、本格的な工業化の道を歩んでいった。中国は、そのような日本に近代化のための方策を求めたのである。

3.2 近代の日本留学の高まり

3.2.1 日本への留学の契機

前節で述べたように、近代に入ると、清朝の国力は衰えていき、国内では政治、経済、軍事、教育などの諸方面で危機的状況になった。明治維新の影響と日清戦争の敗北の影響で「戊戌の変法」が起こるといふ亡国の危機感を目の前にして、中国の知識人たちは、近代化を完成した日本にモデルを求め、諸分野に学びの意識を深めていった。日本をモデルとする教育の近代化を進める過程で、留学生派遣の問題が取り上げられるようになった。中国の近代化と日本への留学生派遣とは不可分の関係にあった。

洋務運動の提唱者で、当時の清朝政府の中で高官の地位にあった清末の張之洞は、日本への留学生派遣を主張し、教育の重要性を強く説いた。張は自ら著した『勸学篇』(1898)の中で日本への留学生派遣を積極的に提言したのであるが、実際、その提言は清朝の留学生派遣の方針に大きな影響を与えた。『勸学篇』の中で、張は以下のように説いている。

“出洋一年，胜于读西书五年，此赵营平百闻不如一见之说也。入外国学堂，一年胜于中国学堂三年，此孟子置之庄岳之说也。游学之益幼童不如通人，庶僚不如亲贵...。日本小国耳，何兴之暴也？伊藤、山县、榎本、陆奥诸人，皆二十年前出洋之学生也。愤其国为西洋所胁，率其徒百余人，分诣德、法、英诸国。或学政治、工商，或学水陆兵法。学成而归，用为将相。政事一变，雄视东方... 至游学之国，西洋不如东洋。

一、路近省费，可多遣。

一、去华近，易考察。

一、东文近于中文，易通晓。

一、西学甚繁，凡西学不切要者，东人已删节而酌改之。中东情势风俗相近，易仿行，事

半功倍，无过于此” (pp. 5-6)

訳：(1年間の海外留学は、西洋の書物を5年間読むより勝る。これは趙嘗平の「百聞は一見に如かず」の説による。海外の学校に通う1年間は、中国の学校に通う3年間より勝る。これは孟子の見方である。留学の利点について、子供より若者のほうがよくわかっていて、庶民より高位の人のほうがよくわかっている。日本は小さな国なのに、なぜ発展してきたのか。伊藤、山県、榎本、陸奥などは、いずれも30年前に海外に行った留学生である。西洋の諸国の脅威を恐れた日本は、100人以上をドイツ、フランス、イギリスなどに派遣した。政治、工商、兵法などの知識を学ばせ、学業修了後に帰国させて指導者とした。アジア諸国の状況を見てみると、留学先の国々としては、西洋より東洋のほうが多い。

一、路近くして費をはぶき、多くつかわすべし。

一、華を去ることちかくして、考察しやすし。

一、東文は中文にちかくして、通曉しやすし。

一、西学は甚だ繁、およそ西学の切要ならざるものは、東人すでに刪節して、これを酌解す。中・東の情勢、風俗相ちかく、彷徨しやすし。事半ばにして、功倍すること、これにすぐるものなし。)

確かに、清朝政府は日清戦争の後、巨額の賠償金を日本に支払う必要があることから、財政的な苦境に置かれ、拠出可能な財源に限りがあった。そうした状況にあった清朝政府は、中国からの距離が近い日本では留学生派遣にかかる経費を抑えることができ、多くの留学生を派遣できると考えたのである。

また、『勸学篇』では、留学生の対象について、以下のように述べている。

“遊学之益，幼童不如通人，庶僚不如親貴。” (p. 5)

訳：(留学生の対象は子供より知識人がよい。庶民と官僚より貴族がよい。)

『勸学篇』は当時の政治状況のもとで、守旧派に親しみ、革新派を批判しようとする考えを表すために書かれたものであるが、張之洞の留学生派遣に関するこの主張は、確

かに教育近代化の発展を促進するものであった。そして、『張之洞全集』における張之洞の公文書を見てみると、彼が1899年から日本への留学に深い関心を持っていたことが判明する。張之洞は渡日留学生監督として銭恂に提出した公文書の中で、次のように指摘している。

“人才出則國家強，是為目前至要至急之事。” (p. 214)

訳：(人材が世に出ると、国家は強くなる。それが当面の急務である。)

留学生の派遣は国家の進歩のための人材育成の策であるというのが張之洞の基本的な主張であったと言える。張之洞は清末の政治家として、中国の教育の近代化に、特に留学生派遣による近代の日中教育交流に貢献した。

また、近代の思想家、革命家、政治家、教育者、清末戊戌変法の指導者の一人で、民国の多くの政治党派の創始者である梁啓超は、『論学日本文之益』(1899)の中で、日本語の習得について、「而學日本文者，數日而小成，數月而大成」(日本語を学ぶのは数日で小成し、数月で大成する)と指摘している。

清末の思想家・政治家として活躍した康有為も、日本への留学を勧めていた。『康有為政論集』(1877)では、以下の記述がある。

“我今欲變法而章程未具，諸學無人。欲舉事，無由措理。非派才俊出洋游學，不足以供變政之用。(中略)臣以為日本變法立學，確有成效，中華欲游學易成，必自日本始。”

(p. 250)

訳：(只今、私は変法を行いたいだが、規約はまだ整っていない。諸学に通じた人がいないので、変法をやろうとしても、やり方が見つからない。外国に派遣留学させないと、変法の役に立たないと考える。(中略)日本の変法と学制の変革には効果が見られたから、中国が成功しようと思うならば、日本への留学生の派遣から始めることである。)

このように、康有為も張之洞と同じような考えから、日本への留学を勧めていた。清朝の政府も、西洋の学問を取り入れるには近代化を遂げた日本に学ぶべきと考え、日本への留学に対する期待感を高めていったのである。

さらに、1898年に光緒帝は日本への留学の重要性に直面にして、日本の天皇に国書を

送った。『清光緒朝中日交渉史料』²⁰における国書では、以下のように記されている。

“現在貴國駐京使臣矢野文雄、到華以来、凡遇兩國交渉之事、無不準情酌理、歸于公平、已徵鄰好。曩復貽書總理各國事務衙門、備述貴國政府關念中國需才孔亟願中國選派學生前赴貴國學堂肄習各種學問、尤佩大皇帝休戚相關之誼、曷勝感謝。朕已諭令總理各國事務王大臣、與貴國駐京使臣商訂章程、認真選派、以副大皇帝盛意。”(p. 994)

訳：(只今、貴国駐華公使矢野文雄は中国に着任して以来、両国の交渉問題に関わるあらゆる事柄を斟酌し解決している。公平であり、両国友好の気持ちを持っている。貴国の政府は中国の人材育成に情熱を持っているから、中国は留学生を選んで、貴国の学堂に派遣し、各種の学問を習わせることを望むと述べた。特に天皇との絆に感謝している。朕はすでに総理各国事務王大臣に、貴国の駐京使臣と留学生派遣の規則について相談し、留学生を慎重に選び派遣させるように命じた。天皇に対し厚意を込めて感謝する。)

その後、1903年になると、清朝は「遊学卒業生奨励規定」を制定して、近代化を目指した「新政」のために法政や実業を学ぶ学生を派遣するようになったが、軍事関係の多数の学生派遣も継続的に行われた。こうして、日本への留学が最高潮に達したのである。1904年には「奏定学堂章程」の頒布が始まり、本格的に近代教育の要たる学校制度が導入された。²¹その中に、日本の近代化における教育の経験を参考にして作られた教育改革案があった。日本への留学の奨励は、政府の新政下にあって極めて重要な意味をもっており、官費留学生のみならず、私費による留学や遊歴も奨励した。優秀な帰国留学生に期待し、官費留学生・私費留学生の帰国後の待遇を保障した。清朝政府が日本への留学生派遣を推進したことの背景には、次のような事情があった。

- (A) 日本人は、西洋の書物に書かれた内容をすでに取捨選択しており、これらの内容は、明晰な日本語で書かれている。
- (B) 日本は風俗習慣や気候環境などが中国と凡そ同じである。
- (C) 両国は、漢字を使用するという点が共通であるため、日本での留学生活において高い学習効果を上げることができる。

²⁰ 『清光緒朝中日交渉史料』(1932-33年刊本の縮刷影印) [北平故宫博物院 編] 文海出版社。

²¹ 中国で初めて施行された学制は「欽定学堂章程」を基礎に改訂された。

(D) 日本以外の国に留学生を派遣した場合と比較して、半分の労力で倍の成果をあげることができる。

(A)から(D)の事情により、清朝政府は、近代の知識を迅速かつ効率的に獲得するという目的を達成するには、欧米留学よりも日本留学に利があると考えた。清朝の支配者たちは、隣国の日本を手本として、従来の封建的な秩序の維持「中学」を主体にしながらも、技術工芸の発展「西学」をも重んじ、両者を折衷した「中体西用」論を持っていた。彼らにとって、封建制を維持するためには、西洋文化を直接学ぶよりも、日本から間接的に学ぶほうが安全であった。清朝滅亡後も、中国は本格的な近代化の推進を継続し、留学生を引き続き日本に派遣することとなった。

以上、清朝政府による日本への留学生派遣を清朝側の観点から概観した。この点を日本側から見たものとして、実藤（1973）がある。実藤は、清朝政府が留学生派遣先を日本に決定した動機を以下のように捉えている。

第一に、西洋の進んだ文明の吸収に際して、日本はすでに糟を取り除き、成果を取り入れていた。そのため、本家の西洋に学ぶより、日本に学んだほうがよりいっそう効率的である。

第二に、中国も日本も共に漢字文化圏に所属し、両者ともに漢字を使用しているということがある。

第三に、中日両国の習慣には、共通点が多くみられるため、留学生はすぐに日本の生活に慣れることができる。

第四に、日本は、地理的に中国と一衣帯水の関係にあるので、距離的に近く、清朝は費用の面からも多くの留学生を派遣できる。

もう一つの指摘が阿部（1990）に見られる。阿部は「日本留学問題がクローズアップされてくるのは、すでにみたとおり日清戦争敗北後の変法自強運動の時期である。康有為らは「変法」=政治改革と並行して「興学」=近代教育の導入を主張し、この近代教育振興の補助手段として海外留学、ことに日本への留学の必要性を力説した。」(p. 336)と述べている。

3.2.2 中国人留学生の教育とその成果

歴史を振り返ると、近代の日本では外国からの日本への留学生の受け入れは、1883年に朝鮮からの留学生40余名を慶應義塾が受け入れた頃から始まる。

日本政府による中国人留学生の受け入れは、1896年に開始され、初年度には13人の留学生が来日した²²。日本の貴族院議長として近衛篤磨²³などが中国を訪問し、清朝政府の高官と面会して、日本への留学生を派遣するよう提案した。

その後、駐日公使の裕庚²⁴からの要請を受けた西園寺公望²⁵が、中国人留学生13名の教育を要請され、彼らの身元は、東京高等師範学校校長嘉納治五郎の手に委ねられた。この13人は、当時特別試験によって選抜され、嘉納治五郎の塾で3年間日本語、化学、物理、数学などを学んだ。

やがて、嘉納校長は、張之洞らから留学生教育の委託を要請され、留学生の受け入れ体制の整備に尽力した。また、近衛に続き、嘉納校長も1902年に3ヶ月にわたり中国各地を訪問し、張之洞など清朝政府高官と会談、留学生の派遣と教育に関する提言を行った。清朝政府が留学生派遣に本格的に取り組んだ背景には、清朝政府側の経済的事情に加え、日本側からの熱心な働きかけもあったのである。

李・田淵（1997）によると、明治政府によって中国人留学生の受け入れ規定（1901年の「文部省直轄学校外国人特別入学規定」）が策定されると、日本国内では多くの留学生教育のための特設機関が設立された。当時の中国人留学生教育機関の中で最も規模が大きく、影響力も強かったのは嘉納治五郎が創立した弘文学院であったが、ここでは、普通科²⁶と速成師範科²⁷で数多くの授業が行われている。各留学生教育機関の教科を見ると、師範科、法政科、理財科、商科、警務科が中心となっていることがわかる。注意すべきは、そのいずれも清朝政府の「新政」で急遽人材が必要となった分野である。

1902年から1910年までの8年間に入学を許可された者は7192名で、卒業生は3810

²² 13人の留学生とは、唐宝鏢、朱忠光、胡宗瀛、戢翼翬、呂烈輝、呂烈煌、馮閱模、金維新、劉麟、韓籌南、李清澄、王某、趙某である。

²³ 近衛篤磨：明治期の政治家。1885年ドイツに留学し、帰国後貴族院で活躍し、貴族院議長と枢密顧問官を歴任した。

²⁴ 裕庚：科挙の優貢出身。光緒21年（1895年）、広東省の恵潮嘉道道員・四品京堂銜となる。同年、出使日本大臣（駐日公使）として日本に赴任。

²⁵ 西園寺公望：当時の外務大臣、文部大臣兼任。

²⁶ 普通科の授業科目：修身、日語、地理、歴史、算術、幾何学、代数学、三角学、物理・化学、植物学、動物学、図面、体操、英語。

²⁷ 速成師範科の授業科目：倫理学、口語、算術、地理・歴史、博物学、物理・化学、音楽、体操、心理学、教育学、各科教授法、学校管理法、日本教育制度、実習授業。

名に達した。さらに、日清戦争以降は主に中国からの留学生が増加し、1906年頃には全体で8000名に達した。早稲田大学などでは清国留学生部という中国人留学生向けの別科があった。

そして、1896年の13名の最初の留学生が日本に派遣された後、日本への留学者数は、年を追うごとに増えていった。その実態を実藤（1970:544）の表に基づいて概観しておく。以下の図1は、来日した中国人留学生の人数の推移を示したものである。

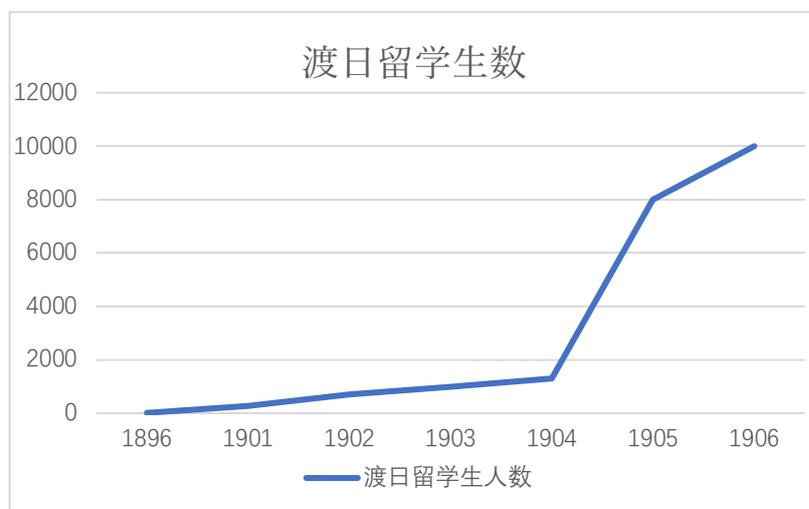


図1：1896年から1906年に来日した中国人留学生数の推移

留学生の受け入れが開始された1896年の3年後にあたる1899年には、来日した留学生の数が当初の9倍である117名となり、その後、留学生の数は年を経るごとに増加した。その結果、1904年には約3000名以上、1906年には約10000名に急増した。1896年から1937年までの42年間における中国人の日本留学生数は、総計61230名に達した。

このグラフからわかるように、1904年から学生が急増した。その原因は次の点に求めることができる。第一に、中国国内では、20世紀の初頭から各政党が率いる革命運動が進展し、その革命に参画するために渡日し、革命参画のための素地を養った。第二に、清朝政府が自ら改革の必要に迫られ、新政を実施し、多くの留学生を渡日させた。第三に、それまでの政治制度と官僚制度を刷新するために、既に始まっていた洋務運動などの西洋文明を受け入れ、制度や技術を革新しようとする動きに伴って、官僚選抜のために課してきた科挙が廃止された。

科挙の廃止に関する説明を少し加えておく。隋唐以来、千年以上にわたって行われて

きた科挙²⁸は、1905年に廃止されることになった。科挙の内容は主に儒学など古典に偏重していた。そのため、科挙は近代の先進的な知識や技術の発展に対して役に立たない旧態依然としたものであると見做され、廃止された。その廃止に伴って、日本への留学が本格化し、渡日留学生数が飛躍的に増加することになった。とりわけ、1906年には、留学生数が1896年の約770倍に達した。留学生急増に比例し、日本に派遣されて日中翻訳の技能を修得した中国人留学生の数も増加した。やがて、東京で日本書翻訳の団体が結成されると、雑誌や単行本を翻訳し、出版するに至った。

このような背景のもとで、中国国内でも、1896年（すなわち、日清戦争終結の直後）から北京と上海をはじめ、中国各地に新聞社や訳書局、日本語学校が盛んに設けられ、中国に滞在する日本人や日本語学校の卒業生たちの手により、日本書籍の翻訳活動が大規模に展開された。中国語に翻訳された書籍の分野は多岐にわたり、社会科学をはじめ、世界の歴史地理や自然科学、応用科学、文学などが翻訳対象に含まれた。これにより、日本語書籍の翻訳ブームが出現した。この日本への留学気運の高まりは、日中文化交流と言語交流を力強く推し進めたばかりでなく、近代の中国における革命運動と近代国家建設にも大きな影響を及ぼすこととなった。

3.3 中国人留学生による翻訳活動

本節では、前節で概略的に触れた日中翻訳活動を詳述する。その際、翻訳活動の実態を便宜上、日清戦争終結前と日清戦争終結後にわけて記述する。

はじめに、日清戦争終結前の状況を述べる。中国人による翻訳活動の歴史を研究した譚(1980)によると、1660年から日清戦争までの約二百数十年間の中国語訳日本語書籍の数は12冊である。そのうち、中国人の手によって訳されたものは、『琉球地理志』²⁹、『欧米各国政教日記』³⁰の2冊に過ぎない。このように、日清戦争前の約二百数十年間における中国語訳日本語書籍の数量は僅かであり、このことから、それまでの翻訳活動は日中両国の交流において大きな役割を果たしてはいなかったということが主張できる。

次に、日清戦争終結後の状況を述べる。実のところ、日清戦争の終結を機に、潮流は

²⁸ 科目により選挙するということを意味する。過去の中国における高級官僚を登用するための試験制度のことである。6世紀の隋の時代に、隋始祖の文帝によって初めて導入され、1904年の清朝末期に廃止されるまで、1300年以上続いた。優秀な人間を選抜するとともに、皇帝の権力を強化するのが目的だった。

²⁹ 中根淑、大槻文彦、重野安繹が著した。訳者は姚文棟であり、1883年に東京で出版された。

³⁰ 井上園了が著した。『欧米各国政教日記』の訳者は林廷玉であり、1889年に上海で出版された。

一変した。1895年の日清戦争終結をきっかけに、明治維新を経て近代化を成し遂げた日本は中国から注目を受けることになり、近代化の手本となる国として、さまざまな影響を中国に与えてきた。中国への影響は政治、経済、軍事分野以外にも及んだのであった。そして、1896年から始まった留学生派遣は、学問分野において日本が中国に影響を与えた好例で、その目的は、日本語に詳しい翻訳者を養うことにあった。

中国人留学生の翻訳者を養成する背景として、まず1898年に、康有為は「請開局譯日本書折」³¹を書いた。その内容は以下のとおりである。

「臣愚窃考日本变法，已尽译泰西精要之书，且其文字与我同，但语法稍有颠倒，学之数月而可大通，人人可为译书之用矣。」(p. 254)

訳：(臣は日本の変法を考察し、日本が既に参考にできる西洋の書物をすべて翻訳したことを知った。そして、その文字はわれわれと同じで、文法が少し異なるだけであるから、数ヶ月これを習うと理解でき、容易に翻訳できる。)

同年、康有為も「請廣譯日本書派游学折」³²の中で、次のように述べている。

「日本昔亦闭关也，而早变法，早派游学，以学诸欧之政治工艺文学知识，早译其书，而善其治，是以有今日之强而胜我也。吾今自救之图，岂有异术哉？亦亟变法，亟派游学，以学欧美之政治工艺文学知识，大译其书以善其治，则以吾国之大，人民之多，其易致治强可倍速过于日本也。」(p. 302)

訳：(日本は、昔は閉鎖した国であった。しかし、変法も留学派遣も迅速に行い、その目的は西洋の政治、工芸、文学などの知識を習得することであった。国の発展に寄与させるため西洋の書物も即座に翻訳した。われわれが自らを救うためには、他の方法があるわけではない。日本と同様に変法をしたり、留学生を派遣したりするべきである。それにより、欧米の政治、工芸、文学などの知識習得が可能となる。諸国の書物を広く訳して、わが国の発展に役立てる。わが国の広大さと人口が多いこともあり、国家の発展は日本より何倍も速く達成できる。)

³¹局面を開き、日本書籍を訳す折本という意味。『康有為政論集上』(1981)

³²日本書籍を広く訳し、留学を派遣の要求の折本という意味。『康有為政論集上』(1981)

また、1902年の「奏請設立譯書院」³³という折本には次のようにある。

「日本維新之後，以翻譯西書為汲汲，今其國人於泰西各種學問皆貫串有得，頗得力於譯出和文之書。」(p. 50)

訳：(日本は明治維新後、西洋の書籍を数多く翻訳し、日本人は各分野の西洋学問を習得した。それが和文訳書の果たした役割である。)

以上のような意見から見れば、日本語書籍の翻訳活動も留学生派遣と並び、自国の発展のための有力な手段であったと認識されていたことは明らかである。また、日清戦争終結後に翻訳活動の機運が高まった背景には、中国国内で日本をモデルとする維新改革の気運が高まり、日本への留学機運が以前よりも増大したという事情もあった。

翻訳活動の機運が高揚したことにより、新たな動きがもたらされた。その動きを日本国内と中国国内に分けてみると、以下のようになる。

日本国内での動きとしては、渡日留学生が日本と西洋の先進的な思想や技術などの学問を中国国内に紹介するために、(前節後半で触れたように)日本で翻訳団体を創始し、日本語書籍の翻訳に積極的に取り組んでいったことである。

他方、中国国内での動きとしては、日本語書籍の翻訳活動に従事できる人材の育成が開始されたことである。当時の中国では、人材育成が喫緊の急務であった。この問題を受けて、北京と上海をはじめ各地に日本語学校が盛んに設けられ、日本語書籍の翻訳活動が各所で行われるようになった。それと同時に、日本から数多くの日本人教師を招聘して、日本の学校の教科書を中国国内向けに編訳した。そうすることで、近代化が進められる世の中において、その必要性に応じえなかった中国国内で使用されてきた教科書を改善することができた。これらの翻訳書は、日本国内でも中国国内でも出版されており、当時の中国社会に大きな影響を与えた。

本節では、日本書籍の漢訳が推進された事情を確認した。日本は西洋を近代化のモデルとし、西洋書籍を訳することで、西洋の知識を自らのものにしようとした。その結果、日本では西洋書籍に対する訳書が豊富に存在するようになった。そこで、当時の中国の知識人は、日本語に訳された書籍を読めば、西洋の書籍(原著)を読むのと同等の知見が得られ近代化や維新改革を断行できると考えたのである。

³³ 訳書院を設立することを奏請するという意味。『中國近代出版史料初編』(1953)

3.3.1 漢訳された日本語書籍の種類と数量

前節の「近代の日本留学の高まり」で述べたとおり、20世紀初頭には、中国からの留学生が数万人規模に達していた。その人数の多さ、規模の大きさ、学習領域の広さ、活動の活発さなど、そのいずれをとっても、世界の留学史上まれにみる規模であったことは論をまたない。留学規模の大きさを示す指標として、漢訳された日本語書籍の種類と数の多さをあげることができる。以下、漢訳された日本語書籍の種類と数を順にみていくことにする。

はじめに、漢訳された日本語書籍の種類に注目してみる。渡日留学生教育機関の教科を見ると、専門分野がきわめて多岐に及んでいたことがわかる。すなわち、師範科（教育関係）、法政科（法律と政治関係）、理財科（経済関係）、商科（貿易関係）、警務科（軍事）に及んでいた。注意すべきは、これらのいずれの領域も、清朝政府の「新政」に伴い、急遽人材育成が必要となった分野であるということである。

このように様々な分野があったなかで、文科系領域の学問を志す留学生の間では、政治と軍事に関する科目の人气が非常に高かった。このことは、政治、法律、軍事に関する書籍の内容と種類の豊富さによく現れている。

彼らは日本で、西洋の進んだ科学技術、新しい思想、新しい文化、新しい知識を自ら消化したうえで、次々と訳書団体を創設し、積極的に翻訳活動を行った。それにより、書籍が翻訳され、新聞や雑誌なども創刊された。そして、中国国内の知識人たちへの紹介を通じて、広く伝播させていった。

留学生の創設した翻訳団体には「訳書彙編社」、「湖南編訳社」、「教科書訳輯社」、「国学社」、「東新訳社」、「励志会」、「閩学会」などがあつた。その中で、1900年に東京で創設した「訳書彙編社」は留学生たちによる最初の翻訳団体であり、創刊された月刊誌『訳書彙編』は留学生たちが初めて編集した雑誌である。訳書彙編社はこの『訳書彙編』を通して、西洋および日本の政治に関する学説や法律関係の知識を翻訳し紹介している。さらに、政治と法律に関する文章も編集して、単行本の形で刊行した。

実藤(2012)でも、留学生による初めて翻訳団体である訳書彙編社が1900年に設立されたとしている。訳書彙編社は主に『訳書彙編』という月刊の雑誌を発行した。先に挙げた翻訳団体のうち、教科書訳輯社は訳書彙編社の支社である。訳書彙編社は主に大学用教科書を訳し、教科書訳輯社は中学校の教科書を訳すという分業を行っていた。また、1903年からは湖南編訳社が月刊『遊学訳編』を出版しはじめ、『遊学訳編』も日本の学説

と議論を紹介した。同じ 1903 年には範迪吉らが『普通百科全書』100 冊を訳し、会文学社から出版している。さらに 1904 年、福建省の留学生らが閩学会を創設し、『閩学会叢書』を刊行した。その後留学生たちが創刊した刊行物としては、『訳書彙編』(1900)をはじめ、『開智録』(1900)、『湖北学生界』(1903)、『浙江潮』(1903)、『江蘇』(1903)、『雲南』(1906)、『四川』(1907)などがある。また、『音楽小雑誌』(1905)などの専門的な分野に関係する刊行物も相次いで創刊された。これらの刊行物は当時の情勢と時代の息吹を反映し、渡日留学生たちの思想感情を表現しただけでなく、中日文化や言語の交流も体現していたのである。

漢訳された日本語書籍の種類の豊富さをより詳しくみるために、譚 (1980) が提出した漢訳日本語書籍の種類の分類を、表 2 として引用する。



表 2 : 漢訳された日本語書籍の分類

表 2 では、漢訳された日本語書籍の種類が、哲学類、宗教類、自然科学類、応用科学類、社会科学類、中国史地類、世界史地類、語文類、美術類の 9 種類に分けられている。

次に、表 2 の分類に基づいて、漢訳された日本語書籍の数を見てみよう。譚(1980)の統計によると、1896 年から 1911 年までの間に漢訳された日本語書籍は、合計 958 である。その内、総合類は 8、哲学類は 32、宗教類は 6、自然科学類は 83、応用科学類は 89、社会科学類は 366、中国史地類は 63、世界史地類は 175、語文類は 133、美術類は 3 であった。

譚 (1980) の統計に基づいて、漢訳された日本語書籍の数を種類別に示したものが、以下の図 2 である。

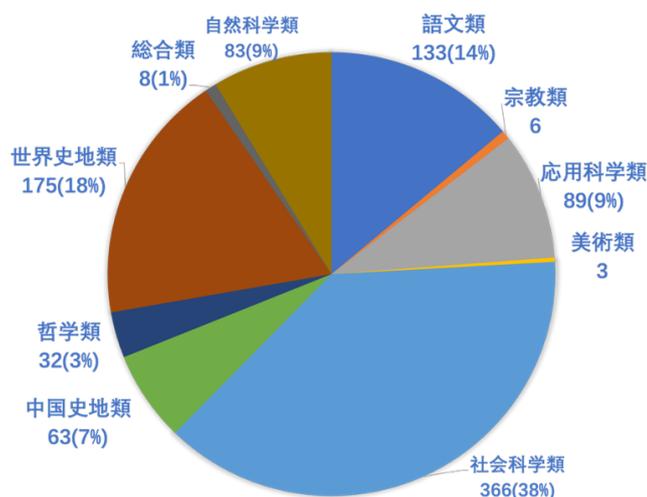


図2：漢訳された日本語書籍の数

図2から明らかなように、社会科学類に該当するものが最も多く漢訳されている。このことは、これらの種類に該当する日本語書籍に含まれる知見が「新政」を遂行するための必要性にかなっていたことを示唆している。

馬(1999)によると、1896年から1911年にかけて留学生が中国と日本で日本語の書籍を翻訳・出版する専門機関は95箇所にもぼっている。これらの機関が日本語の書籍を翻訳・出版することに情熱を注いだことで、日本語からの訳書は急激に増大した。「新刊書を開いてみると、十中八〜九は日本から来たものだ」とも言われていたのである。

また、馬(1999)の統計によると、1896年から1911年までの間に、中国では少なくとも1014の日本語書籍が訳されている。数においては、その以前の半世紀の西洋訳書の総計を遥かに超え、また同時期の中国の西洋訳書の数量も上回っている。それ以前の西洋訳書に比べて、この時期に訳された日本語の書籍の最大の特徴は、社会科学、歴史地理の書籍の数が増大し、応用科学や自然科学の書籍の数が減少していることである。

譚(1980)によると、日清戦争以前の300年間（すなわち、日本語書籍の漢訳が興隆を見せる以前の時代）における中国語訳日本語書籍の数はわずかで、（日本語で著された）原著の種類も限られていた。このことからわかるのは、先に概観したように、この間の翻訳活動は日中の言語交流には大きな役割を果たさなかった（すなわち、日本が中国から語彙を一方向的に借用していた）ということである。しかし、その後大量の日本語の書籍が漢訳されたことは、近代の日中語彙交流史において大きな役割を果たすことになった。繰り返し述べてきたとおり、その交流の原動力となったのは渡日留学生であった。彼らは懸命に日本語を学んだうえで、日本の書籍を読んだ。その結果、新しい西洋の思

想や知識が、中国国内に紹介された。1896年から1911年にかけての15年間に漢訳された日本語書籍数は、958に達している。このことは、それだけの分量の知見及び語彙が新たに中国国内へ流入したことを示している。

3.3.2 漢訳された日本語書籍の中国への流通

上述のとおり、1896年に13人が渡日したのを皮切りに、20世紀になると大量の中国人留学生が渡日した。彼らは、重要な使命を負っていた。それは、近代化に成功した日本に近代化の手法を学ぶと同時に、日本を通じて西洋の先進技術を自国に紹介することであった。彼らは日本語を学ぶと、西洋の進んだ科学技術、新しい思想、文化、知識を自ら反芻して会得した。そして、次々と翻訳団体を創設し、精力的に翻訳活動に乗り出していった。その結果、多くの書籍が翻訳され、新聞や雑誌なども創刊された。当初、西洋の知見は、日本が自らの近代化達成という目的に供するために、西洋から輸入されたものであった。この知見が今度は、漢訳を通じて中国国内の知識人たちに紹介され、中国国内に広く伝播することになったのである。

書物に書かれた知識が他の地域に伝播するには、書物が出版され、多くの市井の人々に読まれる必要がある。渡日留学生たちは、日本語書籍を漢訳すると、訳本などを日本国内であらかじめ編集・印刷・出版し、ときに、訳本を直接中国に送付した。そうすることで、訳本が中国国内で流通するようになった。留学生の翻訳団体の刊行物の編集・印刷・出版は、そのほとんどが東京、横浜、神戸に所在する印刷所で行われた。そして、最終的に、完成した訳本が中国に送られたのである。東京、横浜、神戸にある印刷所が選定された理由として、地理的要因が挙げられる。すなわち、これらの地域は、いずれも港湾都市である。加えて、社会的要因も印刷所の選定に影響を与えた。これらの地域では、明治政府の富国強兵政策に伴う近代化の影響により、貿易と工業が共に栄えていたため、海運業が隆盛をみせていた。そのため、これらの地域は、訳本を海上輸送するための起点として最適であったと言える。一方、日本の出版社でも、日本語書籍を漢訳したものを中国向けに出版販売する試みが見られるようになった。その試みを始めた出版社として、例えば、富山房や三省堂などを挙げることができる。

日本から中国に向けて訳本が輸送されていったのと時期を同じくして、中国国内でも日本語書籍の漢訳と出版への意欲が高まっていた。中国国内で漢訳された書籍の種類は、政治、経済、哲学、法律、歴史、地理、産業、医学、軍事、文学、芸術などの多領域を横

断し、社会科学などありとあらゆる分野にわたった。その翻訳活動が栄えるとともに、留学生の手による漢訳書籍の出版も盛んになった。

中国国内で翻訳された書籍は、主として江南製造局³⁴によって翻訳された科学技術書や、広学会³⁵から出版された宣教師による訳書であった。広学会は清末において西学（西洋学）を学ぼうと、重要な地位を占めていて、中国の現状に合わせながら西洋の著作を翻訳するとともに、中国の固有の文化にも注目した。また、西洋の科学を中国に紹介することによって、西学を中国に広めるという新しい局面を開いた。

翻訳後の流通に関係する主な出版社としては美華書館、広智書局、文明書局、商務印書館などが挙げられる。特に、当時の商務印書館は国内で最大の出版社として、数多くの翻訳書籍を出版した。これらの翻訳活動は日本での翻訳活動と同じように当時の中国社会に大きな影響を与えたと考えられる。

3.4 和製新漢語の中国語への流入

3.4.1 日本側からの提供

和製新漢語の中国語への流入の原因は、前に述べたように、当時の中国が積極的に留学生の派遣と日本語書籍の翻訳に取り組んだことである。加えて、日本側からの提供は日本人の漢語の造語能力に関係するものと思われる。

日本人の漢語の造語能力については、中国と日本は一衣帯水の隣国であり、両国は古くから往来を重ねていた。『古事記』によると、四世紀か五世紀には、王仁が論語十巻、千字文一卷を応神天皇に献じたことが記されており、漢字を媒体として中国の思想が日本にもたらされた。その時から、日本も中国も同じような漢字が使われ、いわゆる「同文同種」となった。このように日本と中国の交流は、中国からの漢字の伝播から数えると、千年以上の歴史を有していると言えるが、流れは明治維新までの長きにわたり、主に中国語の語彙である漢語が大量に日本語に流入するという一方的なものであった。しかし、近代に至ると、明治維新を経た日本は、中国文化の受容から西洋文化の受容という歴史的な転換を行った。日本は新しい概念や用語を日本語に取り入れるために、翻訳活動に力を入れた。その翻訳活動における日本の知識人の漢語造語能力が日本の蘭学を

³⁴ 江南製造局は清末の翻訳機関のなかで、清朝によって1865年に上海で創設された翻訳館で、数多くの翻訳書を出した。

³⁵ 広学会は1884年に成立した同文書会がその前身で、1887年に上海で設立された。イギリスのキリスト教宣教師アレキサンダーらが中国で設立した出版機構である。

隆盛させたのである。

『日本国語大辞典』の20巻では、「蘭学」の解説として以下の内容が記されている。

「蘭学とは、〔名〕江戸中期以降に起こり、オランダ語によって西洋の学術・文化を研究した学問。享保年間（一七一六 - 三六）、幕府の書物奉行青木昆陽が蘭書の訳読をしたのに始まり、前野良沢・杉田玄白・大槻玄沢ら医学者を中心とする多数の蘭学者が現われた。やがて研究は天文・暦学・地理・博物・物理・化学・兵学などの分野にもおよび、西欧の事情を紹介して、わが国の近代化に大いに貢献した。オランダ学。」(p. 289)

江戸時代に入って、日本は鎖国政策を取っていたが、西洋諸国のなかでオランダだけは交易が許された。その結果、西洋の学問や西洋事情に関する学問などがオランダ人またはオランダ語を媒介として、受け入れられることとなった。その蘭学の導入により、西洋の学問が日本で発展しはじめ、近代的な研究や開明思想が日本に大きな影響を与えることになった。蘭学は日本が近代文明へ転換する一因であり、日本の近代化に大きな役割を果たしたと考えられる。蘭学は多くの新しい概念を漢字により日本語に翻訳することで、日本人に西洋の概念を紹介したのである。

日本では、西洋の学術を学ぶために、蘭学塾も私塾として広まり、翻訳人材が大量に育成されるなか、西洋の書籍が次々と日本語に翻訳された。翻訳に従事した知識人は中国の古典や古典中国語に慣れ親しんでいたため、西洋の概念を漢語によって表現した。彼らは中国の古典にある漢語を再利用して新しい概念に充てただけでなく、漢籍の語彙の再利用によっては対応できない語（中国語にない語）に対して、漢語の語構造に基づいて造語する方法を取った。そうした翻訳は文明化や明治維新の原動力となり、日本人が先進的な世界を認識することを可能にした。西洋の学問や知識は日本の近代思想の芽生えに基盤を提供し、日本に近代化をもたらした。その過程で、近代の新概念を表すために日本人が独自に創出した「和製新漢語」は、日本の近代化に大きな役割を果たしただけでなく、漢字の本家本元である中国語へ流入することとなったのである。

3.4.2 中国側の受け入れ

中国はアヘン戦争で敗北した後、国門が開放され、国勢が急速に衰えていくとともに、列強の侵略の対象となり、次第に半植民地化されるようになっていった。隣国の日本は

先に西洋の先進的な知識を取り入れて、歴史的な転換を完了しつつあり、政治的にも経済的にも進歩を続けていた。そこでは、西洋の先進的なものを取り入れるために、翻訳活動を通して先進的な思想や技術などを手に入れることは最も重要な手段であった。当時の日本では、西洋の書籍を翻訳する際、漢字を用いた新たな語が作られた。「和製新漢語」が日本人によって作られるようになったということである。

多くの先進的なものを翻訳した日本に対して、当時の中国は西洋語を中国語に翻訳する余裕はあまりなかった。中国人にとっては、日本語は学びやすいだけでなく、有用な西洋書籍の訳本が日本にあったため、日本の翻訳書籍を通して西洋学を研究するのが効果的であるという認識が当時の維新派に共通のものとなっていた。そのような背景の下で、日本書が盛んに翻訳されるようになったのである。こうして、日本で創出された多数の和製新漢語が日本語書籍の中国語への翻訳とそれをもとにした日本事情の紹介を通じて中国語に流入した。維新派による日本語書籍翻訳の提唱は、先進的な文化が中国へ伝播する道を開いたのである。

それに大きく関係したのが渡日留学生であった。渡日留学生は日本が取り入れた西洋文化を吸収し、それをもとに西洋文明を自国に紹介しようとした。彼らが行った日本語書籍の翻訳の目的は、欧米の近代思想や知識を日本経由で自国に取り入れることであつた。渡日留学生の翻訳活動は日本文化の中国への伝播に有利な条件をもたらした。そして、それに伴って、多くの和製新漢語が中国語にもたらされた。日本への留学ブームは翻訳活動を促し、その結果、和製新漢語が中国語に流入することになったのである。

馬(1998)は、中国の五四運動までの翻訳史を3つの期に分けている。第1期は後漢から宋代までに行われた仏典の翻訳活動、第二期は明末清初の科学と技術に関する翻訳活動、第三期はアヘン戦争後から五四運動までの政治思想と文学の翻訳活動である。

また、沈(1998)は日中語彙交流の観点から中国語における近代翻訳活動に伴う新語の発生を、以下のように5つの時期に分けている。

1. 準備期：1807～1840年頃

この時期は、新教宣教師が主役として辞書の編纂、聖書の翻訳、定期刊行物の出版などを行い、キリスト教を布教するとともに、西洋の知識を伝えた。

2. 発展期：1840～1860年頃

アヘン戦争後、洋学の中心が上海に移り、墨海書館をはじめとする近代の出版社

において、宣教師と中国知識人の協力により西洋の政治・科学・宗教の書籍が翻訳出版された。

3. 官製翻訳期：1860～1880年頃

洋務派官僚が主導した北京同文館、江南製造局翻訳館の設立によって、製造関係の書籍を中心に翻訳事業が展開された。ただし、人文系の書籍はほとんどなかった。

4. 停滞期：1880～1895年

この十数年は、政治的にも閉塞感の強い時期であった。清政府主導の翻訳方法は時代の変化に対応できず、また日本書にもあまり興味を持っていなかった。

5. 日本語導入期：1895～1919年

一般に、日本語語彙の大量の流入はこの時期とされている。

上述のとおり、西洋列強に脅威を感じた中国の先覚者は、先進の学問を手に入れる必要性に直面していた。1896年から日本への留学生派遣がはじまり、日本語書籍の漢訳が盛んになっていったのである。渡日留学生は強い使命感と愛国感を持って、速成的な日本語教育を受けた。そして、日本語書籍の翻訳活動に着手し、訳書を日本と中国で出版した。中国国内でも日本語書籍の漢訳ブームが起こり、そのおかげで、西洋文明が中国に紹介されていった。1900年から1919年にかけての日本留学の高まりと、1896年から1911年までの日本語書籍の漢訳の高まりという国内外の要因が重なり、和製新漢語で表された新概念や学術用語が急速に増えていった。

以上見てきたように、20世紀に入ってから中国での留学ブームにより、渡日留学生の手になる翻訳活動が盛んに行われた。それは多くの和製新漢語を中国にもたらし、和製新漢語の中国語への流入の一大要因となった。そこで留意すべきは、和製新漢語の創出が漢字の造語能力に深く関係するという点である。漢字の造語能力を利用して日本で和製新漢語が作り出されたことが和製新漢語の中国語への流入の遠因であると言える。和製新漢語の流入の問題を考える際には、漢語の造語の面にも目を向ける必要がある。

3.5 本章のまとめ

本章では、和製新漢語の中国語への流入について詳説した。和製新漢語が中国語に流入した背景をまとめると、凡そ以下のようになる。

(1) 地理的要因

日本は中国と一衣帯水の関係にある隣国である。

(2) 言語的要因

日本と中国は、漢字を使用するという点で、共通の言語的特徴を持っている。

(3) 経済的要因

当時の中国は、日清戦争の敗北により課された日本への賠償金支払いのため、経済的に疲弊していた。

(4) 社会的要因

当時の中国は、近代国家の樹立と整備、及び、それに伴う人材育成の必要性に直面していた。

日清戦争が勃発した時代を生きた中国人にとって、自らの国家の近代化の雛型を日本に求めることには、大きな利点があった。すなわち、日本は中国の隣国であり((1))、両国は漢字を使用するという共通点を有しているから、中国人にとって、日本語は西洋諸語よりも学びやすい言語であった((2))。また、隣国である日本に留学生を派遣すれば、派遣にかかる費用を圧縮することができるので、経済的な問題を克服できる((3))。さらに、既に近代化に成功していた日本には、西洋学に関する訳書が多数存在していたため、日本語書籍を通して西洋学を学ぶほうが効率的である、という認識が当時の維新派に共有されていた((4))。

このような要因が複合的に組み合わさった背景の下で、日本から近代化に関する学びを得ることが有意義な方法であると考えられ、日本語書籍が盛んに漢訳されるに至った。渡日留学生は、強い使命感と愛国感を持って、速成的な日本語教育を受け、日本が取り入れた西洋文化を吸収するとともに、日本語書籍の漢訳活動に注力したのである。

注意すべきは、日本語書籍の漢訳書を通じて多数の和製新漢語の流入がもたらされたという点である。前述したとおり、中国国内で日本語書籍の翻訳ブームが起きていたことも手伝って、和製新漢語で表された新概念や学術用語が急速に増え、和製新漢語の中国語への流入が盛んになった。このように、和製新漢語の中国語への流入は、日本における漢訳活動と中国国内における日本語書籍の翻訳ブームの2つに支えられていたのである。

数万人に及ぶ渡日留学生、数千の日本語書籍の漢訳書、数百の出版機関、数え切れない雑誌や新聞により、様々な西洋の学問が日本を通じて中国に伝えられた。欧米から日本を経て中国へという経路は、20世紀初頭の西洋の学問が中国に伝わる主要な流れとなった。その流れは中国に西洋の新しい知識や文化、思想を紹介しただけでなく、多くの和製新漢語を中国にもたらし、近代中国語を豊かなものにした。中国語における和製新漢語の受容は、日中間の言語交流史上稀に見る歴史的な事象と言うべきものである。

第4章 『新爾雅』における和製新漢語の中国語への受容

4.1 和製新漢語の確立—中国語母語話者の観点から

先述したように、中国は日本にとって一衣帯水の隣国であり、早くから中国文化の影響を受ける形で中国との交流が行われてきた。中国語と日本語の交流は、中国からの漢字の伝播から数えると、千年以上の歴史を有しているが、その流れは明治維新までは、主に中国語の漢語が日本語に流入するという一方的なものであった。しかし近代になると、明治維新を経た日本は、中国文化の受容から西洋文化の受容という歴史的な転換を行った。

それに対して、中国はアヘン戦争によって鎖国が破られると、列国の侵略の対象となった。中国の先覚者たちは亡国の危機を目の前にして、国を救うために、一衣帯水の隣国である日本が明治維新によって近代化への転換を行ったことに目を向けた。近代化に成功した日本を発展のモデルと見なし、日本の先進科学や先進技術を学ぶとともに、日本を通じて西洋の先進技術を自国に取り入れることを目指した。20世紀に入ると、中国から日本に留学した人数は数万人に達した。この日本への留学の高まりは、中日文化交流と言語交流を力強く推し進めた。渡日留学生による日本語書籍の翻訳活動が活発に行われ、漢訳された書籍は中国に渡り、近代文明が中国にもたらされた。それと同時に、媒体として多くの「和製漢新語」も中国語に流入し、近代中国語の語彙を豊かにした。

渡日留学生たちは日本及び西洋の近代思想と先進的な科学知識を母国に紹介するために、翻訳団体を創り、日本語の翻訳に積極的に取り組んだ。その代表的な著作が『新爾雅』である。『新爾雅』の作者の一人である汪榮宝は日本に留学していたときに訳書彙編社に参加し、多くの書籍を訳出した。もう一人の作者葉瀾も日本留学の経験を持っていた。汪榮宝は法律と政治の方面に精通しており、葉瀾は天文や地理などの分野が得意なようであった。二人にはそれぞれ専門領域があり、両者の協力により、『新爾雅』の編纂が完成した。『新爾雅』について、沈（1995）では「『新爾雅』は、日本に留学した中国人学生によって編纂・出版された、中国最初の西洋の人文・自然科学の新概念、術語を解説する用語集である。」（p. 1）と指摘されている。

当時の翻訳者と編纂者の中には速成的な日本語教育しか受けていない者もいたため、

彼らの訳書の水準は様々であった。さらに、西洋概念の難しさも加わり、訳書の多くは非常に理解しにくいものとなった。その結果、短期間に大量の難解な新語と術語が中国語に入り込んだ。そこで、これらの新語、訳語を分かりやすく説明する辞書や用語集が強く求められた。『新爾雅』が出版されたのは、この時期の訳書によく見られる語を理解させるためであった。したがって、『新爾雅』は、19世紀末から20世紀初頭にかけての中国語の新語・術語における「和製新漢語」の受容の実態を反映する重要な資料であると言える。

そこで、本章では、『新爾雅』における和製新漢語を対象として取り上げる。中国語母語話者（漢字文化圏の話者）の観点から、ある新語が中国語で造られた中国製新漢語なのか、日本語から受容した和製新漢語なのかを判定したうえで、『新爾雅』に見られる和製新漢語について考察を進める。語の基本である2字語だけでなく、10字語までの全語を分析し、和製新漢語の受容された状況を詳しく検討する。

4.2 『新爾雅』の内容

4.2.1 編纂の社会背景と作者

第3章で述べたように、19世紀に清朝は支配力が衰え、大規模な社会動乱と経済停滞が起き、食糧供給も逼迫していた。このような内憂外患状態にある清朝の国力は急速に衰えていった。この危機にあって、中国の知識人たちは、近代化のモデルを日本に求めたうえで、日本の各分野への学びを深めていこうと考えた。その一環として、日本をモデルとした教育の近代化も進められたが、近代化を進めてゆく中で、留学生派遣の問題が取り上げられるようになった。

1896年13名の中国人が最初の留学生として日本に渡った。その後、清朝政府は改革の必要に迫られ、新政を実施し、多くの留学生を渡日させた。渡日留学生たちは日本及び西洋の近代思想と先進的な科学知識を母国に紹介するために、日本書翻訳の団体を創り、日本書の翻訳に積極的に取り組んでいったのである。

次に、『新爾雅』の作者について紹介する。一人は、汪栄宝（字哀甫、江蘇呉県生まれ）である。1897年に科挙を受け、1901年に日本へ留学、東京法政速成学校を経て、早稲田大学と慶応義塾大学に入学した。専攻は政治、法律、歴史であった。汪栄宝は日本に留学していた時、当時の翻訳社「訳書彙編社」に加入し、多くの日本語書籍を漢訳した。

帰国後、彼は1906年に京師法政学堂の教員を経て、1908年に清民政部参議員、1910

年に資政院議員、1911年に協纂憲法大臣などを勤めた。中華民国の時期、参議院議員、衆議院議員、スイス公使を歴任した。1922年から1931年までの長きにわたって駐日本中国公使を歴任した。著書としては『汪榮宝日記』、『法言義証』、『法言疏証』などがある。汪榮宝は日本に留学中、日本の書籍を翻訳して、西洋近代文明を中国に広めると同時に、西洋の近代思想の影響を受けた。

もう一人は、葉瀾（字青漪、浙江仁和県生まれ）である。上海格致書院に学んだ後、1901年に日本へ留学し、早稲田大学に入学した。1902年に、葉瀾は革命団体「東京青年会」を発足させ、救国を訴えた。その後、反露義勇隊や軍国民教育会に参加し、革命事業に熱中し、帰国後は、清朝の中央政府に勤務した。著書としては、『天文歌略』、『地学歌略』、『算学歌略』などがある。

この二人に関して、沈（1995）は「二人とも、比較的早い時期に来日した留学生ということになるが、派遣のルートは定かではない。1901年頃、日本滞在の中国人の留学生は300人前後で、中央政府、或いは各地方の厳しい選抜試験をパスした「官費」留学生が中心であった。汪榮宝は、帰国後、京師法政学堂の教員になったことから、京師同文館東文館の学生であった可能性が大きい。一方、葉瀾は、浙江省選抜の留学生か、揚子江地方にある新式学校からの派遣と推測される。従って、個別的事情こそ違え、二人はいずれも来日する前に、西洋の学問について相当の知識を持っていたことは間違いない。」（p.5）と指摘している。

4.2.2 編纂の目的

『新爾雅』の作者二人は留学していた時、共同で書籍と雑誌を刊行し、学術団体も設立した。それと同時に、多くの記事を書き、新聞や刊行物に寄稿した。汪榮宝は雑誌『江蘇』の刊行にも参加した。また、『江蘇』では、『新爾雅』に関する広告の中で、その編纂の理由を次のように述べている。“凡一种科学，必有专门名词，即所谓术语是也。近来译书迭出，取用名词仍和译之旧。读者望文生义，易致误解”³⁶。（p.66）（あらゆる種類の科学には、専門用語が必要である。最近、多くの訳書が出てきた。訳された用語には古い語と新しい語があるが、文字の字面をただで意味を深く考えずに文章や語句の意味を解釈すると、誤解を招きやすい。）

³⁶ 赵林凤（2010）「中国近代最早的“新术语工具书”——《新尔雅》」『工会博览・理论研究』pp. 66-67

また、沈（1995）には、「日清戦争(1894-95)の敗北をきっかけに、中国国内では、日本に対する関心が急速に高まり、1896年13名の中国人が最初の清国官費留学生として来日する運びとなった。爾来、留学生の数は年々増え続け、1899年に200人を超えて、1902年には4～500人にもものぼることになる。故国の政治改良運動の挫折(戊戌維新の失敗、1898)と激動する国際情勢に刺激され、民智の啓蒙と西洋新学の紹介によって、社会の進歩と変革を促すべく、基本的な語学力を身につけた留学生たちは、1900年から盛んに翻訳、出版活動を繰り広げる。ごく短期間に、政治、経済、哲学、法律等、人文科学関係の幾多の専門書を日本語から訳出して本国に送りこんだ(日本語から重訳した西洋の名著も多数含む)。その際、訳語は新たに作るより、日本製のものを踏襲したケースが圧倒的に多かった。中国の伝統的学問と大きな隔たりをもつ西洋新学の難しさに加え、馴染みのない、生硬な訳語・術語のせいもあり(勿論、語学力の不足による誤訳、悪訳も一因である)、訳書の多くは、非常に難解なものとなっていた。」(p.3)という指摘がある。

確かに、当時の翻訳者たちは、短期間の日本語教育しか受けていない者もいたため、訳書の水準は様々であった。そこに西洋の概念の難しさが加わり、多くの翻訳は理解するのが非常に困難であった。その結果、難解な新語と術語が数多く中国語に流入することになった。これらの新語、訳語を分かりやすく説明する用語集として『新爾雅』が編纂された。

4.2.3 版本の状況

『新爾雅』の版本については、次のように確認できた。初版は1903年版、第2版は1904年版、第3版は1906年版、第4版は1911年版、第5版は1912年版である。各版の出版年や発行所などは以下のとおりである。

版	発行年	発行所	
初版	1903	明権社	石印本
2版	1904	北洋官報局	刻本
3版	1906	文明書局	-
4版	1911	-	石印本
5版	1912	明権社	鉛引本

『新爾雅』の初版は全 176 頁、14 章の構成で、1903 年に上海の明権社から出版された。印刷所は東京並木活版所であり、石印本である。現在、1903 年の初版は日本の東京都立図書館特別室実藤文庫(所蔵番号 1307)で確認される。

その 1 年後の 1904 年に、早くも第 2 版が出版されている。第 2 版は 1904 年に北洋官報局から出版された刻本である。二巻に分けられており、綴込製本であった。現在、第 2 版は中国国家図書館(所蔵番号 XD10785)での所蔵が確認される。

第 3 版は、1906 年に上海の文明書局から出版された。現在、上海図書館での所蔵(所蔵番号 211140)が確認される。

第 4 版は、1911 年に出版された石印本で、出版社は不詳である。三巻に分けられており、綴込製本であった。現在、中国国家図書館での所蔵(所蔵番号 68132)が確認される。

第 5 版は、1912 年に、上海の明権社から出版された鉛印本である。二巻に分けられており、綴込製本であった。現在、中国国家図書館での所蔵(所蔵番号 162363)と成都市立図書館(所蔵番号 H131.2/3190)での所蔵が確認される。

『新爾雅』の初版が上海の明権社によって出された後、中国国内で急速に広く流通した。約 9 年の間に、第 5 版まで刊行された。沈(1994)の『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』では、「一般に日本語の語彙の大量の流入期は、1895 から 1919 の間とされている。」(p. 4)と指摘されている。『新爾雅』の初版から第 5 版までの刊行期間は、その流入期中頃に当たる。

また、訳書リストを年代別に調べた譚(1980)によると、1896 年から 1903 年までの間で最も多く訳出された年は 1903 年である。『新爾雅』の初版は正にその 1903 年に出版されたのであった。それは当時の社会的要望に応えるための必然的な産物であった。前述したように、留学生の翻訳活動により、大量の難解な新語と訳語が中国語に入り込んだ。

『新爾雅』は、この時期の訳書によく見られる語を理解させるためのものであった。『新爾雅』が出版された後、中国では各専門分野における用語集と辞書の編纂がブームになった³⁷。このように、近代中国社会に流通している用語から見れば、『新爾雅』は当時の語彙交流や流入過程の縮図と見ることができるわけである。

³⁷ 沈(1995)では、『新爾雅』が出版された後、政治と法律の内容を含む翻案辞書が相次いで世に送り出されたこと、また、その後、『法政辞解大全』(1913)、『司法法令辞典』(1924)、『法律辞典』(1927)、『法律大辞典』(1934)など中国人の編集による辞書が出版され、法律用語も、ようやく整備されたことが指摘されている。

4.3 『新爾雅』とその語彙の考察

本節では、『新爾雅』の初版（1903）を中心に考察を行うことにする。それにより、19世紀末から20世紀初頭にかけて中国社会で流通した新語の考察を行う。初版を考察の中心に据える理由は、日本語書籍の翻訳活動の訳書リストを年代別に調べたところ、1903年が最も多く訳出された年であったことから、初版が新語や訳語受容の実態を最もよく反映すると考えられるからである。

4.3.1 『新爾雅』における語彙の意味分野と語の構成

前述のように、『新爾雅』は、近代社会に流通している西洋から伝来した新語や術語の時事用語集であるが、初版は全体で14章の構成であり、収録語彙の範囲は、以下に示すように、多岐に及んでいる。

『新爾雅』の目録

- 1章：「積政」－政治学
- 2章：「積法」－法律学
- 3章：「積計」－経済学
- 4章：「積教育」－教育学
- 5章：「積群」－社会学
- 6章：「積名」－論理学
- 7章：「積幾何」－幾何学
- 8章：「積天」－天文学
- 9章：「積地」－地理学
- 10章：「積格致」－物理学
- 11章：「積化」－科学
- 12章：「積生理」－生理学
- 13章：「積動物」－動物学
- 14章：「積植物」－植物学

それに関連して、実藤（1980）では、漢訳された日本語書籍を次のように分類している。

中国訳日本書総合目録

哲学類	宗教類	自然科学類	応用科学類	社会科学類	中国史地類	世界史地類	語文類	美術類
-----	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-----

本研究では、上記の分類に依拠しながら、「人文社会系」と「自然科学系」に大別し、『新爾雅』に所収される諸分野を以下のように位置づける。

1 「人文社会系」

「積政」、「積法」、「積計」、「積教育」、「積群」、「積名」

2 「自然科学系」

「積幾何」、「積天」、「積地」、「積格致」、「積動物」、「積植物」

『新爾雅』では、全 14 分野あわせて 2444 語が収録されている。そのなかで、50 語が 2 つまたは 3 つの分野に重出している。その重出の内容は、次の表のとおりである。

		初出分野	重出分野	重出分野		初出分野	初出分野	重出分野
1	義務	政	法	教育	26	近日点	天	地
2	権利	政	法	教育	27	行星	天	地
3	教育	政	教育		28	太陽系	天	地
4	国家	政	群		29	離心力	天	格致
5	人民	政	群		30	雨	地	格致
6	条約	法	群		31	霰	地	格致
7	成文法	法	群		32	風	地	格致
8	果実	法	植物		33	気圧	地	格致
9	現象	計	教育		34	颶風	地	格致
10	厭世主義	教育	群		35	雲	地	格致
11	開発主義	教育	群		36	傾斜	地	格致
12	個人主義	教育	群		37	高気圧	地	格致
13	国家主義	教育	群		38	霜	地	格致
14	実験	教育	群		39	低気圧	地	格致
15	人格	教育	群		40	定期風	地	格致
16	人道主義	教育	群		41	等温線	地	格致
17	利己主義	教育	群		42	雹	地	格致
18	理論	教育	群		43	雪	地	格致
19	論理学	教育	名		44	極光	地	格致
20	概念	教育	名		45	霧	地	格致
21	気質	教育	格致		46	沈殿	地	化
22	生理学	教育	生理		47	原子	格致	化
23	体	群	幾何		48	比重	格致	化
24	衛星	天	地		49	分子	格致	化
25	遠日点	天	地		50	細胞	生理	植物

上記の重出語を除き、異なり語は 2392 語である。各分野それぞれの語数と割合は、次の表のとおりである。

	章	語数	割合%
1	释政	133	5.6
2	释法	159	6.7
3	释計	182	7.6
4	释教育	187	7.8
5	释群	217	9.1
6	释名	87	3.6
7	释幾何	163	6.8
8	释天	75	3.1
9	释地	296	12.4
10	释格致	194	8.1
11	释化	99	4.2
12	释生理	180	7.5
13	释動物	178	7.4
14	释植物	242	10.1
合計		2392	

これら 2392 語のうち、「人文社会系」は 965 語、「自然科学系」は 1427 語となっている。「自然科学系」の語数は「人文社会系」の語数の 1.5 倍である。このうち、「釈地」（地理学）が 296 語で最も多く、「釈名」（論理学）が最も少なく、わずか 87 語となっている。「釈地」の次には、語彙数が多い順に、「釈植物」（植物学）、「釈群」（社会学）、「釈格致」（物理学）となっている。

明治維新前後の急速な近代化の時期に、日本は新しい概念や用語を日本語に取り入れるために、翻訳活動に注力した。その翻訳活動の遂行にあつては、日本の知識人が持つ漢語の造語力を高めることと、日本において蘭学を隆盛させることとは不可分の関係にあつたと言える。蘭学の翻訳書の出版を介して、日本では、世界地理、医学、科学などの方面における新概念が既にかなり定着していた。また、『新爾雅』の分野別で上位を占めている地理学、植物学、社会学は、当時の日本において既に発達を遂げている分野であつたと言える。

以上から言えることは、『新爾雅』を調査対象にすれば、和製新漢語が近代中国語に及ぼした影響と近代における日中言語（語彙）交流史の実態を解明できる可能性が高いと

ということである。すなわち、本節の冒頭で述べた本研究が採る方針には十分な動機が与えられることになる。

次に、語の構成の問題を取り上げる。語の構成について考えるために、まず、「語基」の概念を述べておく。

高野（2004）によると、「語基」とは、語を構成する最小の造語要素であり、「語基」は承接関係によって結合し、語という基本単位を形成する。漢語の基本は1字語ないし2字語であって、3字語は、「2字語＋1字語」のように分解できる場合が多い。高野の言う漢語の基本的特徴に基づくと、3字語それ自体は基本単位として認められる一方、その構成要素は、1字からなる要素と2字からなる要素に分解されることになる。さらに、4字語以上の場合、その構成は「2字語＋2字語」や「2字語＋3字語」のようになる。このように、漢語の語基は1字からなるものと2字からなるものの2種のみであると見ることができる。この点をもとに以下、語の構成について考えていくことにする。

『新爾雅』では、1字語から10字語に該当する事例として、以下のものが列挙されている。

- 1字語：「財」、「群」、「氷」
- 2字語：「秩序」、「願望」、「赤道」
- 3字語：「文部省」、「有機体」、「燐光体」
- 4字語：「天賦人權」、「理論科学」、「腰椎神経」
- 5字語：「不動産銀行」、「社会实在論」、「動物解剖学」
- 6字語：「地方自治行政」、「塩基性酸化物」、「高等脊髓動物」
- 7字語：「不干涉密理主義」
- 8字語：「酋長政治封建制度」
- 9字語：なし
- 10字語：「間接的倫理的実有主義」

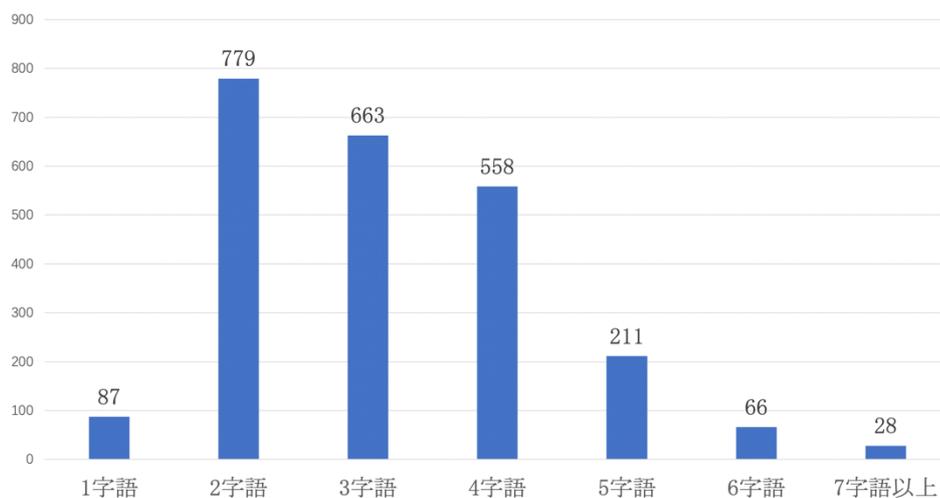
また、『新爾雅』の各意味分野における1字語から10字語の語数は以下の通りである。

	意味分野	語数	1字語	2字語	3字語	4字語	5字語	6字語	7以上	割合%
1	释政	133		38	38	38	11	7	1	5.6
2	释法	159	1	37	52	52	9	7	1	6.7
3	释計	182	6	52	29	74	13	7	1	7.6
4	释教育	187		59	30	52	21	16	9	7.8
5	释群	217	3	60	33	86	26	3	6	9.1
6	释名	87	2	31	8	29	9	4	4	3.6
7	释幾何	163	7	41	34	41	34	6		6.8
8	释天	75	5	35	23	5	5	2		3.1
9	释地	296	17	124	103	27	23	2		12.4
10	释格致	194	9	80	56	32	14	2	1	8.1
11	释化	99	3	27	37	20	8	3	1	4.2
12	释生理	180	7	77	45	31	13	3	4	7.5
13	释動物	178	7	35	91	35	8	2		7.4
14	释植物	242	20	83	84	36	17	2		10.1
		2392	87	779	663	558	211	66	28	
	割合%		3.6	32.6	27.7	23.3	8.8	2.8	1.2	

この表から分かることは、『新爾雅』に収録されているのは主に2字語、3字語、4字語であるということである。また、『新爾雅』に収録された1字語から10字語の語数は、以下のとおりである。

- 1字語：87語、2字語：779語、
- 3字語：663語、4字語：558語、
- 5字語：211語、6字語：66語、
- 7字語以上：28語

この数をグラフ化すると以下のようなになる。



このグラフから明らかなように、全体の中で2字語の数が最も多く、全体の 32.6% を占めている。次いで、3字語の 27.7%、4字語の 23.3%と続く。1字語から5字語で全体の 96%を占めているのに対し、6字語以上は 94語に過ぎず、割合で言えば全体の 4%となる。

以下、1字語から7字語以上の順により詳しく観察してみよう。

1字語

法	詞	日	極	雪	塩	網	核	針
嬴	端	星	雲	電	基	蠍	萼	苞
求	数	望	風	楔	酸	科	茎	爪
供	圓	弦	島	色	腓	行	毛	脈
財	線	霧	霜	静	尾	蛹	刺	菓
租	界	氷	露	声	骨	属	仁	肋
庸	形	霽	泉	動	筋	目	根	幹
群	点	雨	岬	力	腱	稈	葉	
体	面	霰	湖	熱	頭	鞞	胚	
用	朔	海	雹	光	秃	花	柱	計87語

この表は、所収された1字語を網羅したものである。語構成の観点から言えば、これらの1字語は、これ以上分解することのできない語基であると言える。

2字語

2字語には、「恩赦、財務、憲法、物権、交易、歳入、暗記、体育、群棲、淘汰、倒植、連珠、鋭角、鈍角、行星、星宿、海峡、地層、電話、沸点、結晶、骨質、奇鱗、核果」などがあり、これらをはじめとして、全 779語の2字語が収録されている。2字語の収録数は、3字語(663)と4字語(558)の数と比較しても、より多いことが分かる。この事実は、高野(2004)の「文字形態素の理論」と一致している。つまり、新語であっても、伝統的かつ基本的な語彙の構成を保っているのである。

次に、3字以上の語彙を順に見ていくことになるが、その際注意すべき点を再度記しておく。語構成の基本単位が1字語と2字語であるという見方を踏まえると、例えば3字語の場合、その構造は基本的には「2字語+1字語」あるいは「1字語+2字語」のいずれかであるということになる。すなわち、3字語以上の場合、基本的には、1字語と2字語が語基として複合してできたものであると言える。

3字語

(2 + 1)³⁸

例：枢密/院、記述/法、離婚/率、凝聚/力、
自然/人、脂肪/腺、合成/法、蜘蛛/類、
細胞/液、海岸/線など

(1 + 2)

例：商/行為、半/意識、大/前提、小/行星、
東/大陸、南/半球、加/速度、軽/金属、
脳/神経、肺/静脈など

3字語では、1字語の前接語基と後接語基が2字語基に付いて形成されている。音訳以外の語は(2 + 1)と(1 + 2)という2種類の構成パターンのいずれかに分類される。(2 + 1)のパターンを示す語は594語、(1 + 2)のパターンを示す語は69語である。これらの語数を、収録語数全体に占める割合で示すと、前者が90%であるのに対し、後者は10%に過ぎない。換言すると、3字語の新語を造語する場合、(2 + 1)が基本パターンとして優先されることが分かる。

4字語

(2 + 2)

例：信仰/自由、株式/会社、論理/解釈、火災/保険、
流動/資本、愛他/主義、自然/淘汰、法治/時期、
中心/運動、標準/化石、三叉/神経など、計452語

(1 + 2 + 1)

例：非/交戦/者、未/成年/者、不/通融/物、旧/心理/学、
正/四面/体、形/外切/線、無/比例/面、大/塊状/岩、
不/伝熱/体、等/気圧/線、大/動脈/幹、古/動物/学、
櫛/水母/類など、計51語

³⁸ 例示における「/」は、語基の切れ目を示す。例えば、以下の「裁判/所」は、「裁判所」という3字語が「裁判」と「所」の2つの語基に分かれることを示す。

(2 + 1 + 1)

例：有益/之/用、独立/之/名、命題/之/質、相似/之/形、
平理/之/序、相似/体/数、光体/之/像、尾閭/骨/腺、
心臓/形/葉など、計 36 語

(1 + 1 + 2)

例：民/之/義務、値/不/驟変、法/之/解釈、日/之/斑点、
熱/之/放射など、計 16 語

(3 + 1) 例：毛細管/網、禁治産/者の 2 語

音訳語 例：亜爾格利の 1 語

4 字語は、(2 + 2) で構成された複合語が圧倒的に多い。それに続いて(1 + 2 + 1)、
(2 + 1 + 1)、(1 + 1 + 2) の順になり、(3 + 1) と音訳語も存在する。例えば「未
成年者」は、まず「未成年 + 者」という「3 字語の語基 + 1 字語の後接語基」に分けら
れ、そのうちの「未成年」はさらに、「未 + 成年」という「1 字語の前接語基 + 2 字語の
語基」に分けられる。

また、一見すると 4 字語であると思われる形式を持つ語に、「～之～」と「～之～～」
がある。しかし、「之」を取れば、4 字語を 3 字語にすることができる。例えば、「相似/
之/形」や「日/之/斑点」から、「之」を取れば、3 字語の「相似形」や「日斑点」とな
る。この「之」は古典文言の中に存在する「之」と同じ意味である。この「之」は構造助
詞として、前の名詞の所有性を示し、修飾の働きをする。

5 字語

(2 + 2 + 1)

例：国家/起源/説、枢密/顧問/官、刑事/訴訟/法、社会/心理/学、
相等/相似/体、海水/等温/線、反対/貿易/風、磁石/吸引/力、
摩擦/発電/機、結晶/分類/法、動物/解剖/学、斉整/羽状/葉など、計 111 語

(2 + 1 + 2)

例：元首/之/特權、無權/的/解釈、奢侈/之/欲望、記述/的/科学、
自我/的/動機、拋物/線/軌道、磁石/之/赤道、南極/性/磁気、
初生/期/変体など、計 67 語

(1 + 2 + 1 + 1)

例：正/十二/面/体、無/等数/之/数、両/中面/之/線、倒/心臟/形/葉など、計 9 語

(1 + 2 + 2)

例：不/生産/労力、赤/十字/同盟、複/細胞/動物、超/国民/事項など、計 8 語

(1 + 1 + 2 + 1)

例：右/総/淋巴/管、下/頸/神經/節、骨/之/營養/器など、計 7 語

(2 + 1 + 1 + 1)

例：法律/上/之/物、凹面/鏡/之/軸の 2 語

(1 + 3 + 1)

例：準/禁治産/者の 1 語

音訳語

例：希羅尼安紀、干勃黎安紀、西留黎安紀、
老連底安紀、埃爾姆斯光、亞馬爾格姆の 6 語

5 字語は、4 字語と同じように、複数の語基の組み合わせからなることが分かる。最も多い語は (2 + 2 + 1) である。例えば、「国家/起源/説」は、まず、「国家 + 起源説」(2 + 3) に分けられ、このうちの「起源説」はさらに、「起源 + 説」(2 + 1) に分けられる。また、(2 + 1 + 2) の例も多く確認される。例えば、「拋物線軌道」は、まず、「拋物線 + 軌道」(3 + 2) に分けられ、このうちの「拋物線」は「拋物 + 線」(2 + 1) に分けられる。また、(2 + 1 + 2) の中には「～之～」の付いているものが存在する。この「～之～」は、現代中国語「～的～」の意味と類似しているが、(2 + 1 + 2) の中

には「～的～」も存在する。以上から、5字語は基本的に、1字語と2字語が組み合わさったパターンであると言える。

6字語

(2 + 2 + 2)

例：君主/立憲/政体、自由/判断/主義、公衆/利用/主義、
郵便/電信/同盟、交感/神経/系統、高等/脊髄/動物、戦時/国際/公法など、計30語

(2 + 1 + 2 + 1)

例：元首/之/伝授/法、誘導/之/自然/力、意識/之/統一/性、
経験/的/心理/学、普通/的/教育/学、幾何/上/中心/点、
上行/大/動脈/幹など、計22語

(1 + 2 + 1 + 2)

例：不/完全/之/方式、不/相容/之/原則、有/比例/之/幾何、
北/回帰/無/風帯、南/回帰/無/風帯の5語

(1 + 2 + 2 + 1)

例：三/不等/三角/形、両/等辺/三角/形、不/斉整/羽状/葉の3語

(2 + 1 + 1 + 2)

例：自然/法/之/一致、推理/式/之/原則、動物/圈/之/星座の3語

(2 + 2 + 1 + 1)

例：正方/無等/之/線、正方/有等/之/線、鳥足/掌状/類/葉の3語

6字語は全体で66語であり、そのうちの半分は(2 + 2 + 2)である。また、上記(2 + 1 + 2 + 1)、(1 + 2 + 1 + 2)、(2 + 1 + 1 + 2)、(2 + 2 + 1 + 1)のなかには、「之」が付く語も存在する。したがって、6字語の場合も、1字語と2字語が順不同で組み合わさったパターンであると言える。

7字語以上

7字語：不干涉密理主義、客觀的自然主義、重爾格利性反応など、計20語

8字語：曾長政治封建制度、防資本損失保険料など、計7語

10字語：間接的倫理的実有主義の1語

7字語以上は、合わせて28語しかなく、6字語よりもさらに数が少ない。7字語以上は極めて長い形を有しているが、構成的には、6字語までと同様に1字語と2字語の組み合わせとして捉えることができる。

以上、『新爾雅』に収録されている語の全体を対象に、構成パターンとその特徴を見てきたが、それらの語には、日本語からもたらされた和製新漢語と中国で作られた中国製新漢語が混在している。本章は、このうちの和製新漢語に焦点を当て、和製新漢語の数量、和製新漢語に占める準和製新漢語の割合、和製新漢語が準和製新漢語に与えた影響、和製新漢語が近代中国語に及ぼした影響を考察することを目標とする。その目標の達成のためには、『新爾雅』に収録されている語のなかから和製新漢語を抽出することが必要である。そこで、次節では、語種の分類の問題を取り上げることにしたい。

4.3.2 『新爾雅』における語種の分類とその分析

4.3.2.1 語種分類のための方法

語種の分類については、2.1での先行研究で述べたように、意味と語形の2つの面からの検討が必要である。主に『日本国語大辞典』、『漢語大辞典』、『英華辞典』などを用いて総合的に検討していくが、分類のための語種の判定方法は以下のとおりである³⁹。

まず当該の語が『日本国語大辞典』に掲載されているかどうかを確認する。『日本国語大辞典』に掲載されていない場合、中国側の辞典にその語があるかどうかを確認する。中国側の辞典に掲載されていれば、当該の語は漢語と見なす。『漢語大辞典』など中国側の辞典に掲載されていなくても、『新爾雅』に掲載されている語は近代の中国社会で流通していたものであるため、中国製新漢語と見做す。

『日本国語大辞典』に掲載されている場合は、その語は和製漢語の可能性が高い。しかし、『日本国語大辞典』だけから日本で作られたと断言することはできない。そのため、

³⁹ この判定方法については、沈国威（1994）、荒川（1997）、陳力衛（2001）などを参考にした。

『大漢語林』、『学研漢和大字典』、『日本語語源大辞典』など専門辞典と歴史的な史料や文献典籍などを利用して総合的な観点から、日本での初出の時期と語の意味を精査する必要がある。

同時にまた、中国側の起源も確認する必要がある。その方法としては、まず中国の『漢語大辞典』に古典漢籍の出典があるかどうかを確認する。また、『辞海』、『古代漢語辞典』など中国の専門辞典や文献典籍を総合的に比較検討した上で、その出典から中国での初出の時期と初出の意味を確認する。中国側の辞典や古典漢籍に掲載がなく、日本側の辞典などだけに掲載されている場合、当該の語は和製漢語と見做す。

さらに、同じ語形が日中ともに見られる場合、意味の確認も必要である。確認された中国初出の意味と『新爾雅』における当該の語の意味が一致するかどうを見る。一致する場合は、その語の意味は変化していないことになる。そして、中国での初出のほうが早いなら、当該の語は古典漢籍から近代に至るまで漢語として使われていることになる。逆に、日本での初出のほうが早いなら、当該の語は和製漢語あるいは和製新漢語と見做す。

中国古典漢籍での初出の意味と『新爾雅』における当該の語の意味が一致しない場合、当該の語は新概念を表すために、新たな意味が付与されたことになる。その新たに付与された意味が日本で先に使われている場合、当該の語は準和製漢語と見做される。さらに、その語の日本での初出の時期が明治以降であって、中国での初出の時期がそれより遅い場合、当該の語は和製新漢語と見做すことにする。

以上をまとめると、次の①から③の条件を満たす語は、「和製漢語」とであると判定される。

- ① 日本側の辞典などに掲載されている。
- ② その初出の時期が『新爾雅』の初版より前である。
- ③ 古典漢籍や中国側の辞典に掲載がなく、『新爾雅』における当該の語の意味が日本側の辞典にある初出の意味と一致する。古典漢籍や中国側の辞典に掲載されていても、日本での初出の時期が中国での初出の時期より早い。

また、次の④の条件をも満たす場合、当該の語は「和製新漢語」とであると判定される。

④ 当該の語の日本での初出が明治以降であるもの。

さらに、次の⑤の条件を満たすものは「準和製新漢語」と判定される。また、和製漢語のうち、同様の性格を持つものは「準和製漢語」と判定される。

⑤ 古典漢籍や中国側の辞典に掲載されていて、その意味が『新爾雅』における意味と一致しない。

上記以外の語、すなわち、『新爾雅』にのみ掲載されていて、近代の中国社会で流通している語は「中国製新漢語」と推定することができる。

語種の分類方法は以上のとおりである。以下、この分類方法に従って、2字語から順に語種の内容を見ていくことにする。なお、1字語は語の構成が問題にならないため、考察の対象から除く。

4.3.2.2 2字語

『新爾雅』の2字語は、合計779語が確認された。このうち、「積天」に収録している1語 (i. e. 地球) は宣教師により造られた新漢語であることが確認された。このことを踏まえると、「地球」は、和製新漢語にも中国製新漢語にもあたらないと言える。

そこで、まずは宣教師による造語の例を見てみよう。「地球」の語義を『日本国語大辞典』は次のように記している。

ち - きゅう・キウ【地球・地毬】

〔名〕 人類の生活している天体。太陽系に属する惑星の一つで、特有の磁場をもつ回転楕円体。自転周期は約二四時間で、太陽の周囲を約三六五日の周期で公転する。月と呼ばれる一個の衛星を持つ。赤道半径約六三七八キロメートル。極半径約六三五七キロメートル。地殻、マントル、核の三部から成り、質量約 5.98×10^{27} グラム。太陽からの平均距離約一億四九六〇万キロメートル。表面に水が多いこと、大気中に酸素が多量に含まれていること、表面に生物が存在していることなどが他の惑星にない特徴とされている。

*管蠡秘言 (1777)

「地球〈略〉支那、古へは地の本形を知らずして〈略〉或は地の下に四つの柱ありと云等の虚説をなせり。後世に至て欧羅巴の天地学を伝ふるに因て、始て地球と称す」

＊蘭学階梯（1783）上

「天毬・地毬」〔新法曆書〕

語誌：明末、中国を訪れたイエズス会士マテオ＝リッチによる造語。「天球」からの類推で考案されたと思われる。江戸期にイエズス会士らの書物を通じて日本にも伝わり、多くの蘭学書に用いられた。その後、「和蘭字彙」（一八五五）、「英和对訳袖珍辞書」（一八六二）などの対訳辞書にも収録され、一般化した。

マテオ・リッチ⁴⁰は東西文化の架け橋となった。彼がもたらした新知識の多くは漢語に訳されたことで、大きな影響を与えることになった。宣教師が造った「地球」などの漢語は現在も中国社会に流通し、中国語のなかで重要な役割を果たしている。

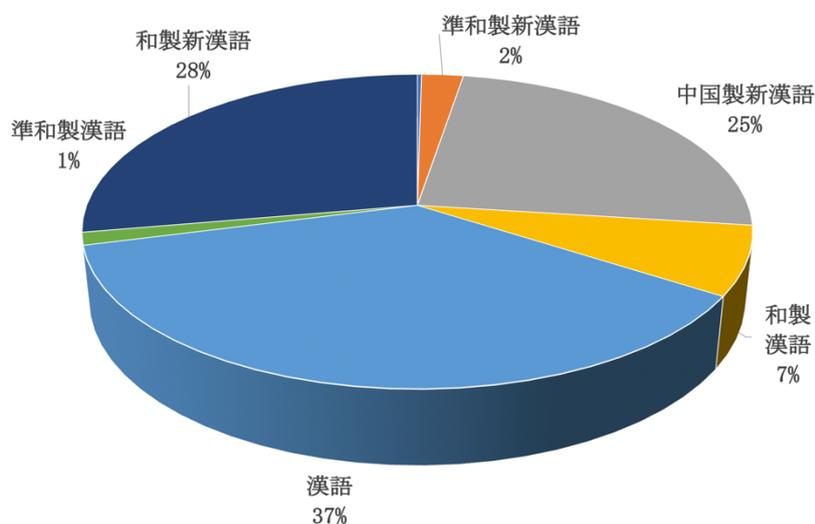
『新爾雅』に所収される2字語は、宣教師が造った上記の1語を除けば、合計778語である。このうち、日本側の辞典や書籍などに収録がない語は519語で、この数は778語のおよそ66.6%を占める。このような語は漢語と見做されるが、漢籍における起源を確認しておく必要がある。このような語が中国古典漢籍にある漢語か、それとも、和製新漢語と同じように、近代の新概念などを表すための中国製新漢語かを判定する必要がある。そのために、まず中国の『漢語大辞典』や古典漢籍などに出典が記載されているかどうかを確認する。それと同時に、『辞海』、『古代漢語辞典』など中国の専門辞典や文献典籍も調べる必要がある。当該の語の初出が中国での出典において近代以前であることが分かれば、漢語として見做す。反対に、当該の語の中国における出典が近代以降であるか、中国側の辞典や古典漢籍はおろか日本側の辞典や書籍などにも出典がなく、『新爾雅』にだけ掲載されている場合は、中国製新漢語と見做す。

問題の778語のうち、日本側の辞典などにある語は261語で、全体のおよそ33.4%を占める。先に述べた抽出の方法から、これらは和製漢語である可能性が高いと判断できる。4.3.2.1で述べた分類方法により各語種の語数を算定したところ、以下の表のようになった。

⁴⁰ マテオ・リッチ（1552-1610）：イタリア人イエズス会員・カトリック教会の司祭。フランシスコ・ザビエルの夢見た中国宣教に苦勞のすえ成功し、明朝宮廷において活躍した。中国にヨーロッパの最新技術を伝えると共に、ヨーロッパに中国文化を紹介し、東西文化の架け橋となった。

	2字語	漢語	中国製新漢語	和製漢語	準和製漢語	和製新漢語	準和製新漢語	未定	合計
1	释政	23		2		8	5		38
2	释法	19	4			13	1		37
3	释計	34	10	1		5	2		52
4	释教育	33	5	4		15	2		59
5	释群	36	9	4		8	3		60
6	释名	17	9	4		1			31
7	释幾何	8	23	4	2	4	0		41
8	释天	26	5			2		1	34
9	释地	51	45	11	2	15			124
10	释格致	25	18	7	2	25	2	1	80
11	释化	3	5	7	4	7	1		27
12	释生物	15	29	9	2	22			77
13	释動物	9	17	3		6			35
14	释植物	13	28	5		35	2		83
	合計	312	207	61	12	166	18	2	778

また、「漢語」、「中国製新漢語」、「和製漢語」、「準和製漢語」、「和製新漢語」、「準和製新漢語」の割合を図に示すと、以下のようになる。



ここで、『新爾雅』に掲載された2字語の和製新漢語を代表する例として「国際」を取り上げ詳しく説明しておく。「国際」という語は、『日本国語大辞典』では以下のように記されている。

こく - さい【国際】

①〔名〕 諸国家・諸国民間の交際。また、その関係。

*国際法 (1873) 〈箕作麟祥〉

「故に其の政体外国に対し義務を行ふの障害たるもの無き時は国際の法則上に於いて全政体の如何を問ふわ無し」

②〔語素〕 名詞の上に付けて、「諸国家・諸国民間の」、「国と国との間の」の意を添える。「国際会議」「国際価格」「国際関係」「国際空港」「国際結婚」など。

語誌：

1. 幕末から明治初期にかけて、当時の知識人や政府の要人達が国際法思想の移入に際して、盛んに利用した漢訳洋学書『万国公法』の中に使用された「各国交際」というフレーズから造語された和製漢語。

2. 当初 *Diplomatic intercourse* (諸国家・諸国民間の交際) の訳語として使用されることが多かったが、明治三〇年代あたりから「国際紛争」「国際法」「国際的」等の用法が見えるようになり、*international* の訳語としての地位を獲得していった。

3. 現在では①の語義では用いられなくなり、もっぱら②の使い方となっている。

『日本国語大辞典』によると、「国際」という語の本来の意味は、「諸国民間の交際」である。この意味での「国際」の出自は、1864年に英語から漢訳された『万国公法』所収の「各国交際」にあり、「各国交際」から「国」と「際」の各漢字を取り出し、これらを新しく組わせて作ったものである。したがって、「国際」は古典中国語には存在せず、日本人が独自に創出した新造語と認定される。このように、「国際」は、明治になって日本人が西洋の概念を表すために独自に翻訳語として創出した新造語である。

次に、『新爾雅』に掲載された2字語の「準和製新漢語」の代表例として「憲法」を取り上げる。この語は古典中国語の意味を受け継ぎながら、近代に至って新しい意味を備えるようになった。『日本国語大辞典』による記述は、以下のとおりである。

けん - ぼう…【憲法】

〔名〕 (古くは「けんぼう」)

①おきて。のり。きまり。けんぼ。

*令義解 (718) 儀制

「凡内外官人。有^下恃^二其位蔭^一 故違^四 憲法^上 者」

*十訓抄（1252）一〇

「女にもかたさらずして、つゐにためしを立給へる国司の憲法、たとへをしらずとぞほめののしりける」

〔国語-晋語九〕

②（形動） 公正。公平。真実。けんぽ。

*東寺百合文書-と・暦応三年（1340）正月二三日・祐舜伊予弓削島庄鯨方所務職請文

「檢断事、殊可^レ致^二 憲法沙汰^一、更不^レ可^レ行^二 非儀^一」

*俳諧・崑山集（1651）一〇

「憲法な月の利生や十七夜〈貞徳〉」

③（フランス Constitution の訳語） 国家の統治体制の基礎を定める根本法。形式により成文憲法と不文憲法、制定者により欽定憲法・民定憲法・協約憲法・条約憲法などに分類される。近代的成文憲法は一七七六年のアメリカのバージニア州憲法に始まり、基本的人権の保障と民主的な統治機構を特徴とする。日本では、明治二二年（一八八九）二月に発布された大日本帝国憲法（いわゆる明治憲法）と、第二次大戦後、その全面的改正として昭和二二年（一九四七）五月から施行された現行の日本国憲法がある。

*仏蘭西法律書・刑法（1875）〈箕作麟祥訳〉三

「憲法に反したる所為を命じ」

*国会論（1888）〈中江兆民〉

「所謂国会相当の権理の何物たるを知らんと欲せば、一部の万国憲法ケンパフ類編を閲せば」

④私的なさだめ。作法。おきて。

*かくれんぼ（1891）〈斎藤緑雨〉

「酒席の憲法ケンポフ恥をかかす可らずと強られて」

⑤「けんぽうがく（憲法学）」の略。〔東京帝国大学分科大学講座種類及其数（明治二六年）（1893）〕

「憲法」という語が中国で辿った道筋を手短に述べておく。「憲法」の中国の古典における初出は、中国の春秋時代に、左丘明の著作である『国語』晋語九に「賞善罰姦，國

之憲法也。」という内容で現れ、「法典、法度」の意味で用いられている。時代が下り、漢時代になると、蔡邕『太傅文恭侯胡公碑』に「周覽六經，博總羣議，旁貫憲法，通識國典」とあって、漢時代の法典の意味として用いられている。さらに、中国の宋時代の『集韻・去願』には、「縣法示人曰憲法。後人因謂憲為法」が現れるが、そこでは「法令を公布する」という意味を表している。

続いて、「憲法」が日本において辿った道筋に触れておく。明治5年(1872年)前後までは、箕作麟祥⁴¹が政府の命によりフランス法を翻訳し、「*constitution*」と訳している。箕作は「*constitution*」を『仏蘭西法律書・刑法』の明治3年の訳本では「建国ノ法」としていたが、明治8年の訳本で「憲法」とした⁴²。「憲法」という語そのものは日本で新たに作られたものではないが、そこには新たな意味が付与されており、新しく付与された意味と本来の意味との間に差異が認められる。この点において、「準和製新漢語」と見做すことができるのである。

4.3.2.3 3字語

『新爾雅』の3字語は663語である。そのうち、日本側の辞典や書籍などにはない語は479語で、この件数は全体の約72.2%を占める。それらは中国語、すなわち漢語と見做される。一方、日本側の辞典などにある語は184語で、およそ27.7%を占める。先に述べた抽出の方法に従うと、これらは和製漢語である可能性が高いと判断される。4.3.2.1での分類方法による各語種の語数は、以下の表のとおりである。

⁴¹ 箕作麟祥(1846-1897):幕末から明治時代の日本の幕臣、官僚、洋学者、法学者。蘭学と英語を学び、1861年、蕃書調所英学教授手伝並となった。のち仏学を修め、1867年に徳川昭武のパリ博覧会行に随行した。帰国後は明治政府に入り、西洋法律書の翻訳、旧民法等諸法典編纂などを通じて、近代法制度の整備に貢献した。また、明治初期には中江兆民と大井憲太郎等が学んだ家塾を開き、明六社にも参加した。

⁴² 『日本国語大辞典』による。

	3字語	漢語	和製漢語	和製新漢語	合計
1	释政	20	2	16	38
2	释法	35	1	16	52
3	释計	19		10	29
4	释教育	14		16	30
5	释群	27		6	33
6	释名	6		2	8
7	释幾何	28		6	34
8	释天	18	2	3	23
9	释地	81	5	17	103
10	释格致	45	1	10	56
11	释化	11	4	22	37
12	释生物	31	4	10	45
13	释動物	73		18	91
14	释植物	71	1	12	84
	合計	479	20	164	663

『新爾雅』における1字から7字以上の語のなかでは、3字語の漢語の数が最も多い。語基を分けずに、全479語の漢語を漢籍や史料などで調べてみたところ、古典漢籍に出所を持つ語は「釈政」における以下の1語であることが分かった。

	释政	中国最初の出所
1	枢密院	『文献通考』元

この語は古典漢籍に存在していることから、代表的な3字漢語であると認定する。

また、初出がその典拠に基づき近代以降であると判断できる3字語は、以下の33語である。これらの33語はすべて漢籍に出自を持つが、初出が近代以降であるため、3字の中国製新漢語と認定する。

1	財産刑	『現代大辞典』1922	18	三角州	『欧米印象記』1910
2	自然人	『時代と文芸』1909	19	三疊紀	1914
3	不文法	『ふらんす物語』1909	20	高緯度	1919
4	運送業	『英和商業新辞彙』1904	21	新生代	1914
5	自然力	『恋を恋する人』1907	22	中生代	1914
6	地方債	『袖珍新聞語辞典』1919	23	太古代	1914
7	一元論	『硝子戸の中』1915	24	第三紀	1914
8	懷疑論	『和漢大辞典』1919	25	水平動	『地震学講話』1907
9	感覚論	1920	26	第四紀	1914
10	実験論	『普通術語辞彙』1905	27	断層面	1914
11	半意識	『それから』1909	28	動物岩	1914
12	遠地点	1914	29	非晶質	1914
13	遠日点	1914	30	二疊紀	1914
14	近日点	1914	31	白堊紀	1914
15	近日点	1914	32	管楽器	『洋楽手引』1910
16	海岸線	1914	33	弦楽器	『音楽字典』1909
17	古生代	1914			

残りは 445 語であるが、3 字漢語の諸相全般を究明するためには、語の構成を見る必要がある。前述のように、3 字語は 1 字語の前接語基または後接語基が 2 字語基に付き、(1 + 2) や (2 + 1) の構造パターンを構成する。これらの構造パターンに基づく造語法の詳細については、後の第 6 章で取り上げる。

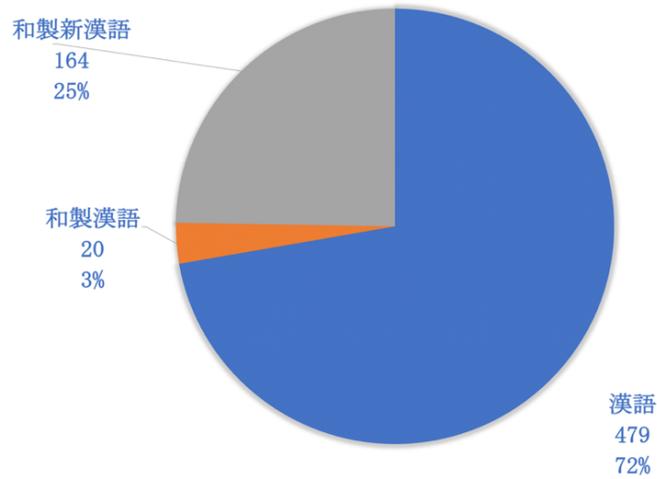
次に、3 字の和製漢語を見てみよう。調べた結果、3 字語のなかで 20 語を和製漢語として認定することができた。以下の表は、和製漢語として認定された 20 語の日本における最初の出所を示したものである。

1	大蔵省	『令義解』 718
2	文部省	『続日本紀』 770
3	後見人	『日葡辞書』 1603
4	天文学	『和蘭天説』 1795
5	遠心力	『暦象新書』 1798
6	回帰線	『二儀略説』 17C
7	北半球	『窮理通』 1836
8	水蒸気	『舎密開宗』 1837
9	炭酸泉	『舎密開宗』 1837
10	南半球	『窮理通』 1836
11	粘着力	『舎密開宗』 1837
12	結晶水	『舎密開宗』 1837
13	酸化物	『舎密開宗』 1837
14	酸性塩	『舎密開宗』 1837
15	親和力	『舎密開宗』 1837
16	嗅神経	『解体新書』 1774
17	視神経	『医範提綱』 1805
18	聴神経	『解体新書』 1774
19	肺静脈	『舎密開宗』 1837
20	常磐木	『宇津保』 970

続いて、3字の和製新漢語を見てみよう。3字和製新漢語と認定できたのは164語である。以下に、その一部を挙げておく。

1	国際法	『将来之日本』 1886
2	留置権	『民法』 1896
3	単本位	『哲学字彙』 1881
4	有機体	『附音挿図英和字彙』 1873
5	太陽系	『改訂増補哲学字彙』 1884
6	顕晶質	『鉞物字彙』 1890
7	加速度	『工学字彙』 1886
8	生成熱	『稿本化学語彙』 1900
9	甲状腺	『医語類聚』 1872
10	攀縁茎	『生物学語彙』 1884

以上のまとめとして、『新爾雅』における3字語の内訳を図表化すると、次のようになる。



4.3.2.4 4字語

『新爾雅』の4字語は、合計558語である。4.3.2.1の分類方法によると、4字和製新漢語は49語であり、およそ8.8%を占める。その一部を以下に示しておく。

日本最初の出所		
1	天賦人權	『人權新説』1882
2	局外中立	『中外新聞』1868
3	治外法權	『東京日日新聞』1878
4	無線電信	『逡信省令第七十七号』1900
5	迷走神經	『医語類聚』1872
6	硬骨魚類	『生物学語彙』1884

また、4字和製漢語は以下の1語のみである。

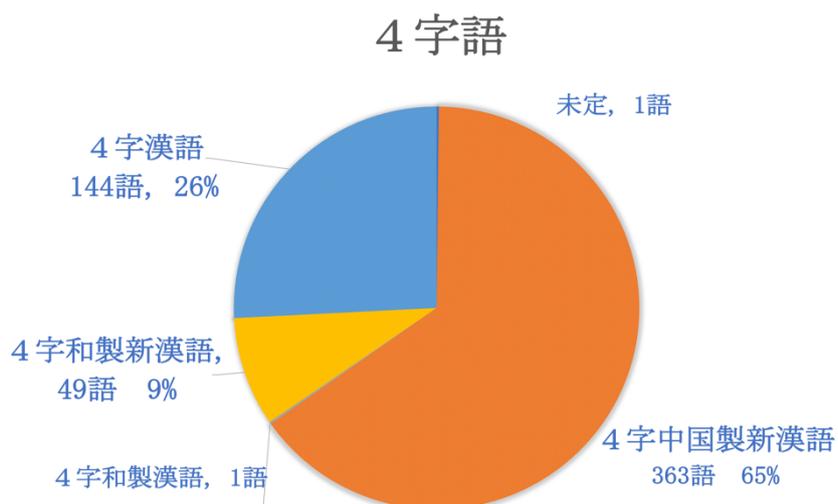
日本最初の出所		
1	家督相続	『康富記』1454

4字漢語については、3語が確認できた。それらの日本の資料における初出の出所と年代は以下の表のとおりである。

日本最初の出所		
1	物物交換	『英和商業新辞彙』1904
2	快樂主義	『青春』1905
3	幸福主義	『普通術語辞彙』1905
	人道主義	『椿姫』1903

これらの語は日本の資料での初出が近代以降であり、かつ『新爾雅』の出版より遅い時期であることから、4字中国製新漢語と認定できる。なお、「人道主義」については資料上日中での初出の比較が困難であるため、語種の判断は保留する。

上記に従って4字語の内訳を図表化すると、次のようになる。



4字語に関する構成パターンに基づく造語法の詳細についても、後の第6章で話題にすることにする。

4.3.2.5 5字語

『新爾雅』の5字語は、計211語である。これまでと同様の判定方法のもと、関係資料を調べた結果、以下の6語を5字和製新漢語と認定することができた。

	5字語	日中での初出
1	刑事訴訟法	『英和外交商業字彙』1900
2	民事訴訟法	『英和外交商業字彙』1900
3	実験心理学	『哲学階梯』1887
4	本初子午線	『本初子午線経度計算方及標準時の制』1886
5	十二指腸虫	『新治療』1898
6	準禁治産者	『民法』1896

これらの6語を除く205語のうち、以下の表の6語が音訳語であることが分かった。音訳語のまま近代中国語で流通したこれらの語は、5字中国製新漢語と認定する。

1	希羅尼安紀
2	干勃黎安紀
3	西留黎安紀
4	老連底安紀
5	埃爾姆斯光
6	亞馬爾格姆

残りの199語は、1字語と2字語が順不同で組み合わさった5字語である。上の6語の音訳語とこれら199語を合わせた205語が5字中国製新漢語と認定できるものである。

4.3.2.6 6字語以上

最後に6字語以上であるが、このうちの6字語は計66語である。日中の辞典や典籍に記載がないため、すべて6字中国製新漢語と認定される。6字語についても、その語構成は基本的に1字語と2字語を語基として組み合わせたものであるという特徴が認められる。

7字語以上について調べると、7字語は20語、8字語は7語、9字語は該当者なし、10字語は1語という結果になった。全体合わせても28語に過ぎず、その構成は様々な語基を組み合わせたものであることが分かった。

以上、2字語から10字語までの語種について、その詳細を記した。

4.3.3 『新爾雅』から見える漢語

本節では、『新爾雅』における語種の有り様をもとに、近代漢語の全体像をまとめてみたい。『新爾雅』に収録されている1字語から10字語の内訳は、1字語が87語、2字語が779語、3字語が663語、4字語が558語、5字語が211語、6字語が66語、7字語以上が28語となる。

これらのうち、語構成が問題にならない1字語と重出語52語を除くと、対象となる語は2305語である。これらの2305語を語種で分類したものが次の表である。

	2字語	3字語	4字語	5字語	6字語	7字語以上	合計
漢語	312	1	144	—	—	—	457
中国製新漢語	207	478	363	205	66	28	1347
和製漢語	73	20	1	—	—	—	94
和製新漢語	184	164	49	6	—	—	403
宣教師から	1	—	—	—	—	—	1
その他	2	—	1	—	—	—	3
合計	779	663	558	211	66	28	2305

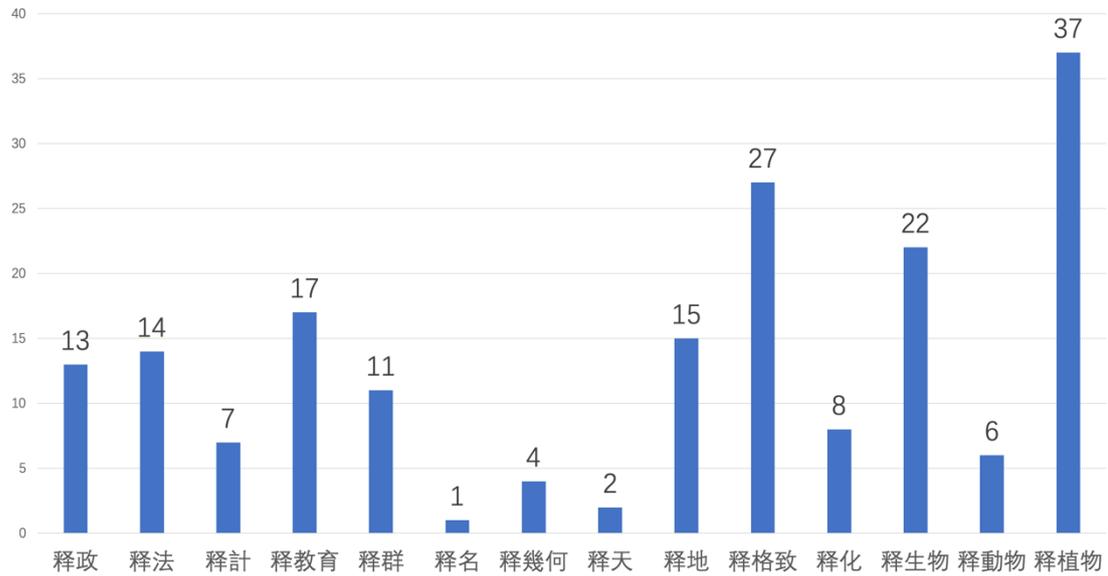
この図から、次のような点を引き出すことができる。

- (1) 全2305語のうち、漢語が1804語で最も多く、全体の約78%を占める。また、漢語のうち、75%以上は中国製新漢語であり、特に2字語以上の中国製新漢語が多数見られる。
- (2) 和製漢語（準和製漢語を含む）には94語があり、全体の約4%を占める。和製漢語の中心は2字語であり、3字和製漢語と4字和製漢語も見られる。
- (3) 和製新漢語（準和製新漢語を含む）には403語があり、全体の約17.5%を占める。2字和製新漢語と3字和製新漢語の数はほぼ同数である。4字和製新漢語も多数見られ、5字和製新漢語も確認される。
- (4) 近代の中国で流通している新語のうち、和製のものは全体の21.6%を占めている。

4.4 『新爾雅』における和製新漢語の意味分野

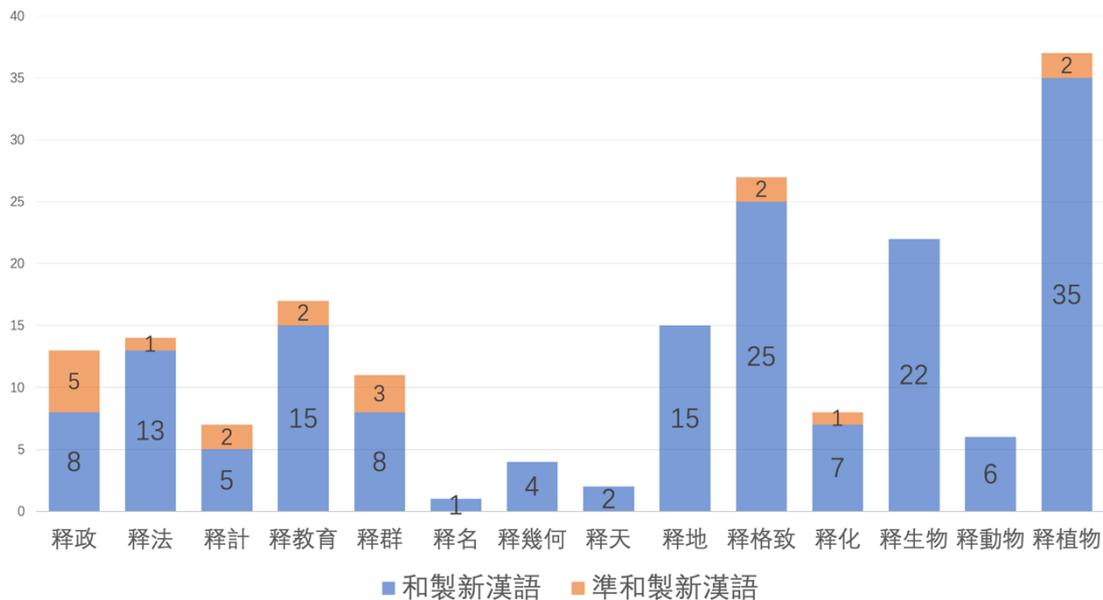
本節では、『新爾雅』における和製新漢語の意味分野を見てみたい。関係する和製新漢語は、字数からは2字語、3字語、4字語、5字語に分けられる。以下、2字語から順に見ていくことにする。

2字語は合わせて778語である。そのうち、和製新漢語と認められるのは184語であり、2字語の24%を占める。それらを意味分野で見ると、以下のグラフのようになる。



このグラフが示すように、「释植物」が37語で最も多く、反対に「释名」が1語で最も少ない。「释植物」に続くのは、「释格致」、「释生物」である。

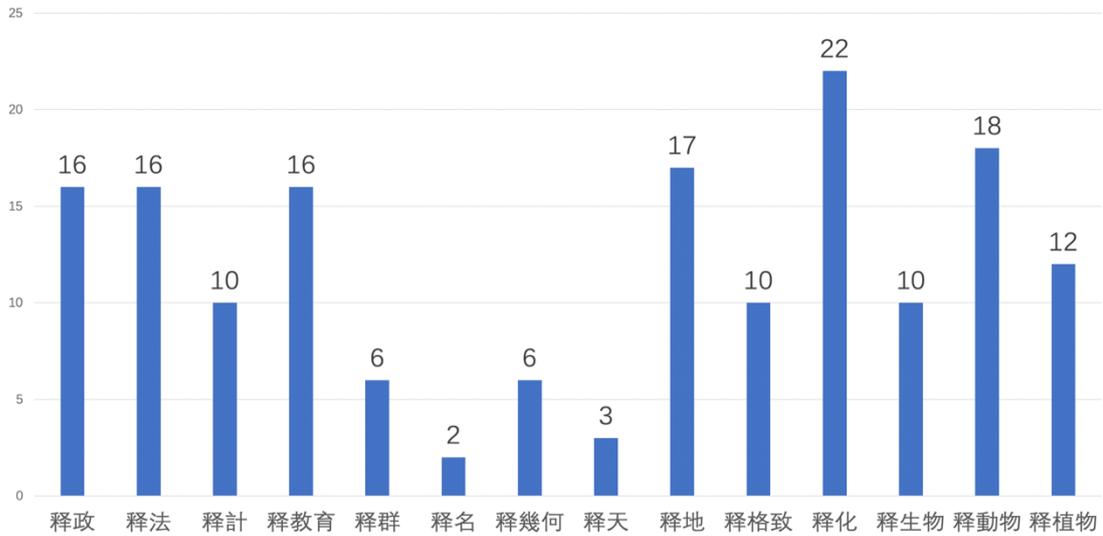
また、その184語のうち、準和製新漢語は18語である。それらについて意味分野で分けると、以下のグラフのようになる。



準和製新漢語については、「释政」が最も多い分野であり、「释群」がそれに続く。

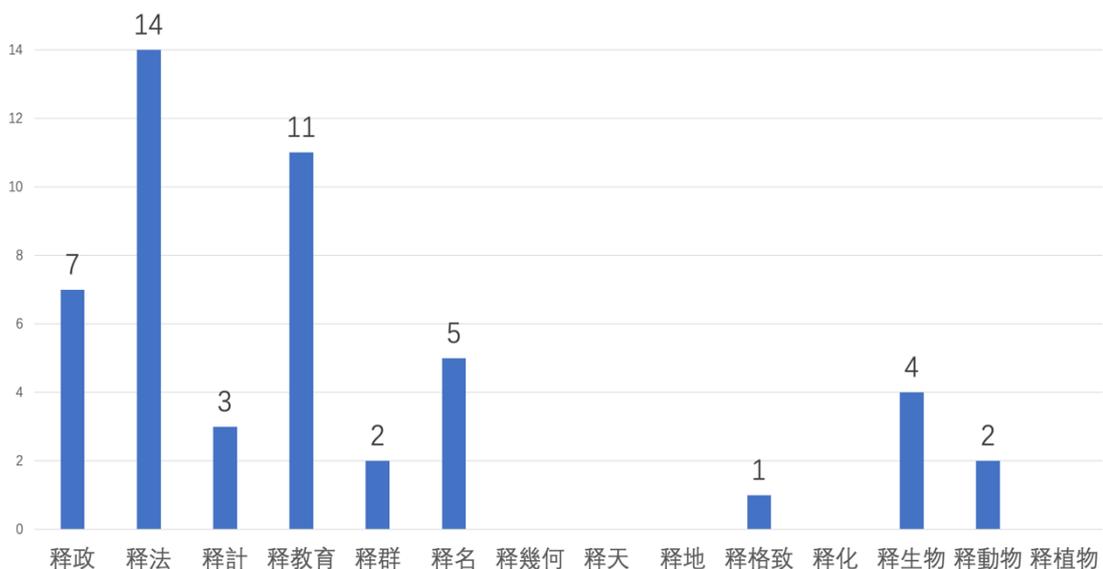
3字語は全体で663語であるが、そのうち、和製新漢語は164語で、3字語の24.7%

を占める。3字語における和製新漢語の割合は、2字語における和製新漢語の割合とほぼ同じである。意味分野で見ると、以下のグラフのようになる。



このグラフが示すように、「释化」が最も多く、22語ある。「释化」に続くのは、「释動物」、「释地」、「释教育」、「释法」、「释政」であり、これらはほぼ同数である。準和製新漢語は3字語では見られない。

4字語は全体では558語であるが、そのうち、和製新漢語は49語であり、4字語の8.8%を占めている。その割合は2字語、3字語の場合より少ない。意味分野で見ると、以下のグラフのようになる。



意味分野で最も多いのは「释法」であり、それに続くのが「释教育」、「释政」である。

準和製新漢語については、3字語の場合と同様に4字語においても見られない。

最後に、5字和製新漢語であるが、認定されるのが6語に過ぎないため、意味分野の内訳については割愛する。

4.5 本章のまとめ

本章では、渡日留学生であった汪榮宝と葉瀾が20世紀初頭に作成した近代中国語の新語集である『新爾雅』を対象として、当時どのような新語が流通していたのかについて詳細な調査・分析を行った。その結果明らかになった点は、以下のようにまとめることができる。

1. 全2639語の新語のうち、和製新漢語は406語であり、全体の17.6%を占める。
2. 2字の和製新漢語と3字以上の和製新漢語はほぼ同数である。
3. 和製新漢語は単独で中国語に流入しただけでなく、中国製新漢語の語基として働く場合も多かった。
4. 近代の中国語で流通した新語のうち、和製のものは21.6%を占める。

留意すべきは、中国語に流入した和製新漢語が中国製新漢語の構成に大きな影響を与えた点である。2字和製新漢語を他の語基と組み合わせることによって、多数の中国製新漢語が創出されたのである。このことは、漢語の造語力の強さを示すとともに、造語法の分析に対して興味深い観点をもたらすものである。漢語の造語法については、第6章で詳しく述べることにする。

第5章 『NEW TERMS』における和製新漢語の中国語への受容

5.1 和製新漢語の確立—中国語非母語話者の観点から

前章で述べたように、中国語にもたらされた和製新漢語は、近代中国語の語彙を豊かにしただけでなく、それをもとに多くの中国製新漢語が創出されることで、近代中国語に大きな影響を与えた。

近代中国語に影響を与えたもう一つの側面は、中国での宣教師の活動である。当時中国で生活していた非中国語母語話者にとって、中国語における新語の学習は避けては通れないものとなっていた。彼らは新語を学習するとともに、積極的に非中国語母語話者に紹介していった。その初期の重要な著作物として *NEW TERMS FOR NEW IDEAS: A STUDY OF THE CHINESE NEWSPAPER* (以下、『NEW TERMS』) が挙げられる。

アヘン戦争後、5つの貿易港が開かれると、宣教師たちは布教のために中国に入学し、活発に布教活動を行った。彼らにとって、中国語の学習はキリスト教の教義を中国に広めるうえで極めて重要なものとなった。そして、日々の情報を入手するには毎日流通している新聞も重要な手段になった。宣教師たちは中国語の書籍や教科書を翻訳する活動を行ったが、本研究との関係で特に重要な意味を持つのが当時の新語を収録した『NEW TERMS』の編纂であった。

『NEW TERMS』の初版は1913年に出版された。初版が出版される直前の1911年・1912年に辛亥革命が清朝の支配を覆し、2000年以上にわたる中国の封建君主制度を終わらせた。当時多くの新聞はもともと清朝政府の政策によって休刊せざるを得ない状況になっていたが、武昌の蜂起の成功によって革命的な氣勢が急速に広まり、新聞の流通が辛亥革命前後では有力な媒体となった。そのような社会情勢の中で、『NEW TERMS』の初版が出版されたのである。1913年以降も混乱が続き、新語の創出や伝播の変遷も絶えることがなかった。このような社会状況のもと、『NEW TERMS』も第2版(1915)、第3版(1917)、第4版(1922)、第5版(1924)、第6版(1933)と改訂を重ねていった。

辛亥革命以降、社会の混乱と並行して、中国への和製新漢語の伝播も大きく変遷した。その変遷の経過がどのようなものであったのかを究明するために、本章では、『NEW TERMS』における和製新漢語を考察対象として取り上げる。非中国語母語話者(非漢字

文化圏の話者)の観点から、当該の新語が中国語で造られた中国製新漢語なのか、それとも日本語から受容した和製新漢語なのかを判定したうえで、『NEW TERMS』に見られる和製新漢語について考察を進める。

5.2 『NEW TERMS』の内容

5.2.1 編纂の社会背景と作者

『NEW TERMS』編纂の背景をなすのは、当時の中国における新聞発行の状況である。中国の近代における新聞の発行は、1810年代から始まっており、発行開始当初において新聞は、中国国内で社会的な流通品として発行されたのであった。当時の中国における新聞は、最新のニュースや目まぐるしい社会の動きを広く、かつ、迅速に伝える唯一の媒体であった。ところが、アヘン戦争以前、発行開始後間もない新聞に対しては、清朝政府からの厳格な規制がかかっており、発行地はシンガポールと広州の一带に限定されていた。

以下の表から分かるように、アヘン戦争終結後も、中国各地で新聞の発行が継続されていた。とりわけ、上海では、中国語新聞と外字新聞を含めると、計86紙が発刊されていた。この事実は、上海での新聞発行の盛況ぶりと、新聞が当該の地域にとって不可欠であることを示している。

場所	上海	香港	澳門	広州	厦門	福州	漢口	天津	寧波	その他	合計
外字紙	41	12	14	5	2	5	2	2	/	7	91
中国語紙	45	6	/	10	3	4	7	1	2	8	86
総計	86	18	14	15	5	9	9	3	2	15	177

「1865～1895年の各主要都市における新創刊新聞統計」

上海を除く中国国内で中国人により創刊された新聞の数は、極めて少なかった。なぜなら、清朝政府は、「清印刷専律」(1906)をはじめとする印刷出版に関する様々な法令を公布し、印刷出版物を厳重な管理下に置いて、法令に違反した者を処罰したからである。

ところが、1911年10月10日に武昌での新軍蜂起に端を発した辛亥革命により状況は一変した。革命によって樹立された臨時政府は、「大清印刷物件專律」、「新聞報章应守規則」、「大清報律」などの清朝が制定した法令を次々に廃止した。廃止の目的は、全国各

地に革命の成功や進展などに関する情報を広めることにあった。かくして、武装が起きた地域は、新聞発行の中心地となり、これらの地域から全国各地へと革命の成功や進展が報道されるようになった。革命の勢いが急速に拡大するにつれて、臨時政府は、関係諸機関の主張を報道するために、次々と政府の新聞機関を創設して、新聞を新たに創刊させた。このような経緯で創刊された新聞として、湖北軍政府の『中華民国公報』、漢口軍政府の『新漢報』、文学社の『民心報』、胡石庵の『大漢報』、張振武の『震旦民報』などが挙げられる。これらの新聞の主な内容は、社説、時評、訳文、各地のニュース、軍政記事、生活記事、清朝末日記などであった。

このほか、言論、出版の自由に伴い、上海、香港、武漢、広州などの大都市では、社会革命派の新聞も次々に創刊された。また、孔（1994）の統計によると、1905年から1911年にかけて、上海で15種類、香港で13種類、広州で15種類、武漢で10種類の新聞が創刊されている。これに加え、臨時政府は武装蜂起の情報を広めることによって、革命の勢いとそれに伴う影響を拡大するために、民間による新聞の出版も奨励した。それにより、短期間で多数の民間の新聞が現れた。その主なものとしては、『民報』、『民立報』、『新州日報』、『天鋒報』、『革命軍』、『警報』、『新軍報』、『午報通信』、『大漢民報』、『大漢報』、『神州女子新聞』、『女壇新聞』、『協和報』、『少年雑誌』、『群強報』、『大自由報』、『通問報』などがある。戈（1955）によると、辛亥革命の時代には、全国の新聞が10年前の100紙から500紙へと増加し、その結果、総発行部数は4300万部に達していた。これらの新聞の主な内容は、経済、政治、教育、政党、国際関係、宗教、ヨーロッパなどに関する記事であり、広告、演説、布告、法律法規なども掲載された。

当時の新聞は、社会で新しく起った出来事を迅速かつ広範囲に伝える唯一の媒体であり、当時の目まぐるしく変化する社会の新しい動きを映し出していた。それと同時に、新しい概念や出来事を表現する中国語の新語も急増することとなった。その新語には、渡日した留学生や亡命者の手によって日本語から翻訳された語句や借用語が大量に含まれていた。梁啓超の『清議報』や西洋の法律と政治制度などを紹介した楊延棟らの『訳書匯編』、革命的な宣伝物である『国民報』、日常生活に関わる『遊学訳編』などには多数の和製漢語が含まれており、それらは新語として中国語に流入していった。

しかし、和製新漢語を含む新語は、これまでの中国には無かった新しい概念を表すものが大多数であった。そのため、中国で活動していた外国人にとっては、これらの新概念は非常に理解しにくいものであった。この問題を解決するために、これらの新語や新

語句を解説する辞書やそれらを習得するための教科書や用語集が必要となったのである。

次は、『NEW TERMS』の作者についてである。『NEW TERMS』は宣教師の Ada Haven Mateer (1847-1936) によって、1913 年に出版された。彼女はアメリカ人女性宣教師で、中国語名を麦提雅と称した。1847 年 11 月 19 日にアメリカ東北部マサチューセッツ州 (Massachusetts) のブルックライン(Brookline)に生を受けた。信仰する宗教などをはじめ家庭環境の詳細は不明ではあるが、彼女は、当時の時代風潮の影響を受けて、アメリカ公理会に入った。1879 年にアメリカ公理会の宣教師であった Eliza Jane Gillet に誘われて、北京にある「貝満女中」(Bridgman School) に教師として赴任した。「貝満女中」は Eliza Jane Bridgman の夫である Elijah Coleman Bridgman (1801-1861) が設立した学校である。その後も、Ada Haven Mateer はそこで教師として勤め、学生に尊敬される教師になり、名教育者としてその名を馳せた。

その後彼女は 1900 年に、宣教師の Calvin Willson Mateer (1836-1908) と結婚し、登州で共に漢語を学習し、布教活動を行った。夫で宣教師の Mateer は、聖書の漢訳や中国語の教科書を編纂した人物であり、妻の Mateer も夫の影響を受けた。『NEW TERMS』は、もともと夫 Mateer の『官話類編』の補助的な用語集として作る予定であったが、制作過程において、上述したような新語の扱いの難しさを実感し、読者がよりよく理解することに資するべく、Mateer はこの補助的な用語集を『官話類編』から独立させ、より詳しい説明を付けたり原文の出所を提示したりすることで、編集作業をやり直すことにした。こうして、1913 年に『NEW TERMS』が完成したのである。

5.2.2 編纂の目的

上述のとおり、『NEW TERMS』は、1900 年から 1913 年までの様々な新聞から新語を集めたものであり、当時の社会の動きをリアルに反映する高い時事性を持った書籍であると言える。

『NEW TERMS』の序文では、冒頭に出版の主旨を以下のように説明している。

“everything nowadays must commence with an aim. And of course this book was also commenced with a definite aim—to help foreigners to read the Chinese newspaper.”

また、次のようにも述べている。

“Now for the positive side ---what the book really is. Perhaps the secondary title is more exact --- a study of the Chinese newspaper. That was a thing which had not been evolved at the time the Mandarin Lessons were prepared.”

このように、宣教師の手によって編纂された『NEW TERMS』の対象は、宣教師にとどまらず、中国で活動する英語を理解できるあらゆる外国人を含んでいた。『NEW TERMS』の目的は、非中国語母語話者で英語を理解できる外国人が、激動する中国社会の事象を紹介する中国語新聞を読むことにより情報を収集できるようにする、というものであった。

5.2.3 版本の状況

NEW TERMS FOR NEW IDEAS: A CHINESE NEWSPAPER という書名にあるキーワード『NEW TERMS』は、「新名詞」と訳され、全ページにわたりそのヘッダー部分に「新名詞」という表記が記載されている。しかし、実際には、本書には名詞だけでなく、形容詞や動詞なども収録されている。「新名詞」と中国語に訳したのは、その収録語句の大多数が名詞であることに起因するものと思われる。

『NEW TERMS』は、1913年版（初版）、1915年版（第2版）、1917年版（第3版）、1922年版（第4版）、1924年版（第5版）、1933年版（第6版）の計6種類が出版されている。このうち、筆者が見ることができたのは、初版、第2版、第3版、第4版の4つで、第5版と第6版は未見である。各版の出版年、ページ数、発行所は以下のとおりである。

版	発行年	ページ数	発行所
初版	1913年	148頁	美華書館
2版	1915年	207頁	美華書館
3版	1917年	210頁	美華書館
4版	1922年	268頁	美華書館
5版	1924年	—	美華書館
6版	1933年	—	広学会

（第5版と第6版は未見のため、ページ数は不明。）

『*NEW TERMS*』の初版は全148頁、44章構成で、1913年に上海の美華書館から出版された。その2年後の1915年には、早くも第2版が出版されている。第2版では初版の新聞記事に対して、それぞれの分野で新たに536の新語が加えられ、英語索引も追加されている。この536という数字は、単に初版に新語が追加されたことによる結果ではない。実のところ、第2版では初版にあった新語の一部が削除されている。また、収録語数の変化以外に、中国語の表記が初版から変化している語も確認できた。

第3版は、1917年に出版され、第2版と比べて版面とページ数は異なっているものの、内容は第2版と同じである。

第4版は、第3版の5年後（1922）に出版され、分量は、40ページ増加した。増加分は、第2版（および、第3版）の内容はそのままにしながらも、第45章が追加されたことである。第45章では、1920年の新語713語と1921年の新語20語が掲げられている。また索引の部分では、元の中国語索引や英語索引に加えて、単漢字索引が新たに追加されている。

第5版は、第4版の2年後の1924年に出版されている。上述したように、第5版は未見であるが、第4版と第5版の出版間隔は、初版と第2版のそれと同様（i. e., 2年）であるから、1922年から1923年までの2年間に使用された新語が追加されているものと考えられる。ただし、出版間隔が2年間という比較的短い期間であったため、追加新語数は、比較的少ないものと思われる。

最後の第6版は、第5版から9年後の1933年に出版されているが、この版本の発行所はそれまでの美華書館ではなく広学会に変わっている。このことから、第6版は第5版の重版であると考えられる。古い本が出版社を変えて後年に出版されることはよくあることと推測される。

以上から、『*NEW TERMS*』の初版（1913）から第5版（1922）までが上海の美華書館⁴³によって出版されたものであることが分かるのであるが、樽本(2012)は、美華書館による出版活動の様子を以下のように記している。

⁴³ 美華書館は、1844年に「花華聖經書房」（“The Chinese and American Holy Classic Book Establishment”）としてマカオに設立された。その設立の背景には、アメリカ長老会が中国へキリスト教を布教するという狙いがあった。1854年、「花華聖經書房」は寧波に移転した。1860年に寧波から上海に進出し、社名が「美華書館」へ変更されたのに伴い、英語名も“American Presbyterian Mission Press”へと変更された。社名変更後、中国内でのキリスト教布教を目的として、大量の漢訳聖書や布教用テキストを印刷、出版していった。

「中国においては、キリスト教関係を主としてそのほかの分野を含めた印刷物を多数送り出して知られる。美華書館が導入した印刷機器、漢字の活字製造法は、中国近代印刷史において大きな役割をはたした。また、著名であるひとつの理由は、商務印書館を創立した中国人の幾人かが美華書館で働いていたからだ。人と宗教のつながりで美華書館の名前がでてくる。日本では、日本語の辞書複数を印刷したことで知られている。和英、英和、仏和、独和といったそれぞれの辞書を印刷するには、当時の日本ではまにあわなかった。上海の美華書館に印刷を依頼せざるをえなかった。」(p. 1)

本章は、『*NEW TERMS*』の初版(1913)の考察を中心とするが、それに加えて第2版(1915)、第3版(1917)、第4版(1922)も必要に応じて比較検討し、1900年から1922年までの約20年間に中国社会で流通した新語の考察を行う。初版出版前の1911年から1912年の間に辛亥革命によって清朝の統治体制が転覆し、2000年以上にわたる中国の封建君主制度に終止符がうたれたことにより、中華民国が誕生した。そこで、新聞に現れた新語を収録するという選定基準の下で初めて編纂された初版(1913)を『*NEW TERMS*』を代表するものと考え、これを研究対象の中心に置く。

1913年以降、清朝から政権が替わった後も社会的混乱は続いた。社会的混乱と並行して、新語の創出と伝播にも大きな変化が生じていた。1913年に辛亥革命が終結したとは言え、新語はそれ以降も近代中国語において重要な位置を占めている。『*NEW TERMS*』は、1913年の初版出版後、時代の変化や新しい新聞の刊行に対応するために何度も改訂が行われた。これらの改訂は時事用語の変遷を反映したものと言える。

5.3 『*NEW TERMS*』とその語彙の考察

以下、上述のとおり、初版(1913)を考察の中心に置き、必要に応じて第2版(1915)、第3版(1917)、第4版(1922)も取り上げることにする。

5.3.1 『*NEW TERMS*』における語彙の意味分野と語の構成

前述のように、『*NEW TERMS*』は、主に辛亥革命以降に刊行された新聞記事に現れた「新名詞」を収録し、英語母語話者が中国語新聞を読めるようにするという目的のもので編纂されたものである。初版は全体で44章であり、収録語彙の範囲は、以下に示すように、多岐にわたっている。

『NEW TERMS』の目次

1. Suffixes indicating a Class of Men
2. Suffixes indicating a School of Thought
3. Figures
4. Government Affairs
5. Government-Provisional
6. Government-Finance, Post-Office, Flag
7. Government-Functions, Constabulary, etc.
8. Military Affairs-Personnel
9. Military Operations, Arms Equipments, etc.
10. The Law
11. International Relations
12. Medicine, the Practice or Profession
13. Trade or Commerce
14. Reform
15. Political Parties
16. Societies and Clubs-Transaction of Business
17. Societies and Clubs-Officers, Members, Names of Societies
18. Sociology
19. The individual
20. Religion-Organization, Forms of Belief and Unbelief
21. Religion-Officials, Ordinances, etc.
22. Education-Courses of Study, Plant, Personnel
23. Education-Expenses, Terms of Study, Grades, text-books, Scientific, Terms
24. Language
25. The Press
26. Philosophy
27. European Civilization-Amusements, Art
28. European Civilization-Posts and Communications, Steam Electricity
29. European Civilization-House and Appointments, Food, Clothing, etc.

30. Unity and Regularity and their Opposites
31. Positive, Negative, and other Adjectives
32. Time, Place, and a few Abstract Nouns
33. Mutual Relations-Attitude in Feeling or Action
34. Mutual Relations-Ceremonies and Forms of Politeness
35. Oppression and Violence
36. View-Point. etc.
37. To Originate, Advocate, Oppose, etc.
38. To Reform, Advance, etc.]
39. To Accomplish, Publish, etc.
40. Miscellaneous Nouns
41. Short Clauses
42. Supplementary Terms
43. A Few Terms from Japan
44. Review Lesson

また、各分野の具体的な語数は以下のとおりである。

分野	語数	分野	語数
1-2接尾辞	65	25メディア	80
3代名詞	44	26哲学	86
4政治	56	27-29ヨーロッパ	258
5-7政府	151	30統一と自然	41
89軍事	176	31形容詞	49
10法律	75	32抽象名詞	52
11国際関係	72	33感覚と行動	44
12医薬	27	34礼義	38
13貿易と商業	77	35暴力	51
14改革	70	36思想	52
15政党	37	37主張	36
16-18社会	205	38-40他の名詞	126
19個人	75	41語組	41
20-21宗教	134	42補充語彙	128
22-23教育	196	43日本語から	31
24言語	104	44復習	
合計：2677			

この44分野の総語数は、2677語である。このうち、「ヨーロッパ」が最も多い258語で、「医薬品と医療職業」が最も少なく僅か27語となっている。「ヨーロッパ」の次には、語数が多い順に、「社会」、「教育」、「軍事」と続いている。アヘン戦争以降、中国は欧米列強各国の侵略の対象となり、次第に半植民地状態になっていったことで、亡国の危機が眼前に迫っていた。そのため、自国救済の方策を探し求めていた。ここで注意すべきは、自国救済のために、知識人たちが西洋の書籍から西洋の進んだ学問、学術に関わる概念を中国語に取り入れようとしたという点である。西洋の書籍に現れる概念は、中国にとっては新しいものであったため、西洋に関わる「ヨーロッパ」、「社会」などの分野が上位を占めることになった。

ここで重要な点は、収録語数の多い「ヨーロッパ」、「社会」、「教育」、「軍事」の分野が当時多く漢訳された日本語書籍の分野と一致しているという点である。そのため、『NEW TERMS』に収録された新語は、その多くが日本語に由来している可能性がある。ここで、第4章で提示した実藤（1980）による、漢訳された日本語書籍の分類を再掲しておく。



実藤は、漢訳された日本語書籍を哲学類、宗教類、自然科学類、応用科学類、社会科学類、中国史地類、世界史地類、語文類、美術類の9種類に分けている。ここでは、この分類をもとに、以下のように「人文系」、「社会系」、「自然系」、「科学系」に大別したうえで、それぞれを細分化することにする。

「人文系」：1、「接尾辞」、3「代名詞」、19「個人」、
 36「思想」、37「主張」、24「言語」、
 31「形容詞」、32「抽象名詞」、34「礼義」

「社会系」： 4「政治」、5, 6, 7「政府」、8, 9「軍事」、
10「法律」、11「国際関係」、12「医薬」、
13「貿易と商業」、14「改革」、15「政党」、
16, 17, 18「社会」、22, 23「教育」、
27, 28, 29「ヨーロッパ」、35「暴力」

「自然系」： 30「統一と自然」

「科学系」： 25「メディア」、33「感覚と行動」

なお、26「哲学」と20, 21「宗教」は、それぞれ実藤（1980）の哲学類と宗教類に対応している。また、38, 39, 40「他の名詞」や41「語組」、42「補充語彙」、43「日本語から」、44「復習」は、実藤（1980）のいずれの分野にも対応しない。

『*NEW TERMS*』の初版における時事用語は、主に1900年から1913年の間に刊行された新聞から収録されたものであり、これらのうち、「人文系」と「社会系」の用語が大部分を占めているが、「自然系」と「科学系」の用語も含まれている。この事実から、中国初の近代中国語の新聞時事用語集『*NEW TERMS*』では、当時の中国社会に行き渡っていた語彙が幅広く収録されていることが分かる。

また、上で述べたように、『*NEW TERMS*』の初版に所収される「新名詞」は、主に1900年から1913年の間に中国国内で流通していた新聞や雑誌にある新語を取り入れたものであるが、特筆すべきは、同書に収録された新語には、英語訳が付されているという点である。本章では、中国語の新語の語構成をこの英語訳も活用しながら分析したいと思う。

『*NEW TERMS*』に収録されている語は字数で言えば、1字語から7字語までということになる。該当する例を挙げると、以下のようになる。

1字語：「術」、「期」、「新」

2字語：「教育」、「信用」、「位置」

3字語：「外交家」、「論理的」、「動物園」

4字語：「中央政府」、「政治思想」、「未開化国」

5字語：「農林試験場」、「無政府主義」、「監督検察官」

6字語：「高等検査総長」、「定性分析化学」、「郵貯儲蓄銀行」

7字語：「共和建設討論会」

ここで注意すべきは、すべての語を整理すると、52の語が2つまたは3つの分野に重出しているという点である。該当する重出語は、次の表のとおりである。

	語	初出の分野	重出の分野	重出の分野
1	議案	5-7政府	16-18社会	
2	商界	13貿易と商業	16-18社会	
3	洋服	14改革	29ヨーロッパ	
4	支會	16-18社会	2021宗教	
5	人格	19個人	43日本語から	
6	常識	19個人	42補充語彙	
7	内容	25メディア	36思想	
8	前提	26哲学	31形容詞	
9	秩序	29欧洲	30統一と自然	
10	絶対	26哲学	31形容詞	
11	國會	5-7政府	42補充語彙	
12	輸入	13貿易と商業	38-40ほかの名詞	
13	社會	16-18社会	16-18社会	
14	組織	16-18社会	40ほかの名詞	
15	精神	1-2接尾辞	19個人	
16	參謀	5-7政府	38-40ほかの名詞	
17	位置	5-7政府	32抽象名詞	
18	攻撃	89軍事	33感覚と行動	
19	口號	89軍事	38-40ほかの名詞	
20	利益	11国際関係	32抽象名詞	
21	範圍	11国際関係	36思想	
22	本部	16-18社会	24言語	
23	贊成	16-18社会		
24	反對	16-18社会	33感覚と行動	37主張
25	公民	16-18社会	42補充語彙	
26	種族	16-18社会	16-18社会	
27	事實	26哲学	38-40ほかの名詞	
28	性質	19個人	26哲学	
29	注意	19個人	38-40其他	
30	感情	19個人	33感覚と行動	
31	名譽	2223教育	32抽象名詞	
32	演說	25メディア	29ヨーロッパ	
33	時事	25メディア	38-40ほかの名詞	
34	編輯	25メディア	25メディア	
35	效力	26哲学	38-40ほかの名詞	
36	經驗	31形容詞	38-40ほかの名詞	
37	偵探	5-7政府	89軍事	89軍事
38	執照	5-7政府	29ヨーロッパ	
39	根據	89軍事	26哲学	
40	組合	16-18社会	30統一と自然	
41	運動	29ヨーロッパ	37主張	
42	信箱	5-7政府	29ヨーロッパ	
43	立正	89軍事	34礼義	
44	陸軍部	4政治	5-7政府	
45	海軍部	4政治	5-7政府	
46	司法部	5-7政府	5-7政府	
47	資本團	11国際関係	13貿易と商業	
48	秘密會	5-7政府	16-18社会	
49	唯物論	2021宗教	26哲学	
50	優先權	32抽象名詞	42補充語彙	
51	社會主義	1-2接尾辞	16-18社会	
52	通俗教育	2223教育	42補充語彙	

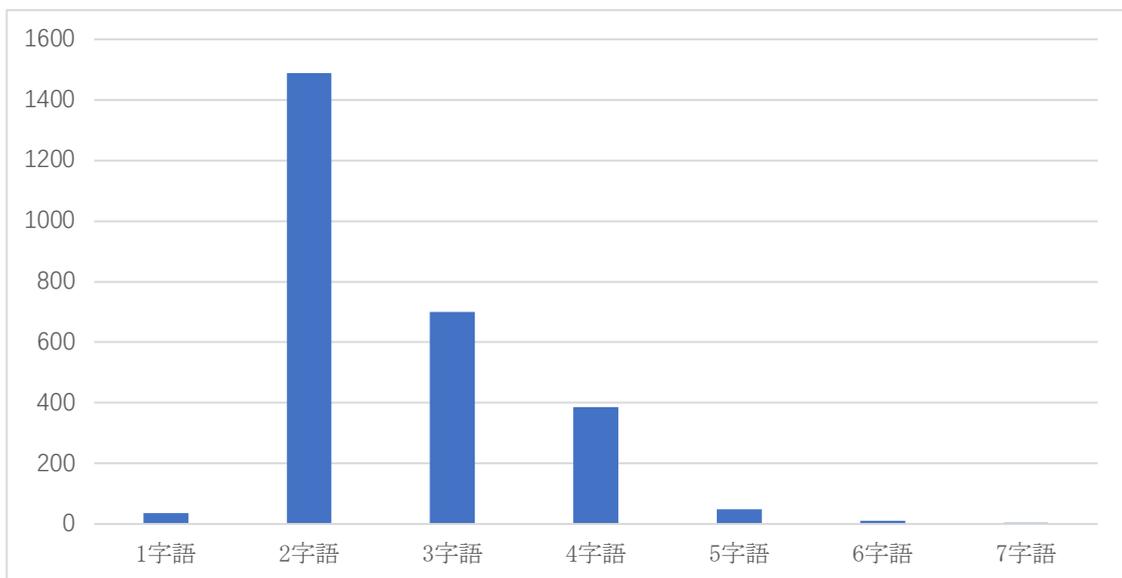
これらの 54 語を除く 2623 語を各章における 1 字語から 7 字語の語数で示すと、以下のようになる。

章	1字語	2字語	3字語	4字語	5字語	6字語	7字語	数量
1--2	4	5	17	38	1			65
3		31	2	11				44
4		26	16	13	1			56
5--7	5	71	55	10	7			148
8--9	4	108	54	8				174
10		33	27	9	4	2		75
11		42	8	19	3			72
12		10	14	2	1			27
13	1	45	18	11		1		76
14		36	11	23				70
15		10	19	4	3		1	37
16-18	4	105	47	36	6		1	199
19		56	7	10	1			74
20-21		37	71	15	8	1	1	133
22-23		106	51	34	2	3		196
24	3	30	44	17	7	1	1	103
25	7	58	13	1				79
26	2	60	15	4	1	1		83
27-29		121	105	26	2			254
30		32	3	4				39
31	1	39	6			1		47
32	2	30	12	5				49
33		33	4	4				41
34		21	11	4	1			37
35	1	37	5	8				51
36		41	3	6				50
37		31	2					33
38-40	1	98	11	7				117
41		15	1	25				41
42	2	61	37	20	1	1	1	123
43		16	4	10				30
	37	1444	693	384	49	11	5	2623

この表から分かることは、『NEW TERMS』には主に2字語、3字語、4字語が数多く収録されているということである。また、5字語以上の語もいくつかの分野に分布していることが分かる。1字語から7字語の語数は、以下のとおりである。

- 1字語：37語
- 2字語：1444語
- 3字語：693語
- 4字語：384語
- 5字語：49語
- 6字語：11語
- 7字語：5語

以下は、これらをグラフ化したものである。



このグラフから明らかなように、全体の中で2字語の件数が突出して多く、全体の55%を占めている。次いで、3字語の26.4%、4字語の14.6%と続く。2字語から4字語で全体の96%を占めているのに対し、5字語以上の件数は65語に過ぎず、これを割合で示すと、全体の2.5%となる。

以下、『NEW TERMS』における新語の分析を1字語から7字語の順に進めていきたいと思う。

1 字語

家		牌	Brand of goods	新	Parody on
派	A class	會	Society	稿	Manuscript
界	Sphere	堂	Session	說	Theory
術	art	助	To seconded	論	Theory
幣	Money	助	Aye	偉	Huge
元	Dollar	位	Case	分	A minute
弗	Dollar sign	顯	Expressed	號	Day of month
角	Dime	隱	Understood	刺	To assassinate
毛	Dime	報	Magazine	念	Twenty
街	Brevet	期	A volume	露	Essence
署	Acting	號	A number	園	New form of 國
副	Deputy or vice	欄	Department of paper		
艘	Classifier of guu-boats	云	And so on		合計：37

上の表は、所収される新語としての1字語を網羅したものである。語構成の観点から言えば、これらの1字語はこれ以上分解することのできないものであり、2字以上の語において語基の働きをする。

2 字語

2字語には、「政府、命令、森林、警察、精兵、軍法、國際、通商、革命、問題、否認、希望、宗教、講師、學位、試験、目次、分析、旅館、感情」などがあり、これらをはじめとして、1444語が収録されている。1444という数字を見れば、2字語の収録語数が3字語と4字語の語数と比較しても、突出して多いことが分かる。『新爾雅』の場合と同じく、新語であっても、伝統的かつ基本的な語彙を基本とするということを示している。

3 字語

前述したように、3字語以上の場合、1字と2字の語基を基本として複合してできた複合語であることから、多くの場合1字と2字の語基に分解できる。例外として、和製漢語ではない音訳語の「蘇格蘭」、「初高辣」、「冰吉零」が挙げられるが、語基に分解できないこのような語は考慮の対象外とする。そうすると、3字語は以下のように、(2+1)と(1+2)という2種類の構成パターンに分類される。

(2+1)

例：製造/家、書記/官、裁判/所、
精神/病、出生/率、心理/學、
懇親/會、美術/品、提議/人、運動/日など

(1 + 2)

例：府/知事、不/同意、助/教授、
大/禮服、新/發明、超/自然、
下/半旗、借/外債、原/議案、總/編輯など

(2 + 1) のパターンを示す語は 653 語で、(1 + 2) のパターンを示す語は 44 語である。これらの語数を、全体に占める割合で示すと、前者は 94%であるのに対し、後者は 6%しかない。

4 字語

(2 + 2)

例：私立/學校、上流/社會、幸福/主義、
精神/療法、神經/過敏、高等/法官、
新聞/記者、政治/方針、言論/自由、普通/知識など、計 366 語

(2 + 1 + 1)

例：自治/之/權、投票/之/權、同種/之/國、
更新/之/時、對付/之/法、主名/之/位、
受事/之/位、主物/之/位、轉機/之/際、
環球/之/行、外國/語/科、大學/院/生など、12 語

(1 + 1 + 2)

例：滿/漢/融洽、急/不/容緩、耳/目/一新の 3 語

(1 + 2 + 1)

例：總/檢察/廳、行/注目/禮、紅/十字/會、
女/革命/軍、半/開化/國の 5 語

(3 + 1)

例：美以美/會の 1 語

(1 + 1 + 1 + 1)

例：農/工/商/部の 1 語

4字語を英語訳に基づいて考察すると、(2+2)で構成された複合語が圧倒的に多いが、(1+2+1)、(2+1+1)、(1+1+2)も存在する。例えば、「半開化国」は、まず「半+開化国」という「3字語+1字語の前接語基」の形式が分けられ、分解して出来た「開化国」はさらに、「開化+国」という「2字語+1字語の後接語基」の形式に分けられる。「大学院生」も「半開化国」と同じように、まず「大学院+生」という「3字語+1字語の後接語基」に分けられ、さらに、「大学+院」という「2字語+1字語の後接語基」に分けられる。

また、『新爾雅』の4字語の場合と同じように、4字語であると思われる形式の中に「～之～」がある。この場合も、「自治/之/權」や「投票/之/權」から、「之」を取れば、3字語の「自治權」や「投票權」が取り出せる。この「之」は古典文言に存在する「之」と同じ意味である。

5字語

(2+2+1)

例：君主/共和/國、總統/秘書/長、臨時/參議/院、國家/買賣/品、農林/試驗/場、
高等/審判/庭、高等/檢査/廳、地方/審判/庭、監督/檢察/官、六國/銀行/團、
萬國/弭耳/會、海牙/和平/會、醫生/寒暑/表、統一/共和/黨、國民/共進/會、
本黨/機關/部、萬國/改良/會、精神/研究/會、華洋/義賑/會、女子/參政/團、
中華/聖公/會、婦女/青年/會、使徒/信心/會、宗教/聯合/會、義勇/佈道/團、
浸信/傳道/會、聖經/研究/會、主要/云謂/字、過去/既事/式、將來/既事/式、
活定/名目/字、三段/推理/法、美術/明信/片、自來/墨水/筆の計 34 語

(2+1+2)

例：臨時/大/總統、臨時/副/總統、實際/之/經驗、基督/徒/公會、
初等/小/學校、高等/小/學校、等級/之/比較、脱帽/三/鞠躬の計 8 語

(1+2+2)

例：無/政府/主義、開/成立/大會の 2 語

(1+1+2+1)

例：蒙/藏/事務/局の 1 語

(1+1+1+2)

例：以/金/為/本位の 1 語

(1 + 1 + 1 + 1 + 1)

例：第一/二/三/位、第一/二/三/身の2語

(3 + 2)

例：亜西亜/協会の1語

5字語の場合も、4字語と同じように、付与されている英語訳を参考にして考えてみると、複数の語基の組み合わせから成立していることが分かる。例えば、「君主/共和国」

(2 + 2 + 1) は、まず、「君主 + 共和国」(2 + 3) に分けられる。このうちの「共和国」は、「共和 + 国」(2 + 1) に分けることができる。また5字語の場合、(1 + 1 + 2 + 1)、(1 + 1 + 2 + 1) も、数は少ないながら、確認された。また、(2 + 1 + 2) の中には、4字語と同様に「之」の付いている語も存在する。このように、5字語の構造も基本的に、1字語と2字語を語基として組み合わせたものであると言える。

6字語

(2 + 2 + 2)

例：定性/分析/化学、傳倫/証人/到案、法律/業士/學位、
定性/分析/化学、定量/分析/化学、公衆/利用/主義、
神聖/不可/侵犯、郵政/儲蓄/銀行の8語

(2 + 1 + 2 + 1)

例：借債/之/抵押/品、及物/之/云謂/字の2語

(3 + 2 + 1)

例：蘇格蘭/福音/堂の1語

6字語は、全体でみても11語しかなく、その主たる型は(2 + 2 + 2)である。また、(2 + 1 + 2 + 1)には、「之」が付く語が2語ある。(3 + 2 + 1)の型は、「蘇格蘭/福音堂」のように分解される。この場合、「蘇格蘭」は音訳であり、それに3字語(2 + 1)の「福音堂」が後接している。

7字語

(2 + 2 + 2 + 1)

例：共和/建設/討論/會、中國/主日/學合/會、中華/童子/偵探/隊の3語

(1 + 2 + 1 + 2 + 1)

例：不/及物/之/云謂/字、女/基督/徒/節制/會の2語

7字語は、6字語よりもさらに数が少なく、主に（2+2+2+1）の型となっている。このような長い形の語は、多数の語基を複雑に組み合わせた語である。

以上が『NEW TERMS』に見られる新語の構成パターンとその特徴である。本節では、『NEW TERMS』の初版に収録されている新語を見てきたのであるが、これらの語は、日本語からもたらされた和製新漢語と中国で作られた中国製新漢語を組み合わせたものが多いと言える。

5.3.2 『NEW TERMS』における語種の分類とその分析

続いて本節では、4.3.2.1で説明したものと同様の方法により、語種の分類を行っていく。2字語を中心に順に見ていくことにする。

5.3.2.1 2字語

『NEW TERMS』の2字語は、合計1444語が確認された。このうち、2語（i.e.「銀行・主権」）は宣教師により生み出された新漢語であると考えられており、和製新漢語にも中国製新漢語にもあたらないと言える。以下、これらの2語について詳しく見ていく。

まずは「銀行」である。『NEW TERMS』では、「銀行」に対応する英語訳に「Bank」を充てている。「銀行」の語義を『日本国語大辞典』は、次のように説明している。

銀行〔名〕（英 *bank* の訳語）

①（「行」は仲介業、仲買商、また商店の意）預金の受入れ、債券の発行により、一般から資金を受入れる一方、貸出し、為替取引、有価証券投資などの業務を行なう金融機関。中央銀行、普通銀行、長期信用銀行、外国為替銀行、信託銀行などがある。

*会社弁（1871）〈福地桜痴〉小引三則

「今此書暫く『バンク』の訳字として銀行の字に代用す」

②何かの折に必要なもの、一般に不足しているものを集めて、保管・登録しておいて、希望者の利用の便をはかる組織。「血液銀行」「人材銀行」

ロプシャイトの『英華字典』（1866-1869）では、「銀行」は、英語 *bank* の訳語であるとされており、『英華字典』の出版期から判断すると、19世紀中頃には中国語に存在して

いた漢語であると言える。日本における「銀行」に意味的に対応すると思われる語としては、幕末から明治にかけての「両替屋」、「両替問屋」、「為替会社」などが挙げられる。日本における「銀行」の初出例は、『会社弁』（1871）に見られ、それ以降日本語に定着したものと思われる。

次に、「主権」を見てみる。『*NEW TERMS*』において、「主権」という語の英語訳は「*Sovereignty*」である。『日本国語大辞典』によると、「主権」の語義は以下のようである。

主権 〔名〕（英 *sovereignty* の訳語）

①国家の最高の意思および国の政治を最終的に決定する権力。

*泰西国法論（1868）〈津田真道訳〉一

「通国の大権位は他一切小権位の本原なるを以て一箇の特称を設けて之を別ち、之を称して主権と云ひ、此主権を操る人を君主と云ふ」

②国民および領土を支配する権利。統治権または国権。

*東京朝日新聞-明治三七年（1904）三月二四日

「満洲に於ける清国の主権及領土保全を尊重し」

③事柄の最終的なありかたを決定をする権力。

*二つの手紙（1917）〈芥川龍之介〉一

「私が私の視覚の、同時に又私の理性の主権を、殆ど刹那せつなに粉碎しようとする恐ろしい瞬間にぶつかったのは」

漢籍では、「主権」は元来「君主の権力」という意味で用いられていた。しかし、19世紀に中国に渡った宣教師が西洋文明を紹介する漢訳書のなかで、元来の「君主の権力」の意味から、近代的な「国家の権力」という意味に転換して用いた。その影響で、中国語だけでなく日本語でも、上掲の『日本国語大辞典』①の意味で用いられることが主流になったのである。

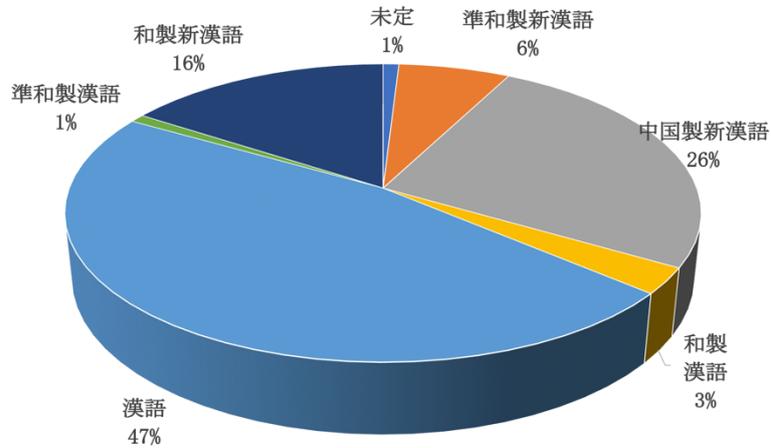
『*NEW TERMS*』に収録されている2字語は、宣教師が作った上記の2語を除くと、合計1442語である。このうち、日本側の辞典や書籍などに収録がない語は521語で、この数は1442語のおよそ36%を占める。これら語は漢語と見做されるが、漢籍における起源を確認しておく必要がある。中国古典漢籍にある漢語であるか、近代の新概念などを表すための中国製新漢語であるかを判定する必要があるということになる。

そのために、『新爾雅』の場合と同様に、まず中国の『漢語大辞典』や古典漢籍などに
 出典が記載されているかどうかを確認する。それと同時に、『辞海』、『古代漢語辞典』な
 ど中国の専門辞典や文献典籍をも用いて総合的に比較を行う。当該の語の初出が中国で
 の出典において近代以前であることが分かれば、漢語と見なす。その語の中国における
 出典が近代以降であるか、中国側の辞典や古典漢籍にも日本側の辞典や書籍にも出典が
 ない場合は、中国製新漢語と見なす。

1442 語のうち、日本側の辞典などにある語は 943 語で、全体のおよそ 63.4%を占め
 る。前述の抽出の方法から、これらは和製漢語である可能性が高いと判断できる。この
 ようにして、4.3.2.1で述べた分類方法をもとに各種の語数を算定したところ、以下
 の表のような結果となった。

2字語	漢語	中国製新漢語	和製漢語	準和製漢語	和製新漢語	準和製新漢語	未定	合計
1-2接尾辞	4	0				1		5
3代名詞	23	5			1	1	1	31
4政治	21	1			1	2	1	26
5-7政府	29	24		1	12	3	1	70
89軍事	53	41	3		8	3		108
10法律	15	10	3		3	2		33
11国際関係	18	8			11	4	1	42
12医薬品と職業	3	4				2	2	11
13貿易と商業	13	17		1	11	2		44
14改革	17	6	1		6	6		36
15政党	2	4			4			10
16-18社会	40	33	6	1	17	5	3	105
19個人	34	5	1		11	5		56
20-21宗教	9	13	2		8	5		37
22-23教育	29	28	2		27	18	1	105
24言語	11	13			5	1		30
25メディア	24	27	2		4		1	58
26哲学	28	6	1	1	18	6		60
27-29ヨーロッパ	37	60	4	1	12	5	2	121
30統一と自然	24	1	1	2	3	1	1	33
31形容詞	28	0	5		4	2		39
32抽象名詞	12	8		1	5	3		29
33感覚と行動	15	9	1		4	4		33
34礼義	13	4	1	1	1	1		21
35暴力	27	7	1		2			37
36思想	17	7	2		12	3		41
37主張	21	4		1	4	2		32
38-40ほかの名詞	63	11	3	2	14	4		97
41語組	7	4	1		3			15
42補充語彙	35	12	1		10	3		61
43日本語から	6	6			4			16
合計	678	378	41	12	225	94	14	1442

その割合を示すと、以下のグラフのようになる。



次に、『NEW TERMS』に収録された2字語の和製新漢語の代表例として「哲学」を取り上げ、詳しく説明する。『日本国語大辞典』では、「哲学」について以下のように説明されている。

てつ - がく【哲学】

〔名〕（英 *philosophy* の訳語。ギリシア *philosophia* から出たことば）

①世界や人生の究極の根本原理を客観的・理性的に追求する学問。とらわれない目で事物を広く深く見るとともに、それを自己自身の問題として究極まで求めようとするもの。古代ギリシアでは学問一般を意味していたが、のち諸科学と対置されるようになった。論理学、認識論、存在論、哲学史、倫理学などの諸領域を含む。

*真景累ヶ淵（1869頃）〈三遊亭円朝〉一

「是は今申す哲学といふ様なもので」

*百一新論（1874）〈西周〉下

「兼て教の方法を立つるをヒロソヒー訳して哲学と名け、西洋にても古くより論のあるでござる」

②自分自身の経験などから作りあげた人生観・世界観。物事に対する基本的な考え方。理念。「彼は哲学を持っている」

*他人の顔（1964）〈安部公房〉黒いノート

「なお問うに価する哲学があるように思うのだ」

語誌：

1. 「百学連環-二」(一八七〇-七一頃)において、*philosophy* の訳語として西周は「理学」「窮理学」のほか、「賢哲の希求」という意味で「希哲学」「希賢学」などとも試訳したが、最終的に「哲学」に落ち着いた。これは、「哲学字彙」(一八八一)に採用された後、外国語対訳辞書に収録され、一般化した。

2. 『英独仏和哲学字彙』(1912)に「西周訳利学説曰、哲学即欧洲儒学也、今訳哲学、所以別之於東方儒学也」とあるように、「哲学」は、元来、西周が東方儒学と区別するために考案した訳語であったが、後に哲学一般を指す名称となった。

『日本国語大辞典』によると、「哲学」を意味する英語の *philosophy* という語はギリシア語にさかのぼり⁴⁴、「哲学」の初出例として、『真景累ヶ淵』(1869年頃)からの事例が挙げられている。その後、西周が東方儒学と区別するために、「*philosophy*」を「理学」や「窮理学」、「希哲学」、「希賢学」などと試訳したが、最終的に「哲学」に落ち着いた。このように、「哲学」という語は、古典中国語にも古典漢籍にも出所がなく、近代において日本語として作られた語である。つまり、「哲学」は訳語として創出された典型的な和製新漢語と言える。

続いて、『*NEW TERMS*』に収録された2字語の準和製新漢語のなかで代表的な例として「経済」と「絶対」を取り上げる。まずは「経済」であるが、この語は『日本国語大辞典』では以下のように説明されている。

けい - ざい【経済】

① (一する) (「経国済民」または「経世済民」の略) 国を治め、民を救済すること。政治。

*四河入海(17C前)三

「俗縁未^レ尽して政にあづかりて、伊尹や臯陶が如にして天下を経済するぞ」

[文中子-礼楽]

②人間の共同生活を維持、発展させるために必要な、物質的財貨の生産、分配、消費などの活動。それらに関する施策。また、それらを通じて形成される社会関係をいう。

⁴⁴ ただし、*Oxford English Dictionary* (s.v. *philosophy, n.*)の記述は、『日本国語大辞典』のそれとは異なっている。*Oxford English Dictionary*によると、*philosophy* は、部分的にフランス語とラテン語から借用されたという。英語における *philosophy* の初出は1325年頃であり、それはフランスがイギリスを征服した出来事「ノルマンコンクエスト」(1066年)よりも後である。したがって、*philosophy* はフランス語から英語に流入した蓋然性が高い。

*池田光政日記-天和二年（1682）五月一日

「経済は国家の本なり。古語に、『国に三年の貯たくわえ無きを国其国に非ず』」

*可駭録（1834）一

「金沢侯往昔よき御家老ありて、御用金にて一時に経済の法やぶれ、下々困窮することを憂ひ」

③金銭のやりくりをすること。

*談義本・世間万病回春（1771）五

「自家の経済ケイサイに心を尽して老後の用心に金をたくわえ」

④（形動）費用やてまのかからないこと。費用やてまをかけないこと。また、そのさまをいう。儉約。節約。

*花柳春話（1878-79）〈織田純一郎訳〉四四

「而して子之を食やしなはざるは全く経済ケイザイより出る所ならん」

*田舎教師（1909）〈田山花袋〉二八

「自炊生活は清三に取って、結局気楽でもあり経済でもあった」

「経済」の中国古典における意味は「世を治め、民を救う」であり、この意味は「経世済民」と同じである。中国の東晋時代の葛洪の著作である『抱朴子』内篇（地眞篇）には「経世済俗」という語が現れ、経世済民とほぼ同義で用いられている。時代が下り、隋代になると、王通『文中子』礼楽篇では「皆有経世之道、謂経世済民」とあって、「経済」が経世済民の略語として用いられた。さらに、後代の『晋書』殷浩伝（唐）、『宋史』王安石伝論（元）などにも「経済」が現れるが、これは政治・統治・行政一般を意味する用法である。

続いて、「経済」が日本において辿った道筋に触れておく。幕末期になると、開国に伴い新たに交流が始まったイギリスなどから古典派経済学の文献が輸入されるようになる。1862年に刊行された堀達之助らの『英和对訳袖珍辞書』では、「*economy*」は「家事する、儉約する」と訳されている。しかし、「*political economy*」（古典派経済学において「経済学」を意味する語）に対しては、「経済学」の訳語が与えられている。これにより、「経済」は、新たに「*economy*」の訳語として振る舞うようになった。

日中における経緯をまとめると、次のようになる。「経済」という語はもともと中国の古語で、「経世済民」（世の中をよく治めて、人々を苦しみから救う）を意味していた。

『オックスフォード英語辞典』（1928）が「*The relationship between production, trade and the*

supply of money in a particular country or region」と説明しているように、「*economy*」は物資の生産、流通、交換、分配、とその消費の全過程、および、その中で営まれる社会的諸関係の総体を表す。中国の古典籍における「経世済民」と英語の「*economy*」の意味は大きく異なっているが、日本では古典漢籍にあった「経世済民」から「経」と「済」とを摘出し、それを英語の「*economy*」に充てたのである。

次は「絶対」であるが、『*NEW TERMS*』における英語訳は、「*Absolutely*」である。『日本国語大辞典』における「絶対」の語義の記述は、以下のとおりである。

ぜっ - たい【絶対】〔名〕（形動）

①なにもものにも制限拘束されないで、それ自体として存在すること。何の条件にもよらずにあること。また、そのさま。哲学的な意味では、いっさいの条件を超越してそれ自体で存在する完全な独立的存在をいう。相対に対していう語。

* 哲学字彙（1881）

「Absolute 絶対」

* 妄想（1911）〈森鷗外〉

「意志が有るから、無は絶対ぜったいの無でなくて相待の無である」

②（単独、または「に」を伴って副詞的に用いる） どういう場合でもかならず。断じて。なにがなんでも。

* 社会百面相（1902）〈内田魯庵〉 鉄道国有

「我輩は絶対に相場を否認しないが」

語誌仏典に見られる「絶対」を「絶対」と改め、*absolute* の訳語にあてたのは井上哲次郎で、挙例の「哲学字彙」がそれである。以後、「絶対」は、哲学用語の範囲を超え、学術用語集を含め多くの辞書に収録されて一般化した。

しかし、筆者が古典漢籍などを詳しく調べた結果、「絶対」の初出例は、以下のように、唐時代の張鷟による『游仙窟』であることが分かった。

「比目絶対，雙鳧失伴，日日衣寬，朝朝帶緩」

（訳：カレイが仲間を失って、鳥も友をなくした。）

『日本大百科全書（ニッポニカ）』によると、『游仙窟』は初唐の小説であり、日本には奈良時代の遣唐使の手により伝来し、以後後世に伝えられるところとなった。『游仙窟』は中国には現存せず、日本にのみ現存するといういわゆる「佚存書」の一つであるが、20世紀に入って、日本から中国へと逆輸入された。留意すべきは、上記の漢籍における

「絶対」の初出例は、近代期において新たに付与された語義を持っていないという点である。このように、「絶対」は、古典漢籍に見られるように、古代から存在してはいたが、西洋の概念に対応するために、日本で新しい意味が付与されたわけである。『哲学字彙』（1881）に「*Absolute*」の訳語として収録される「絶対」の語義（「条件を超越してそれ自体で存在する完全な独立的実在をいう」）は、この新しい用法である。

この新しい意味を持つ「絶対」について中国側の専門辞典や文献典拠で調べたところ、以下のように、1902年の梁啓超による『新民議』が初出であることが判明した。

“某以爲愛國心者，絕對而無比較者也。”《新民議・敬告当道者》1902年

「絶対」の新しい用法が中国国内で初出した1902年は、明らかに、日本での初出の年よりも遅い。

このように、「絶対」という語は、日本人が漢籍にある語形に新たな意味を付与して使用するようになったものであることから、準和製新漢語の例とすることができる。このような準和製新漢語の例は少なくないのである。

5.3.2.2 3字語

『*NEWTERMS*』の3字語は700語である。そのうちの7語が2つの分野に重出しているので、異なり語は693語である。その693語のなかで日本側の辞典や書籍などにはない語は509語で、全体の約73%を占める。それらは漢語と見做される。一方、日本側の辞典にある語は190語で、およそ27.3%を占める。これらは和製漢語である可能性が高いと判断される。先述の分類方法によって語種を分けると、以下の表のようになる。

3字語	漢語	和製漢語	和製新漢語	未定	合計
1-2接尾辞	8	1	8		17
3代名詞	2				2
4政治	15		1		16
5-7政府	49		7		56
89軍事	43	2	9		54
10法律	17		9		26
11国際関係	6		2		8
12医薬品と職業	6		8		14
13貿易と商業	14		4		18
14改革	9		2		11
15政党	14		5		19
16-18社会	41		6		47
19個人	2		5		7
20-21宗教	60	1	10		71
22-23教育	27	1	22	1	51
24言語	44				44
25メディア	11		2		13
26哲学	7		8		15
27-29ヨーロッパ	84	1	19	1	105
30統一と自然	2		1		3
31形容詞	5		1		6
32抽象名詞	2		10		12
33感覚と行動	3		1		4
34礼義	10		1		11
35暴力	5				5
36思想	2		1		3
37主張			2		2
38-40他の名詞	9		2		11
41語組	1				1
42補充語彙	22	2	13		37
43日本語から	2		1	1	4
合計	522	8	160	3	693

全 522 語の漢語を漢籍や史料などで調べると、古典漢籍に出所を持つ語は 8 語であることが分かった。これらは 3 字漢語であると判定される。それぞれの初出についての詳細情報は、以下の表のとおりである。

		英語解釈	中国最初の出所
1	主人翁	Supreme power	『諷賦』 BC770-BC476
2	都察院	The Ceusorate	1368-1398
3	劊子手	Executioner	『答吳景仙書』 宋
4	窺遠鏡	Telescope	『明史天文志一』 1645
5	龍鬚菜	Asparagus	『本草綱目』 1578
6	強有力	Virile	『天論』 唐
7	執牛耳	Hegemony	『左傳』 BC770-BC476
8	破天荒	Sudden emergence into cele...	『萍洲可談』 宋

また、初出がその典拠に基づき近代以降であると確認された3字語は、以下の18語であった。初出が近代以降であるから、本研究の分類方法により、これらは3字中国製新漢語と認定される。

1	郵傳部	Board of Posts and Communications	1906
2	資政院	National Assembly	1910
3	諮議局	Provincial Assembly	1909
4	入口税	Import tax or duty	『二十年目睹之怪现状』 1903
5	國事犯	Political criminal	『二十年目睹之怪现状』 1903
6	混成協	Corps	『武昌守義』 1911
7	司務長	General Superiutendant	『灯』 1942
8	諸葛燈	Search light	『振百工說』 1838-1894
9	入口貨	Imports	『二十年目睹之怪现状』 1903
10	義和拳	Knife or Sword Society	1896
11	賽珍會	Exposition	1894
12	萬牲園	Zoological gardens	1906
13	五色旗	The revolutionary or Republican flag	1911
14	魚雷艇	Torpedo boat	1912
15	勢力圈	Sphere of influence	『过渡时代論』 1901
16	宗社黨	Manchu Party	1912
17	國民黨	Nationalists	1894
18	民主黨	Democratic Party	1912

3字でかつ典籍にない語は、残る496語である。3字漢語の内容を明らかにするには、語の構成を検討する必要がある。3字語は1字の前接語基・後接語基が2字語基と組み合わせられて(1+2)や(2+1)の構造パターンを構成する。このような語の構成に関する詳細については、第6章で取り上げることにする。

次に、3字語のなかで、和製漢語と認定できたのは8語である。以下の表は、和製漢語と認定された8語とそれらの英語訳、及び、最初の出所を示したものである。

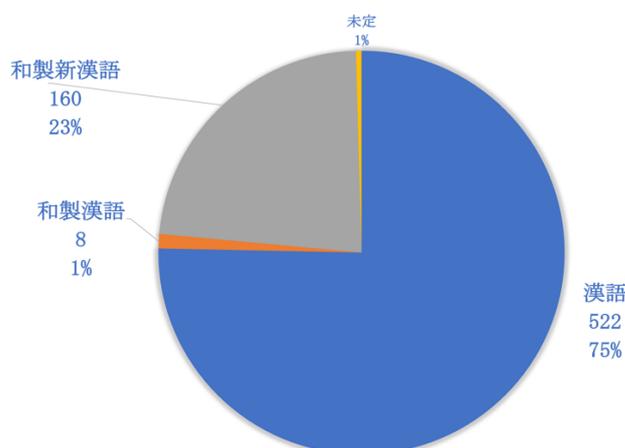
		英語解釈	日本最初の出所
1	製造家	Manufacturers	『守貞謾稿』1837
2	書記官	Secretary	『折たく柴の記』1716頃
3	運送船	Transport	『高野山文書』1306
4	天主教	Roman Catholic Church	『対治邪執論』1647
5	天文臺	Observatory	『武玉川』1750
6	手提燈	Lantern	『末若集』1697
7	醫學士	Physician	『落葉集』1598
8	兩替屋	Money-changer's shop	『鷹筑波』1638

続いて、3字和製新漢語を見てみよう。3字語において確認された3字和製新漢語は160語である。その一部として以下の語が挙げられる。

1	消毒薬	Disinfect-ant	『和英語林集成』1872
2	防腐剤	Antiseptic	『小学読本』1884
3	唯物論	Materialism	『哲学字彙』1881
4	懇親會	Reception	『朝野新聞』1882
5	優先権	Preferential privileges	『民法』1896
6	紀元前	Before Christ	『経国美談』1883
7	陪審員	Inrvman	『仏和法律字彙』1886
8	美辭學	Rhetoric	『国文学読本緒論』1890
9	病理學	Pathology	『皇国医事沿革小史』1884
10	巡洋艦	Cruiser	『浮城物語』1890

3字の和製漢語と和製新漢語についても語構成の観点から詳細な検討が必要であるが、この問題についても第6章で取り扱うことにする。

以上をまとめて『NEWTERMS』における3字語の内訳を図表化すると、次のようになる。

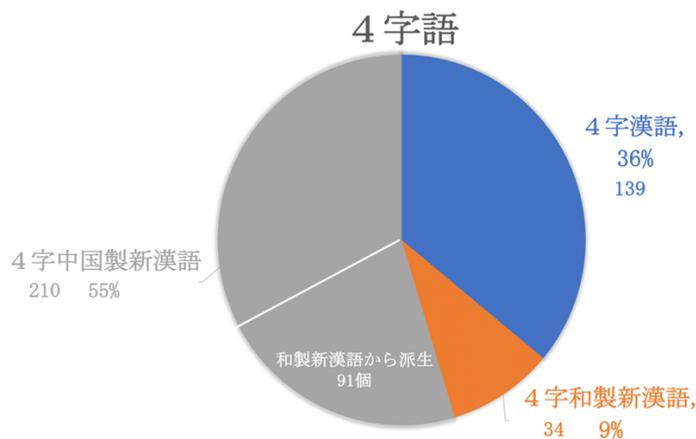


5.3.2.3 4字語

『NEW TERMS』の4字語は計384語である。この384語のうち、『日本国語大辞典』など日本側の辞典に出所がある語は63語で、これらは4字和製新漢語である可能性が高い。上述の語種の分類方法に従って調べたところでは、4字和製新漢語は34語であり、およそ9%を占める。その一部を以下に挙げておく。

		英語解釈	日本最初の出所
1	人道主義	Humanitarian	『椿姫』1903
2	正當防衛	In selfdefense	『郵便報知新聞』1891
3	萬國公法	International law	『西洋事情』1866
4	治外法權	Extraterri toriality	『東京日日新聞』1878
5	優勝劣敗	Natural selection	『人権新説』1882
6	無線電報	Wireless telegraphy	『逓信省令第十六号』1908

それに対して、4字漢語は139語であり、およそ36%を占める。残りの210語は4字中国製新漢語と認定される。そのうち、和製新漢語から派生して作られたものが91語であり、残りが純粹の4字中国製新漢語であった。また、認定できない語が1語あった。このような4字語の内訳を図表化すると、次のようになる。



5.3.2.4 5字語

『NEW TERMS』の5字語は計49語である。日中の辞典や典籍で出所が確認できたのは以下の2語だけであった。この2語は5字和製新漢語と認定する。

	英語解釈	日中での初出
無政府主義	The same in a political sense	『徳川氏時代の平民的理想』1892
高等小學校	Intermediate school	『風俗画報』七〇号 1894

残る 47 語は 5 字漢語と認定できる。それらは以下のようなパターンの構成を持つ。語構成の詳細については第 6 章で検討する。

(2 + 2 + 1) : 國家/買賣/品など

(1 + 2 + 2) : 開/成立/大會など

(1 + 1 + 2 + 1) : 蒙/藏/事務/局

(1 + 1 + 1 + 2) : 以/金/為/本位

(1 + 1 + 1 + 1 + 1) : 第/一/二/三/位、第/一/二/三/身

(3 + 2) : 亜西亜/協会

5.3.2.5 6 字語以上

『NEW TERMS』における 6 字語は 11 語であり、7 字語は 5 語である。6 字語以上は合わせて 11 語しかないことになる。6 字語は主として (2 + 2 + 2) の構成パターンを取り、そこでの 2 字語基は漢語語基が多くを占める。該当する語は以下のとおりである。

1	高等検査總長	高等『陈留太守胡公碑』	檢察『後漢書』	<u>総長『五国対照兵語字書』1881</u>
2	傳論証人到案	証人『魏书·辛雄传』		
3	借債之抵押品	借債『迎仙客·风情』	抵押『盛世危言』	
4	蘇格蘭福音堂		福音『资政新篇』	
5	法律業士學位	法律『庄子·徐无鬼』		<u>学位『露団々』1889</u>
6	定性分析化學	定性『张子正蒙注』	分析『後漢書』	<u>化学『七新薬』1862</u>
7	定量分析化學	<u>定量『小学化学書』1874</u>	分析『後漢書』	<u>化学『七新薬』1862</u>
8	及物之云謂字			
9	公衆利用主義	公衆『朱子语类』	利用『書·大禹謨』	主義『史記·太史公自序』
10	神聖不可侵犯	神聖『庄子·天道』		侵犯『史記·魏其武安侯列传』
11	郵政儲蓄銀行		儲蓄『後漢書』	<u>銀行『会社弁』1871</u>

アンダーラインは和製新漢語である。

斜字体は宣教師が作った新漢語である。

空白箇所は典籍にないので、中国製新漢語である。

7字語については以下のとおりであるが、その多くは2字漢語の組み合わせによって作られたものである。

1	共和建設討論會	共和『史記・周本紀』	建設『墨子・尚同中』	討論『论语・宪問』
2	女基督徒節制會	<u>基督『病者を扶くる心得』1593</u>	節制『荀子・议兵』	
3	中國主日學合會	中国『詩・小雅』	主日『礼記・郊特牲』	
4	不及物之云謂字			
5	中華童子偵探隊	中華『請還都洛陽疏』	童子『儀礼・喪服』	偵探『四友齋叢說』

アンダーラインは和製漢語である。
空白箇所は典籍にないので、中国製新漢語である。

5.3.3 『NEW TERMS』から見える漢語

本節では、『NEW TERMS』における語種の有り様から見た近代漢語の全体像を示すことにする。『NEW TERMS』に収録されている語数は全体で2677語であるが、それらは1字語から7字語に亘っている。その内訳は1字語が37語、2字語が1489語、3字語が700語、4字語が386語、5字語が49語、6字語が11語、7字語が5語である。

これらのうち、語構成が問題にならない1字語と重出語54語を除くと、対象となる語は2586語である。これらの2586語を語種によって分類すると、次の表のようになる。

	2字語	3字語	4字語	5字語	6字語	7字語	合計
漢語	678	8	139	—	—	—	825
中国製新漢語	378	511	210	47	11	5	1162
和製漢語	53	8		—	—	—	61
和製新漢語	319	160	34	2	—	—	515
そのほか	16	6	1	—	—	—	23
合計	1444	693	384	49	11	5	2586

この表をもとに、『NEW TERMS』に関するここまでの考察の要点をまとめると、以下のようになり、『新爾雅』の場合と同様の結果を示している。

- (1) 全2586語のなかで漢語が1990語と多く、全体の約77%を占める。漢語のうち59%は中国製新漢語である。特に2字以上の中国製新漢語が多数を占める。

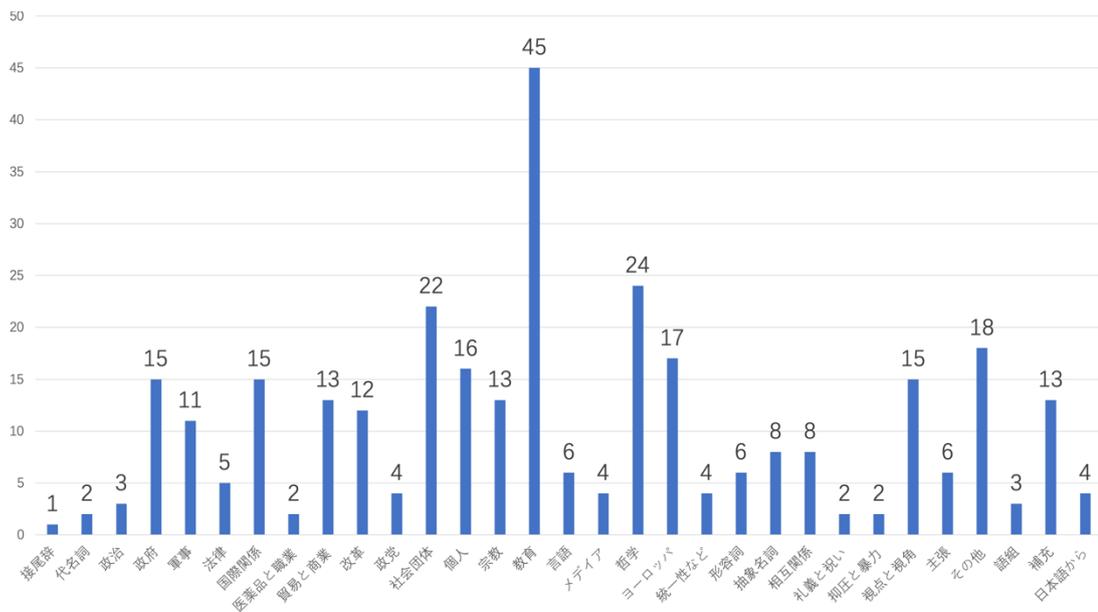
(2) 和製漢語は 576 語であるが、そのうち、和製新漢語は 515 語で、全体の約 20% を占める。和製新漢語は 2 字語から 5 字語に亘るが、その多くは 2 字和製新漢語であり、それに次いで 3 字和製新漢語が 2 割を占める。

(3) 近代の中国社会で流通している新語のうち、日本語に由来するものは全体の約 22.4% を占めていることになる。

5.4 『NEW TERMS』における和製新漢語の意味分野

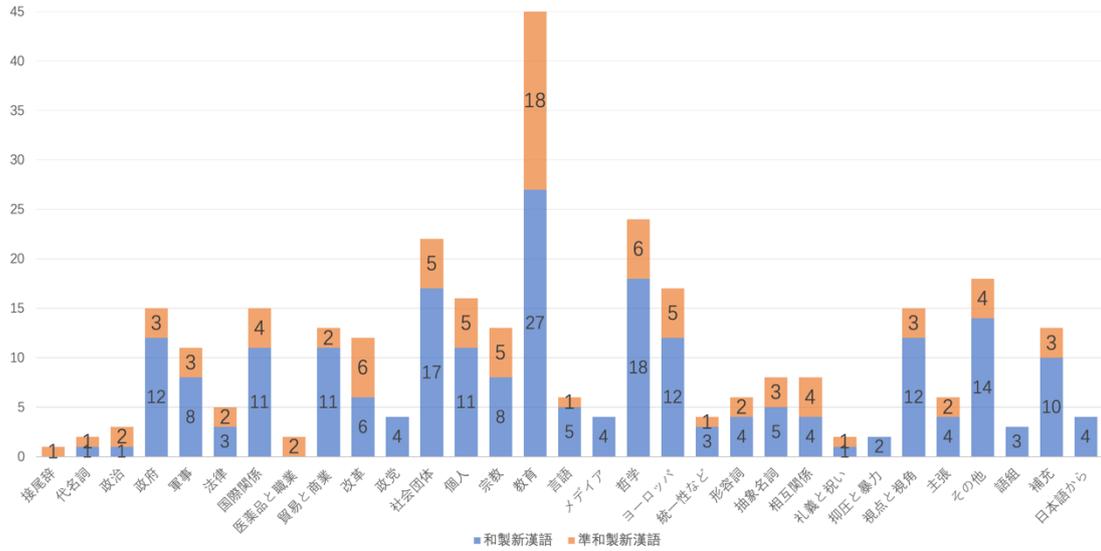
本節では、『NEW TERMS』に見られる和製新漢語に焦点を当て、それらがどの意味分野にあるものかを見ていくことにする。和製新漢語は 2 字語から 5 字語に亘るが、以下では、2 字語から 4 字語を対象にしたいと思う。

まず 2 字語の和製新漢語から始めよう。2 字語の和製新漢語は 319 語であり、2 字語全体の 22% を占める。意味分野別の語数は以下のグラフのとおりである。



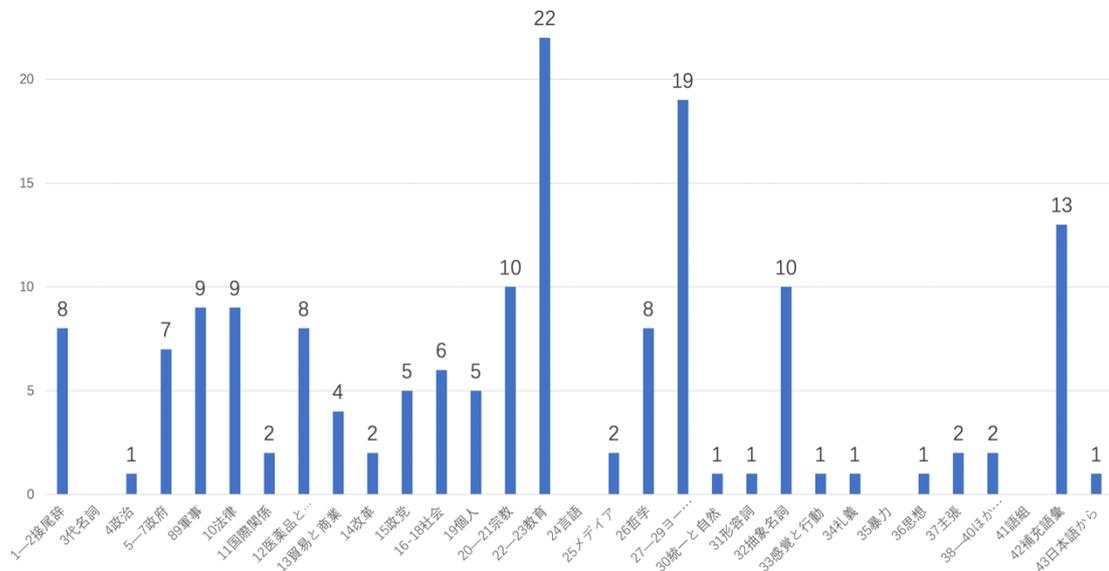
このグラフに見られるように、「教育」が最も多く、その後に「社会」、「哲学」と続いている。最も少ないのは「接尾辞」で、僅か 1 語にとどまる。

和製新漢語の 319 語には、準和製新漢語も 94 語含まれている。この準和製新漢語について意味分野の分布をグラフ化してみると、以下のようになる。



グラフに示されるように、「教育」が最も多い分野であり、その後に「社会」、「哲学」が続く。

次は3字語である。全体は693語であるが、そのうち和製新漢語は160語あり、3字語全体の23%を占める。2字和製新漢語の割合とほぼ同じである。各分野における分布は以下のグラフのとおりである。



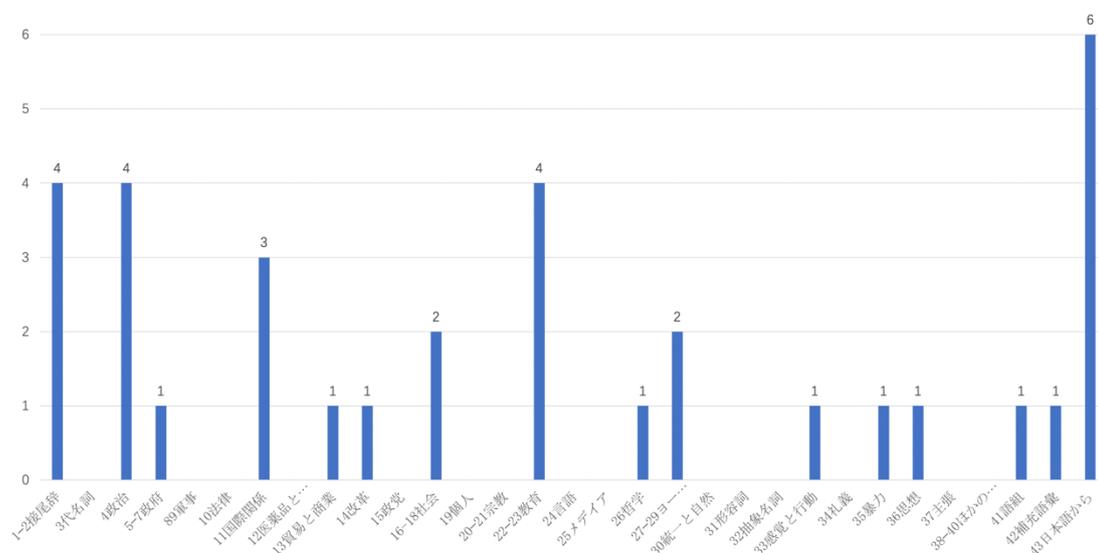
グラフに見られるように、この場合も「教育」が最も多く、22語ある。「教育」の後は、「ヨーロッパ」、「補充」が続く。準和製新漢語は3字語では見られない。

このように、2字語と3字語では「教育」分野の和製新漢語が最も多い。第3章の「近

代の日本留学の高まり」の節で述べたとおり、渡日留学生が選んだ専攻において最も多かったのは師範科（教育関係）であった。そのため、留学生たちが編集した書籍についても教育関係のものが多くなったと言える。

譚(1980)によると、1896年から1911年までに出版された958の漢訳書の中で最も多いのは社会科学類(366種、38%)で、それに世界史類(175種、18%)が続いている。和製新漢語の中国語への流入は、渡日留学生による日本語書籍の翻訳への積極的な取り組みが背景の一つになっている。『NEW TERMS』に見られる和製新漢語の豊富さは、当時の流入状況を反映していると言える。

続いて、4字語を見てみよう。4字語は386語であるが、そのうち和製新漢語は34語あり、4字語全体の9%しか占めない。その割合は2字語、3字語の場合より少ない。各分野の分布については、以下のグラフのとおりである。



グラフが示すように、最も多いのは「日本語から」の6語で、その後に「教育」、「政治」、「接尾辞」が続いている。準和製新漢語は4字語においても見られない。

5.5 『NEW TERMS』から見える新語の語種の変遷

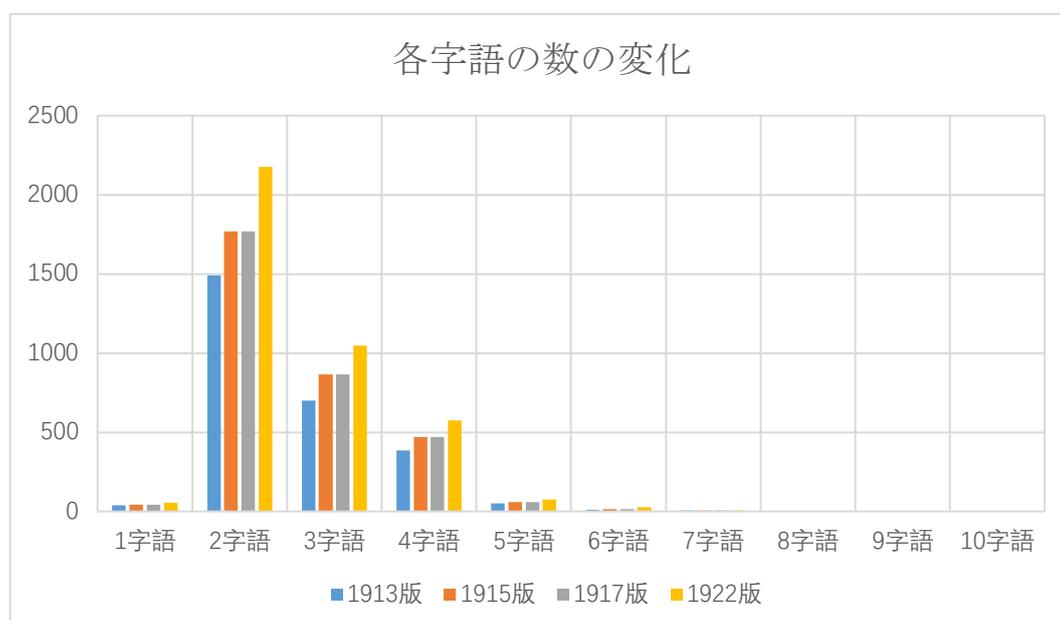
5.5.1 各版本の考察と比較

上述したように、『NEW TERMS』は辛亥革命後の劇的な時代に出版され、その後改訂を重ねていった。大きな変動の時代に出版・改訂された『NEW TERMS』は、近代中国語の新語の状況、とりわけ新語の語種の変遷を知るうえで重要な手がかりを与える。そこ

で、本節では、新語の語種の変遷を明らかにするために、『NEW TERMS』の初版（1913）、第2版（1915）、第3版（1917）、第4版（1922）を比較・検討してみたい。まず、『NEW TERMS』の各版における収録語を語の文字数で分けると、以下のようになる。

	初版(1913)	第2版(1915)	第3版(1917)	第4版(1922)
1字語	37	44	44	53
2字語	1489	1768	1768	2178
3字語	700	866	866	1046
4字語	386	471	471	574
5字語	49	60	60	76
6字語	11	16	16	27
7字語	5	5	5	8
8字語	—	—	—	1
9字語	—	—	—	—
10字語	—	—	—	1
	2677	3230	3230	3964

第2版(1915)は3230語であるが、これは初版より553語増えている。新たに補充された新語が566語ある一方で、初版から削除された語も13語ある。第3版(1917)は、第2版(1915)に対して内容の変化は見られない。第4版(1922)は第2版・第3版に対して、1921年の新語714語と1922年の新語20語を追加し、全体で3964語を収録している。初版から第4版までの9年間で、収録語数は約1.5倍に増加したことになる。このような新語の増加は、この時期の社会が大きく変貌していることを如実に表している。この表をグラフで表すと、以下のようになる。



次に、各版の収録語を意味分野に分けてみると、以下の表のようになる。

章	初版	第2版		第3版		第4版			
	本文	本文	補充	本文	補充	本文	補充	45章	
	148頁	207頁		210頁		268頁			
	1913年	1915年		1917年		1922年			
1-2接尾辞	65	82	37	82	37	82	37	23	—
3代名詞	44	44	10	44	10	44	10	23	1
4政治	56	56	5	56	5	56	5	—	—
5-7政府	151	151	<u>58</u>	151	<u>58</u>	151	58	<u>60</u>	1
8-9軍事	176	177	<u>91</u>	177	<u>91</u>	177	91	<u>50</u>	—
10法律	75	76	4	76	4	76	4	14	—
11国際関係	72	72	11	72	11	72	11	24	5
12医薬品と職業	27	27	10	27	10	27	10	20	—
13貿易と商業	77	77	17	77	17	77	17	35	1
14改革	70	70	0	70	0	70	0	15	—
15政党	37	37	5	37	5	37	5	13	1
16-18社会团体	205	203	20	203	20	203	20	23	4
19個人	75	75	11	75	11	75	11	12	—
20-21宗教	134	134	9	134	9	134	9	37	—
22-23教育	196	196	24	196	24	196	24	<u>41</u>	—
24言語	104	104	13	104	13	104	13	36	1
25メディア	80	80	18	80	18	80	18	12	3
26哲学	86	86	7	86	7	86	7	10	1
27-29ヨーロッパ	258	258	<u>74</u>	258	<u>74</u>	258	74	<u>67</u>	—
30統一性など	41	41	1	41	1	41	1	19	—
31形容詞	49	49	11	49	11	49	11	12	—
32抽象名詞	52	52	25	52	25	52	25	25	—
33相互関係	44	44	7	44	7	44	7	16	—
34礼義と祝い	38	38	19	38	19	38	19	13	—
35抑圧と暴力	51	51	6	51	6	51	6	13	—
36視点と視角	52	52	7	52	7	52	7	18	1
37主張	36	36	6	36	6	36	6	15	—
38-40そのほか	126	126	20	126	20	126	20	50	—
41語組	41	41	10	41	10	41	10	15	1
42補充	128	128	—	128	—	128	—	—	—
43日本語から	31	31	—	31	—	31	—	3	—
合計	2677	3230		3230		3964			

5.5.2 版本の比較から見える語種の変遷

本節では、『NEW TERMS』の諸版に見られる新語を語種の観点から検討したいと思う。以下、まず第2版から始めよう。

第2版 (1915)

第2版で補充された語は536語であるが、1字語を除いた2字語から6字語の語数は以下の表のとおりである。

2字語	3字語	4字語	5字語	6字語	合計
278	154	80	12	5	529

これらの語（529語）を語種に分けてみると、次の表のようになる。

	2字語	3字語	4字語	5字語	6字語	合計
漢語	134	—	—	—	—	134
中国製新漢語	78	100	66	12	5	261
和製漢語	10	4	—	—	—	14
和製新漢語	53	50	14	—	—	117
未定	3	—	—	—	—	3
	278	154	80	12	5	529

この表をもとに要点をまとめると、次のようになる。

- (1) 全529語のなかで、漢語（395語）が最も多く、全体の74.6%を占める。漢語のうち、中国製新漢語がその3分の2を占める。その割合は、初版における割合（76.5%）とほぼ同じである。また、中国製新漢語は2字語から6字語に亘って幅広く見られる。
- (2) 和製漢語は全体として131語であるが、そのなかに含まれる和製新漢語は117語であり、全体の22.1%を占める。その和製新漢語の割合も、初版における和製新漢語の割合（20.2%）とほぼ同じである。和製新漢語のなかで、2字和製新漢語と3字和製新漢語は、ほぼ同数である。

(3) 第2版で補充された新語のなかで、日本語に由来するものは24.7%を占めている。その割合は初版における日本語由来の語の割合(22.6%)を少し上回る。

第3版(1917)

『NEW TERMS』の第3版は第2版の2年後の1917年に出版され、全体で207頁となっている。第3版は第2版より3頁増えているが、収録語については第2版と変わることはない。頁数の変化は印刷における版面の組替によって生じたものであり、第2版を重版したものと言って差し支えない。

第4版(1922)

『NEW TERMS』の第4版は第3版の5年後の1922年に出版された。頁数は40頁増えている。この頁数の増加は、第3版の章立て(44章)に対して第45章を追加したことによる。この第45章では、1920年の新語(714語)と1921年の新語(20語)がそれぞれ追加され、合わせて734語の増加となった。第4版ではさらに、索引について、第3版の中国語索引と英語索引に加えて、単漢字索引が追加されている。

第4版で増加した新語のうち、1920年の新語(714語)に焦点を当てて意味分野別の語数を示すと、以下の表のようになる。最も多い分野は「ヨーロッパ」に関する語で、67語ある。それに続く分野は「軍事」、「政府」となっている。この分野の分布は、第2版・第3版とほぼ同じである。

	1字語	2字語	3字語	4字語	5字語	6字語以上	合計
1-2接尾辞	2	6	9	6			23
3代名詞		22	1				23
4政治							0
5-7政府		39	10	9	2		60
8-9軍事		18	24	6	2		50
10法律		4	8	1	1		14
11国際関係		8	4	8	2	2	24
12医薬品と職業	2	9	5	2	1	1	20
13貿易と商業		22	8	5			35
14改革		4		11			15
15政党		2	8	1	2		13
16-18社会团体		11	8	3		1	23
19個人		8	3	1			12
20-21宗教		16	12	4	1	4	37
22-23教育		19	12	5	1	4	41
24言語		19	11	6			36
25メディア		8	2	2			12
26哲学		5	4	1			10
27-29ヨーロッパ		34	22	11			67
30統一性など	1	16	2				19
31形容詞		10	2				12
32抽象名詞	1	24					25
33相互関係		13	3				16
34礼義と祝い		3	5		5		13
35抑圧と暴力		12	1				13
36視点と視角		16		2			18
37主張		14	1				15
38-40その他		37	13				50
41語組		4	3	3	1	4	15
42補充							0
43日本語から		2	1				3
合計	6	405	182	87	18	16	714

次に、これら 714 の新語から 1 字語を除いた 708 語について語種を分けて示すと、次の表のようになる。

	2 字語	3 字語	4 字語	5 字語	6 字語以上	合計
漢語	167	1	—	—	—	168
中国製新漢語	110	123	73	17	16	339
和製漢語	29	2	—	—	—	31
和製新漢語	95	55	14	1	—	165
未定	4	1	—	—	—	5
	405	182	87	18	16	708

この表をもとに引き出せる要点は以下のとおりである。

- (1) 補充された 708 語の新語のうち、漢語は 507 語で全体の 71.6%となる。そのなかで、中国製新漢語は 2 字語から 8 字語に亘り、3 分の 2 以上を占める。
- (2) 和製漢語は 196 語あり、全体の 27.7%を占める。そのなかで、和製新漢語は 165 語であり、全体の 23.3%を占める。
- (3) 和製新漢語は 165 語あり、全体の 23.3%を占める。この和製新漢語の割合は、初版と第 2 版における和製新漢語の割合より少し多い。字数では、2 字和製新漢語と 3 字和製新漢語が多くを占めるが、そのなかでは、前者が後者の 2 倍近く見られる。

5.6 本章のまとめ

前章で中国人母語話者が編纂した『新爾雅』を対象として調査・分析を行ったのに続いて、本章では、英語母語話者であるアメリカ人宣教師が編纂した『*NEW TERMS*』を対象として、どのような新語が流通していたのかについて考察した。『*NEW TERMS*』は『新爾雅』と同時代に外国人の立場から当時の時事用語を収録したものであり、資料として高い価値を有している。『*NEW TERMS*』には初版から第 6 版の版本があるが、本研究では、そのうちの初版から第 4 版を対象として収録された新語を調査・分析した。

そのなかで、初版における新語の語種について判明したのは以下の点であった。

1. 全 2586 語のなかで漢語が 1990 語と多く、全体の約 77%を占める。漢語のうち 59%は中国製新漢語である。特に 2 字以上の中国製新漢語が多数を占める。
2. 和製漢語は 576 語であるが、そのうち、和製新漢語は 515 語で、全体の約 89%を占める。和製新漢語は 2 字語から 5 字語に亘るが、その多くは 2 字和製新漢語であり、それに次いで 3 字和製新漢語が 2 割を占める。
3. 近代の中国社会で流通している新語のうち、日本語に由来するものは全体の 22.4%を占めている。

本章ではまた、新語の語種の変遷を明らかにするために、『*NEW TERMS*』の初版から第 4 版までを比較検討してみた。その結果、1913 年から 1922 年までの変遷の様子を具体的に把握することができた。第 2 版と第 4 版で補充された新語の語種について言えば、以下の点が明らかになった。

1. 漢語が新語の多くを占め、とりわけ中国製新漢語の割合が多い。中国製新漢語は字数の面でも多岐に亘っている。

2. 第2版と第4版で補充された新語のなかで、日本語に由来する語の割合は初版における日本語由来の語の割合を少し上回る。そのなかの和製新漢語の割合も、初版における和製新漢語の割合を上回っている。このことから、当時の中国における和製漢語の受容の高まりを窺い知ることができる。

第6章 和製新漢語の造語法

本章では、第4章と第5章で触れた語の構成の問題を取り上げる。6.1では『新爾雅』における語の構成を、6.2では『NEW TERMS』における語の構成をそれぞれ話題にする。それをもとに、6.3では和製新漢語に焦点を当て、その造語法の有り様を検討する。

6.1 『新爾雅』における各字語の構成

本節では、『新爾雅』における語の構成を3字語から順に見ていく。語の構成を考える場合、語種の違いが重要な意味を持つので、以下では、「漢語」⁴⁵、「和製漢語」、「和製新漢語」の3分類に基づいて分析を進めることにする。

6.1.1 3字語

6.1.1.1 漢語の語基

『新爾雅』の3字語は663語であるが、そのうちの479語は3字漢語である。さらに、そのうちの476語が近代以降の漢籍に出自を持つ3字中国製新漢語と認定される。

漢語の語構成を考えようとすると、その構成要素である語基に目を向ける必要がある。4.3.1で述べたように、3字語は1字の前接語基または後接語基が2字語基と組み合わせ、(1+2)や(2+1)のパターンを構成する。そこで、3字語を構成する2字語基を詳しく観察したところ、以下の点が判明した。

- (1) 2字語基のうち、古い典籍に出所があると確認された漢語は188語だった。それらの2字漢語は3字中国製新漢語の語基として働く。その例には、以下のようなものがある。

⁴⁵ ここで言う漢語は、古典漢籍にある漢語だけでなく、近代に作られた中国製新漢語も含む。

	3字語	2字語基	中国最初の出所
1	農務省	農務	『移居詩』 晋
2	救済権	救済	『吴志』 晋
3	小創業	創業	『西京賦』 汉
4	合理法	合理	『北史・斛律光傳』 宋
5	内行星	行星	『夢溪筆談』 宋
6	東大陸	大陸	『書經』 周
7	分散点	分散	『左傳・桓公五年』 春秋
8	四肢筋	四肢	『孟子・尽心下』 战国

(2) 2字語基のうち、古い典籍にない語は191語であった。それらは近代の新概念を表すための中国製新漢語であると考えられる。それらを語基とする3字語も中国製新漢語ということになる。その例として、以下のようなものが挙げられる。

1	鷹泉類
2	楯形葉
3	冠状溝
4	等欹線
5	圓錐体
6	唯靈論
7	鳴願権
8	毛招鞘

(3) 2字語基が和製と確認された語は97あった。それらも3字中国製新漢語の語基として働く。97の内訳は、2字和製漢語32、2字和製新漢語62、2字準和製漢語1、2字準和製新漢語1であり、2字和製新漢語が最多である。それらの例としては、以下のものが挙げられる。

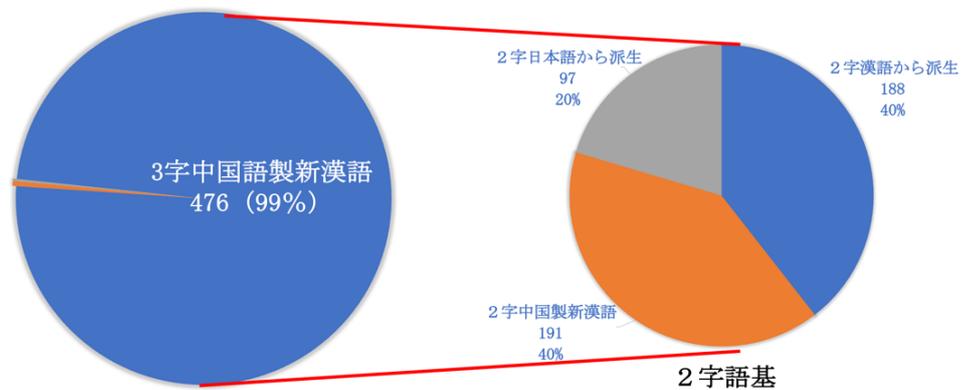
	3字語	2字語基	日本最初の出所	
1	静脈管	静脈	『志都の岩屋講本』1811	和製漢語語基
2	放射熱	放射	『日本貿易新聞』1863	和製新漢語語基
3	鉍物岩	鉍物	『日本教育策』1874	和製新漢語語基
4	立方数	立方	『曆象新書』1798	準和製漢語語基
			「立方」は漢籍の『後漢書』で、立德の意味	
5	公経済	経済	『英和对訳袖珍辞書』1862	準和製新漢語語基
			「経済」は漢籍の『礼楽』で、経世済民の意味	

ちなみに、和製2字語基の意味分野を分類すると、以下の表のようになる。

	意味分野	和製漢語語基	和製新漢語語基	準和製漢語語基	準和製新漢語語基
1	释政	1	7		
2	释法	1	3		
3	释計		1		1
4	释教育	1			
5	释群		5		
6	释名				
7	释幾何	3	4	1	1
8	释天	1			
9	释地	8	8		
10	释格致	4	9		
11	释化	2			
12	释生物	6	2		
13	释動物	1	3		
14	释植物	4	20		
		32	62	1	2

以上見てきた3字中国製新漢語（476語）について、その内訳をグラフで示すと、以下のようになる。

3字漢語



6.1.1.2 和製漢語の語基

3字語のなかで、和製漢語と認定できるのは20語である。これら20語についても、語構成の観点からは(2+1)あるいは(1+2)のパターンで捉えることができる。その構成に関わる2字語基について日中の文献資料を調べた結果は、以下のとおりである。

		日本最初の出所	2字語基	日本最初の出所	中国最初の出所	
1	大蔵省	『令義解』718	大蔵	『古語拾遺』807		和製漢語
2	文部省	『続日本紀』770	文部	『太政官達第六九号』1885	『新唐書』宋	漢語
3	後見人	『日葡辞書』1603	後見	『落窪』10C後		和製漢語
4	天文学	『和蘭天説』1795	天文	『書紀』720	『易経』遠古	漢語
5	遠心力	『曆象新書』1798	遠心	『曆象新書』1798	『国語・楚語』周	漢語
6	回帰線	『二儀略説』17C	回帰	『物理全志』1875	『裴度还带』元	漢語
7	北半球	『窮理通』1836	半球	『医語類聚』1872		和製新漢語
8	水蒸気	『舎密開宗』1837	蒸気	『形影夜話』1810	『淮南子』漢	準和製漢語
9	炭酸泉	『舎密開宗』1837	炭酸	『遠西觀象図説』1823		和製漢語
10	南半球	『窮理通』1836	半球	『医語類聚』1872		和製新漢語
11	粘着力	『舎密開宗』1837	粘着	『西国立志編』1870	『周礼注疏』漢	漢語
12	結晶水	『舎密開宗』1837	結晶	『舎密開宗』1837		和製漢語
13	酸化物	『舎密開宗』1837	酸化	『植学啓原』1833		和製漢語
14	酸性塩	『舎密開宗』1837	酸性	『小学化学書』1874		和製新漢語
15	親和力	『舎密開宗』1837	親和	『改正増補和訳英辞書』1869	『史記』	漢語
16	嗅神経	『解体新書』1774	神経	『解体新書』1774	『後漢書』	準和製漢語
17	視神経	『医範提綱』1805	神経	『解体新書』1774	『後漢書』	準和製漢語
18	聴神経	『解体新書』1774	神経	『解体新書』1774	『後漢書』	準和製漢語
19	肺静脈	『舎密開宗』1837	静脈	『志都の岩屋講本』1811		和製漢語
20	常磐木	『宇津保』970	常磐	『万葉』8C後		和製漢語

この表が示しているように、3字和製漢語を構成する2字語基は、和製漢語語基（準和製漢語語基を含む）が11、漢語語基が6、和製新漢語語基が3である。ここでは、3字和製漢語を構成する2字語基の半分以上（55%）が和製漢語である点が注目される。

6.1.1.3 和製新漢語の語基

3字語のなかで、和製新漢語と認定できるのは164語である。この場合も、（1+2）または（2+1）の構成パターンを取るもので、それに関わる2字語基を調べてみた。結果は以下のとおりである。

- （1） 3字和製新漢語を構成する2字語基のうち、漢語語基が88で、全体の約53%を占める。その例の一部を以下に挙げておく。

	3字語	日本最初の出所	2字語基	中国最初の出所
1	爱国心	『米欧回覧実記』1877	爱国	『戦国策』
2	珊瑚礁	『動物小学』1881	珊瑚	『西都賦』漢
3	透明体	『改正増補物理階梯』1876	透明	『物理小識』明
4	周期律	『稿本化学語彙』1900	周期	『敬斋古今註』元
5	参政権	『経国美談』1883	参政	宋

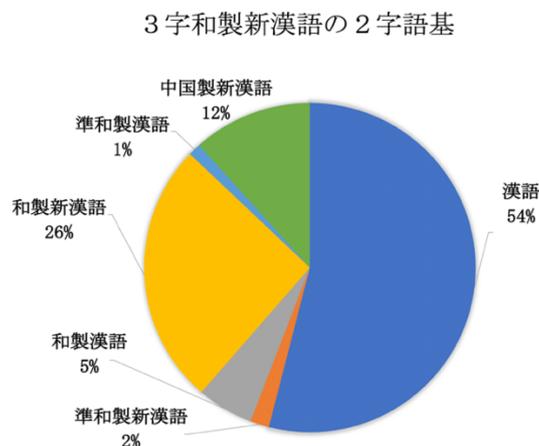
(2) 3字和製新漢語を構成する2字語基のなかの19については、日中の典籍や資料において出所の記載がなかったか、あるいは、初出の時期が近代以降であることから、中国製新漢語と認定した。例えば、以下のものがそれに該当する。

日本最初の出所		
1	二元論	『哲学字彙』1881
2	塩化物	『稿本化学語彙』1900
3	泌尿器	『医語類聚』1872
4	後鰓類	『生物学語彙』1884
5	奇蹄類	『生物学語彙』1884
6	両棲類	『動物小学』1881
7	合片萼	『植物学語鈔』1886

(3) 2字の和製語基は57であり、その内訳は、和製漢語が9、準和製漢語が3、和製新漢語が43、準和製新漢語が2であった。この場合、準和製新漢語を併せた和製新漢語は45で、多数を占めている。以下に、該当する例の一部を挙げておく。

3字語	日本最初の出所	2字語基	日本最初の出所	
1	小前提	『哲学字彙』1881	前提	『哲学字彙』1881
2	野蛮人	『花柳春話』1878	野蛮	『安愚楽鍋』1871
3	重金属	『稿本化学語彙』1900	金属	『舍密開宗』1837
4	平行線	『小学読本』1873	平行	『曆象新書』1798
		「平行」は漢籍の『管子』で、安全前行の意味		
5	立方体	『小学読本』1873	立方	『改訂増補哲学字彙』1884
		「立方」は漢籍の『後漢書』で、立德の意味		

以上見てきた3字和製新漢語における2字語基の語種をグラフで表すと、以下のとおりとなる。



6.1.2 4字語

6.1.2.1 漢語の語基

『新爾雅』の4字語は558語であるが、そのうち、507語の4字漢語が確認された。その507語のなかの363語が近代以降の漢籍に出自を持つことから、4字中国製新漢語と認定した。4字漢語のなかで語構成が分かる504語について構成パターンを見てみると、(2+2)、(2+1+1)、(1+2+1)、(3+1)(1+1+2)が考えられる。その構成に関わる語基の語種を意味分野も考慮して示すと、次の表のようになる。

意味分野	4字語	2+2	2+1+1	1+2+1	1+1+2	3+1	音訳語
释政	31	28		1	2		
释法	37	29		6	2		
释計	70	67	1		2		
释教育	38	35		3			
释群	84	83		1			
释名	24	20	4				
释幾何	41	18	7	12	4		
释天	5	3			2		
释地	27	26		1			
释格致	31	20	2	6	3		
释化	20	18	1				1
释生物	27	22	1	3		1	
释動物	33	15	11	7			
释植物	36	20	6	9	1		
合計	504	404	33	49	16	1	1

この表に示されるように、(2+2)のパターンを取る語が全体の約80%で、圧倒的に多い。また、2字語基を1つだけ取るものは98語あった。

そこで、ここでは、数が最も多い(2+2)のパターンについて分析してみたいと思う。(2+2)のパターンを構成する2字語基を語種の組み合わせで見ると、以下の表のようになる。

2字語基+2字語基	合計
和製新漢語+漢語	63
和製新漢語+和製漢語	12
和製新漢語+和製新漢語	3
和製新漢語+準和製新漢語	7
準和製新漢語+準和製漢語	1
準和製新漢語+準和製新漢語	1
漢語+漢語	218
漢語+和製漢語	33
漢語+準和製漢語	18
漢語+準和製新漢語	30
和製漢語+和製漢語	1
和製漢語+準和製漢語	4
その他	13
合計	404

この表が示すように、2字漢語語基+2字漢語語基のパターンが218語と最も多く、それに次いで多いのが63語の2字和製新漢語+2字漢語のパターンである。以下、これら2つのパターンについて詳しく見てみる。

まず2字漢語語基+2字漢語語基のパターンであるが、関係する2字語基が中国古典漢籍にある漢語か、近代の新概念を表すための中国製新漢語かという点を詳しく調べた結果、以下のことが判明した。

- (1) 2字語基がともに古典漢籍にある2字漢語であるものは144語ある。その例の一部を挙げると、以下のようになる。

		語基	2字語基の初出	語基	2字語基の初出
1	契約国家	契約	『魏書』齊	国家	『易経』遠古
2	犯罪捜査	犯罪	『漢書・宣帝紀』漢	捜査	『酌中志』明
3	無限責任	無限	『史記』漢	責任	『新唐書』宋
4	意識淘汰	意識	『論衡・實知』漢	淘汰	『抱朴子・仙药』晋
5	掠奪婚姻	掠奪	『申鑑・政体』漢	婚姻	『詩経・郑风』周
6	孤立流星	孤立	『史記』漢	流星	『楚辞・九辨』漢
7	日暈月暈	日暈	『史記』漢	月暈	『史記』漢
8	節足動物	節足	『宋書』梁	動物	『周礼・地官』周

(2) 残りは、一方の2字語基が古典漢籍にあり、もう一方の2字語基が古典漢籍にならない中国製新漢語と認定される。その一部の例を以下に挙げておく。

		語基	2字語基の初出	語基	2字語基の初出
1	實際庸錢	實際	『比目魚』清1680	庸錢	『再駁某報之土地国有論』梁启超
2	応用計学	応用	『宋書』梁	計学	『原富』严复1898
3	純正計学	純正	『文心雕龙』梁	計学	『原富』严复1898
4	強制庸錢	強制	『五月二十四日過高郵三沟』宋	庸錢	『再駁某報之土地国有論』梁启超
5	契約庸錢	契約	『魏書』齊	庸錢	『再駁某報之土地国有論』梁启超
6	名義庸錢	名義	『韓非子』戦国	庸錢	『再駁某報之土地国有論』梁启超
7	実科教育	実科	『東撫复奏条陳变法疏』袁世凱	教育	『孟子·尽心上』戦国

続いて、「和製新漢語+漢語」のパターンを見てみよう。このパターンを取るものは63語である。関係する漢語語基について、その初出の時期や漢籍に出所があるかどうかを調べた結果、52語の2字漢語語基は中国の古典漢籍に出所があることが分かった。その一部を例示すれば、以下のようになる。

		語基	2字語基の初出	語基	2字語基の初出
1	国家定義	国家	『易経』遠古	定義	『百学連環』1870
2	有償行為	有償	『商法』1899	行為	『荀子』戦国
3	自然哲学	自然	『老子』春秋	哲学	『真景重ケ淵』1869頃
4	合体名詞	合体	『礼記·昏义』漢	名詞	『百学連環』1870
5	断層地震	断層	『風俗画報』1891	地震	『国語·周語上』春秋
6	無限花序	無限	『史記·河渠書』漢	花序	『生物学語彙』1884
7	親子共棲	親子	『淮南子』漢	共棲	『自然と人生』1900

残る11の2字漢語語基については、漢籍に出所がないことが確認できた。それにより、当該の2字漢語語基は中国製新漢語と認定され、「和製新漢語+中国製新漢語」の構成を持つと見ることができる。該当する語は以下のとおりである。

		語基	2字語基の初出	語基	2字語基の初出
1	服兵義務	服兵		義務	『泰西国法論』1868
2	発展教式	発展	『一年有半』1901	教式	
3	二臂槓杆	二臂		槓杆	『米欧回覧実記』1877
4	臨界圧力	臨界		圧力	『物理全志』1875
5	有苞花序	有苞		花序	『生物学語彙』1884
6	五裂葉片	五裂		葉片	『植学訳筌』1874
7	三裂葉片	三裂		葉片	『植学訳筌』1874
8	多裂葉片	多裂		葉片	『植学訳筌』1874
9	单茎花序	单茎		花序	『生物学語彙』1884
10	二裂葉片	二裂		葉片	『植学訳筌』1874
11	無苞花序	無苞		花序	『生物学語彙』1884

6.1.2.2 和製漢語の語基

4字語における和製漢語として認定する語は1語しかない。その語は以下に示すように、(2+2)の語構成であり、語基の組み合わせは「2字漢語+2字和製漢語」である。

	日本最初の出所	2字語基	中国最初の出所	日本最初の出所
家督相続	『康富記』1454	家督	『史記』漢	『吾妻鏡』1236
		相続		『顕戒論』820

6.1.2.3 和製新漢語の語基

4字語において認定された4字和製新漢語は49語である。それらの構成パターンは(2+2)、(2+1+1)、(1+2+1)、(3+1)の4つであり、それぞれのパターンの語数は以下のとおりである。

語構造	数
2+2	44
3+1	2
2+1+1	2
1+2+1	1

この表に示されるように、(2+2)で構成されたパターンの語が最も多く、およそ90%であった。その語基の語種を調べてみると、以下の表の結果となった。

2字語基+2字語基	合計
和製新漢語+漢語	12
和製新漢語+中国製新漢語	2
和製新漢語+和製漢語	3
和製新漢語+準和製漢語	1
漢語+漢語	17
漢語+中国製新漢語	3
漢語+和製漢語	1
漢語+準和製漢語	1
和製漢語+和製漢語	2
中国製新漢語+準和製漢語	2
合計	44

この表から、「和製新漢語+漢語」の組み合わせと「漢語+漢語」の組み合わせが多くを占めることが分かる。全体として中国製の語基が多く使われているという点に留意する必要がある。

6.1.3 5字語

『新爾雅』における5字語は211語であるが、和製新漢語の6語以外は中国製新漢語（205語）である。5字漢語と5字和製漢語は当該者なしである。

6.1.3.1 漢語の語基

上記の中国製新漢語のうち、6語は音訳語であることが分かった。残る199語は、1字の語基と2字の語基の組み合わせで構成される。そのうち、2字語基が2つ使われている語は181語であり、その構成パターンと語数は以下の表のとおりである。

2+2+1	2+1+2	1+2+2
群学研究法	元首之特権	不生産労力
相等相似体	無権的解釈	赤十字同盟
海水等温線	南極性磁気	定比例法則
動物発生学	纖維様腱鞘	上頸椎神経
斉整羽状葉	不要式行為	複細胞動物
106語	67語	8語
合計：181語		

これらの 181 語における 2 字語基の語種については、おおよそ以下のようになる。

- (1) 2 つの 2 字語基がともに中国製のものは 114 語であり、約 61% を占める。その語基の大半は漢語語基であり、中国製新漢語が語基となるものは 37 語と、少数である。しかも、両方の語基が中国製新漢語であるものは僅か 7 語にどどまる。
- (2) 2 字漢語の語基と 2 字和製新漢語の語基が組み合わされたものは 25 語である。また、2 字漢語の語基と和製漢語の語基で構成されたものは 4 語である。
- (3) 2 字中国製新漢語の語基と 2 字和製新漢語で構成されたものは 11 語である。
- (4) 2 字漢語語基と 2 字準和製新漢語語基の組み合わせは 13 語で、2 字漢語語基と 2 字準和製漢語語基の組み合わせは 3 語である。
- (5) 2 字中国製新漢語語基と 2 字準和製漢語語基の組み合わせは 1 語である。
- (6) 2 字語基がともに和製新漢語のものは 4 語であり、2 字語基がともに準和製新漢語のものは 1 語である。また、和製新漢語と準和製新漢語が語基になるものは 1 語である。

6.1.3.2 和製漢語の語基

5 字和製漢語に当該するものは見られなかった。

6.1.3.3 和製新漢語の語基

5 字和製新漢語は 6 語であるが、構成パターンで見ると、「4 + 1」(2 + 2 + 1)、「2 + 3」(2 + 2 + 1) のいずれかである。その語基を確認したところ、以下の表のようになった。

	5 字語	日中での初出	語基	語基の初出	語基	語基の初出
1	刑事訴訟法	『英和外交商業字彙』1900	刑事	『良人の自白』1904	訴訟	『後漢書』宋
2	民事訴訟法	『英和外交商業字彙』1900	民事	『礼記』漢	訴訟	『後漢書』宋
3	実験心理学	『哲学階梯』1887	実験	『論衡・遭虎』漢	心理	『文心雕龍』南朝
4	本初子午線	『本初子午線経度計算方及標準時の制』1886	本初	『稷下賦』宋	子午	『唐長安西明寺塔碑』唐
5	十二指腸虫	『新治療』1898	十二指腸	『解体新書』1774		
6	準禁治産者	『民法』1896	禁治産	『民法』1896		

2 字語基について言えば、5 字和製新漢語に関係する語基はすべて中国製の語基である。ここでも、中国製語基が重要な働きをしていることが分かる。

6.1.4 6字語以上

『新爾雅』の6字語は66語であるが、それらはすべて中国製新漢語である。その構成パターンについては、(2+2+2)が半数の30語である。その例には以下のものが挙げられる。

(2+2+2) : 公衆/利用/主義、高等/脊髓/動物、
倍数/比例/法則、気体/反応/定律、
因時/因国/異租など30語

その30語における2字語基も中国製のものが多く、和製のものは少ない。和製の語基が関係するのは以下のとおりである。

- (1) 2字語基が1つ和製漢語である6字語は3語であり、2字語基が1つ和製新漢語である6字語は6語である。
- (2) 2字語基が2つ和製漢語である語は3語であり、2字語基が2つ和製新漢語である語は1語である。
- (3) 2字準和製漢語の語基と2字準和製新漢語の語基が両方含まれている6字語は5語である。

(2+2+2)以外の構成パターンには(2+1+2+1)、(2+1+1+2)、(1+2+1+2)、(2+2+1+1)、(1+2+2+1)があり、該当する語は36語である。ここでは、該当する例を挙げるにとどめたい。

(2+1+2+1) : 実地的教育学、意識之統一性など22語

(2+1+1+2) : 推理式之原則など3語

(1+2+1+2) : 北回帰無風帯など5語

(2+2+1+1) : 正方無等之線など3語

(1+2+2+1) : 不斉整羽状葉など3語

最後に、『新爾雅』における7字語以上の語であるが、これには28語が該当する。7字語についても、2字語基が基本をなしている。その概要は以下のとおりである。

- (1) 関係するすべての2字語基が漢語語基である語は5語(約18%)しかない。
- (2) 残りの23語はすべて、2字漢語、2字中国製新漢語、2字和製漢語、2字準和製漢語、2字和製新漢語、2字準和製新漢語を組み合わせたものである。この場合も、和製語基が使われる場合はあまり多くない。

6.2 『NEW TERMS』における各字語の構成

本節では、『NEW TERMS』における語の構成を取り上げる。前節と同様に、漢語・和製漢語・和製新漢語の3分類に基づいて3字語から順に見ていくことにする。

6.2.1 3字語

6.2.1.1 漢語の語基

『NEW TERMS』における3字語は693語であるが、そのうちの519語が漢語である。この漢語の構成パターンは『新爾雅』の場合と同じく、(1+2)と(2+1)が基本となる。それに関係する2字語基について調べた結果は、以下のとおりである。

- (1) 2字語基が古い典籍に出所があると確認された語は283語である。これらは3字中国製新漢語である。その例の一部を以下に挙げておく。

		英語解釈	語基	中国最初の出所
1	學究派	Scholastics	学究	『自咏』宋
2	内務部	Board of Foreign Affairs	内務	『公羊传』戦国
3	新刑律	New penal code	刑律	『後漢書』宋
4	差遣官	Aide-de-camp	差遣	『魏書・于烈传』南北朝
5	領事署	Consulate	領事	『集異記』唐
6	敢死團	The Dare-to-die Society	敢死	『史記』漢
7	自強社	National Development Society	自強	『楚辭』戦国
8	握手禮	To shake hands	握手	『東觀漢記』漢

- (2) 2字語基が和製のものは58語である。これらの和製2字語基も3字中国製新漢語を派生する。その例の一部を以下に挙げておく。

		英語解釈	語基	日本最初の出所	
1	造幣廠	Mint at Peking	造幣	『明六雜誌』1875	和製新漢語
2	防疫隊	The same in time of pestilence	防疫	『褒賞条例』1881	和製新漢語
3	原議案	Original motion	議案	『西洋事情』1866	和製新漢語
4	脱帽禮	To lift the hat in salute	脱帽	『風俗画報』1889	準和製新漢語
				「脱帽」は漢籍の『後漢書』で、罪を認める	
5	學士位	Literary degress	學士	『当世書生氣質』1885	準和製新漢語
				「學士」は漢籍の『周礼』で、国学で在籍の学生	

この58語の内訳を意味分野も併せてまとめると、以下の表のようになる。

	和製漢語語基	和製新漢語語基	準和製漢語語基	準和製新漢語語基
1-2接尾辞				
3代名詞				
4政治		1		
5-7政府		6		
89軍事				
10法律		1		
11国際関係		1		
12医薬品と職業		1		
13貿易と商業		2	1	
14改革		1		
15政党				
16-18社会	1	12		
19個人				
20-21宗教		4		
22-23教育		6	1	1
24言語		1		
25メディア				1
26哲学				
27-29ヨーロッパ		6	1	
30統一と自然				
31形容詞		1		1
32抽象名詞				
33感覚と行動				
34礼義		1		1
35暴力				
36思想				
37主張				
38-40他の名詞		2		
41語組				
42補充語彙		3		
43日本語から		1		
	1	50	3	4

(3) 2字語基が中国製新漢語と確認された語が残る13語であった。これらの3字語も中国製新漢語と認定される。以下に該当する例の一部を挙げておく。

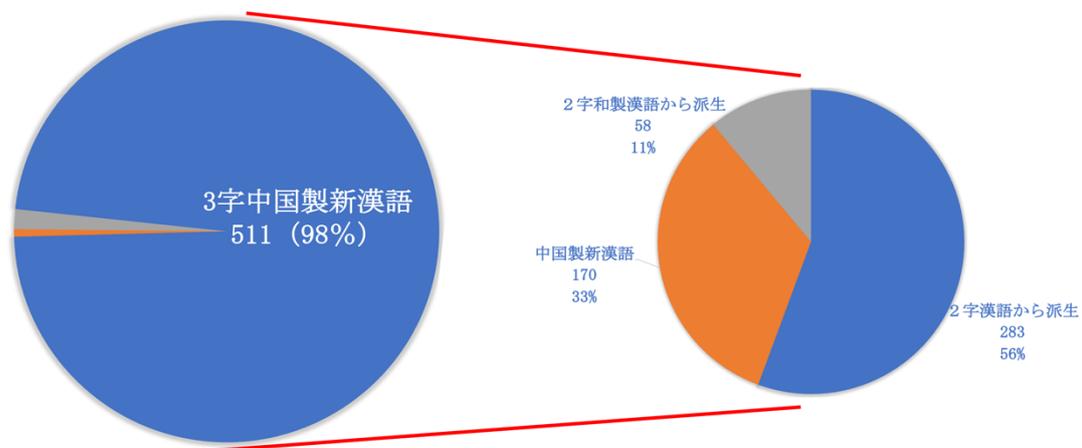
		英語解釈	語基	中国最初の出所
1	銅元局	Copper mint	銅元	1900
2	大律師	Lawyer	律師	『二十年目睹之怪现状』1903
3	機器刀	Guillotine	機器	『金壺浪墨』清末

(4) 2字語基のうち、典籍にない語は139語であった。これら典籍にない139語も中国製新漢語と見做される。以下にその例の一部を挙げる。

1	毛瑟鎗	Mauser rifle
2	俱樂部	Club
3	手風琴	Accordion
4	萬花筒	Kaleidoscope
5	冰吉零	Ice cream
6	初高辣	Chololate
7	疇嘸水	Aerated water
8	守晨更	To keep the morning Watch

以上をもとに、3字漢語の調査結果をまとめると、次のようになる。『NEW TERMS』で確認された計 522 語の 3 字漢語のうち、古典漢籍に由来するものは 8 語（1%）であり、残りの 514 語は中国製新漢語である。その中国製新漢語 514 語のうち、古典漢籍にある 2 字漢語から派生された語が 286 語（56%）で、2 字和製漢語から派生された語が 58 語（11%）である。これをグラフ化すると、以下のようになる。

3 字漢語



6.2.1.2 和製漢語の語基

『NEW TERMS』の 3 字語のなかで和製漢語と認定できたのは 8 語である。関係する 2 字語基はいずれも中国製漢語であることから、中国製漢語から派生的に作られた和製漢語であると言える。これらの語を以下に挙げておく。

		2字語基	日本最初の出所	中国最初の出所
1	製造家	製造	大日本国法華経験記 1040	大法頌 420-589
2	書記官	書記	続日本紀-天平宝字八年 764	史记・大宛列传 BC202-8
3	運送船	運送	続日本紀-和銅二年 709	三国志・吳志 280-290
4	天主教	天主	今昔 1120頃	史记・封禅书 BC202-8
5	天文臺	天文	書紀 720	易经・贲卦 BC1046-BC771
6	手提燈	手提	風俗画報一九号 1890	
7	醫學士	醫學	文明本節用集 室町中	旧唐书 945
8	兩替屋	兩替	多聞院日記 1592	

6.2.1.3 和製新漢語の語基

3字語のなかで和製新漢語と認定できたのは160語である。関係する2字語基を調べた結果は、以下のとおりである。

- (1) 2字漢語の語基を持つものは118語(約74%)である。その例の一部は以下のとおりである。

		英語解釈	日本最初の出所	2字語基	2字語基の最初の出所
1	軍樂隊	Military band	『風俗画報』1894	軍樂	『後漢書・礼仪志中』漢
2	競争心	Ambition	『雪中梅』1886	競争	『庄子・齐物论』戦国
3	幼稚園	Kindergarten	『読売新聞』1876	幼稚	『漢書・王莽传』漢
4	公使館	Legation	『行在所日誌』1868	公使	『北史・王澄传』唐
5	看護婦	Hospital matron	『郵便報知新聞』1887	看護	『金縷曲・乙未清明』元

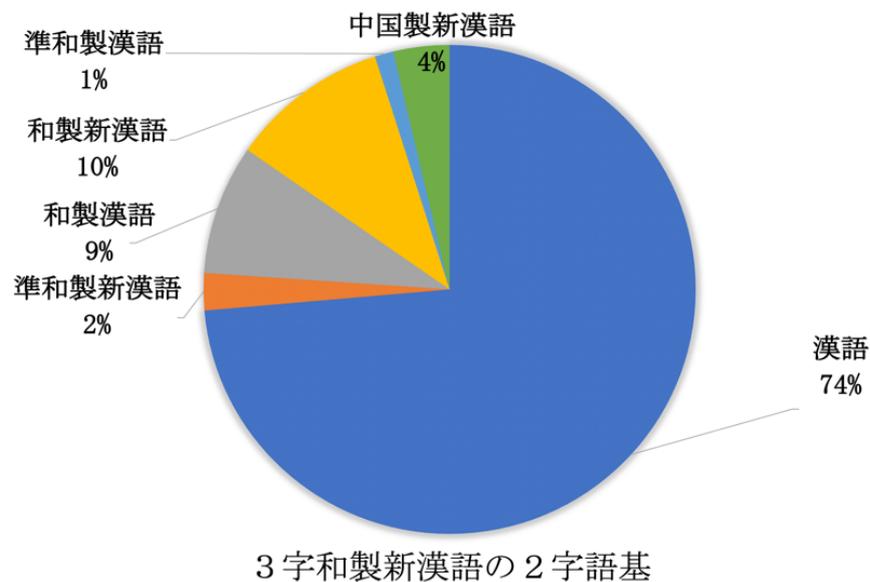
- (2) 語基が和製漢語と確認された語は14語、準和製漢語と確認された語は2語である。また、語基が和製新漢語と確認された語は16語、準和製新漢語と確認された語は4語である。和製漢語(9%)と和製新漢語(10%)の割合も、準和製漢語(1%)と準和製新漢語(2%)の割合もほぼ同じである。以下に例の一部を挙げておく。

		英語解釈	日本最初の出所	2字語基	2字語基の最初の出所
1	催眠術	Hypnotism	『哲学字彙』1881	催眠	『医語類聚』1872
2	防腐劑	Antiseptic	『小学読本』1884	防腐	『写真鏡図説』1867
3	展覽會	Exhibition	『和英語林集成』1867	展覽	『兎園小説外集』1826
4	社會學	SOCIOLOGY	『斯氏教育論』1880	社会	『東京日日新聞』1875
			「社会」は漢籍の『答揚尚書』唐で、仲春に集会する		
5	物理學	Physics	『改正増補物理階梯』1876	物理	『改正増補物理階梯』1876
			「物理」は漢籍の『宋書』宋で、事情の理		

(3) 残る6語の2字語基の出所が見られないため、その2字語基は中国製新漢語と見做す。そこから派生した3字語の初出は、日本側の資料で確認されたため、和製新漢語と認定する。

		英語解釈	日本最初の出所
1	巡洋艦	Cruiser	『浮城物語』1890
2	黒死病	The Black Death	『官報』1894
3	一神教	Monotheism	『他界に対する観念』1892
4	唯理論	Rationalism	『哲学字彙』1881
5	補習科	Class for making up studies	『郵便報知新聞』1886
6	自習室	Study room	『地獄の花』1902

以上から、3字和製新漢語における2字語基についてグラフ化すると、以下のようになる。



6.2.2 4字語

6.2.2.1 漢語の語基

『NEW TERMS』の4字漢語は349語であり、そのうちの19語が漢籍に出所を持つ。この19語のうち、11語は古典の漢籍に出所がある4字漢語で、8語は近代以降の漢籍に出所がある4字中国製新漢語である。

残りの 330 語について語構成を見ると、『新爾雅』の場合と同じく、(2+2)、(1+2+1)、(2+1+1)、(1+1+2) の 4 つのパターンが認められる。その内訳を見ると、以下に示すように、(2+2) のパターンを取るものが 308 語と、圧倒的に多い。

2 + 2	308
2 + 1 + 1	12
1 + 2 + 1	6
1 + 1 + 2	2
1 + 1 + 1 + 1	1
3 + 1	1

そこで、この (2+2) のパターンについて、関係する語基の語種を調べた結果、以下のようになった。

2 字語基+ 2 字語基	数
和製新漢語+ 漢語	56
和製新漢語+ 和製漢語	3
和製新漢語+ 和製新漢語	4
和製新漢語+ 準和製漢語	1
和製新漢語+ 準和製新漢語	7
漢語+ 漢語	200
漢語+ 和製漢語	11
漢語+ 準和製漢語	6
漢語+ 準和製新漢語	19
和製漢語+ 準和製漢語	1
合計	308

この表から明らかなように、「2 字漢語語基+ 2 字漢語語基」のパターンを取るものが 200 語 (65%) と、多くを占めている。この語基についても古典漢籍にある漢語か近代の新概念などを表すための中国製新漢語かという点を調べた結果、以下の点が判明した。

(1) 2 字語基が 2 つともに古典漢籍にあるものは 128 語 (64%) である。その例の一部を以下に挙げておく。

		英語解釈	2字語基の初出	2字語基の初出
1	虚無主義	Nihilism	虚無『庄子·刻意』战国	主義『史記』漢
2	尚武精神	Militarism	尚武『诗·谷风·鼓钟』春秋	精神『吕氏春秋』秦
3	活動影戲	Cinematograph	活動『和萧秋屋韵』宋	影戲『事物紀原』宋
4	結婚自由	Right to make one's own betrothal	結婚『公羊传』战国	自由『玉台新咏』梁
5	維持治安	To uphold the peace	維持『史記』漢	治安『管子·形式解』春秋
6	武力解決	To settle by appeal to arms	武力『史記』漢	解決『论衡·案书』漢
7	生計艱難	Disturbed economic conditions	生計『陈書·姚察传』唐	艱難『诗·王风』春秋

(2) 2字語基の1つが古典漢籍にあり、もう一つが近代以降に出所が確認できたものが以下の表にある8語である。

		英語解釈	2字語基の初出	2字語基の初出
1	罐頭食品	Canned goods	食品『昞谷漫录』宋	罐頭『二十年目睹之怪现状』1903
2	福音同盟	Evangelical Alliance	福音『资政新篇』1859	同盟『左传·喜公四年』春秋
3	涼血動物	The indifferent class	涼血『老残游记』1903	動物『周礼』西周
4	團體精神	Esprit de corps	團體『老残游记』1903	精神『吕氏春秋·尽数』秦
5	合股經商	stock company	合股『二十年目睹之怪现状』1903	經商『四春园』元
6	畢業文憑	Diploma	畢業『二十年目睹之怪现状』1903	文憑『王智兴度僧尼状』唐
7	有限公司	A limited company	有限『文选·曹丕』魏	公司『海国图志·筹海篇』1842
8	報館自由	Freedom of press	報館『二十年目睹之怪现状』1903	自由『玉台新咏』梁

(3) 2字語基の1つは古典漢籍にあることが確認できたものの、もう1つのほうは古典漢籍での出所が確認できなかったものは「2字漢語+2字中国製新漢語」と見做される。その例の一部は、以下のとおりである。

		英語解釈	2字語基の初出	2字語基の初出
1	拜神儀式	Ceremony		儀式『三国志·魏志』晋
2	們羅主義	Monroe doctrine		主義『史記』漢
3	準定説法	Indicative mood		説法『儒林外史』清
4	罰金保出	To demand bail	罰金『史記』漢	
5	軍法鎗斃	Executed by martial law	軍法『周礼』西周	
6	水陸飛艇	Aeroplane	水陸『蜀都賦』晋	

(4) 2字語基の1つが近代以降の漢籍で確認でき、もう1つが漢籍で確認できなかったというもの、及び、2つの2字語基のどちらも漢籍で確認できなかったものが併せて6語ある。

「2字漢語語基+2字漢語語基」については以上のとおりであるが、次に、「2字語基+2字語基」において2番目に語数が多い「2字和製新漢語+2字漢語」について簡単に触れておきたい。該当する56語における語基の語種を調べたところ、それに関係する

2字漢語語基は古典漢籍に出所があるものが47語であった。その例の一部を以下に挙げておく。

	英語解釈	2字語基の初出	2字語基の初出	
1	空談學理	Theoretical	空談、『与诸甥侄書』宋	学理、『内地雜居未来之夢』1886
2	宗教思想	Religious interest	宗教、『航魯紀行』1866	思想、『素問·上古天真論』戦国
3	列強均勢	Balance of power	列強、『一年有半』1901	均勢、『为吴令谢询求为』晋
4	養生要素	Necessaries of life	養生、『申鑑·政体』漢	要素、『哲学字彙』1881
5	政治方針	Political platform	政治、『書·毕命』漢	方針、『当世書生氣質』1885
6	工業學校	Industrial School	工業、『万国新話』1868	學校、『孟子·滕文公上』戦国
7	同時解僱	Lock-out	同時、『庄子·盜拓』戦国	解雇、『報知新聞』1903

「2字和製新漢語＋2字漢語」のパターンには9語が残るが、その9語は以下の表のとおりである。

	英語解釈	2字語基の初出	2字語基の初出	
1	天演進化	Evolution	天演、『天演論』1897(中)	進化、『人權新説』1882
2	退化大羣	A decadent power	退化、『筆まかせ』1884	大羣、『大同書』民国(中)
3	紀念郵票	Commemorative stamps	紀念、『和蘭字彙』1855	郵票、『清稗類鈔』民国(中)
4	西式禮帽	Foreign cap	西式、『瓮牖余談』民国(中)	礼帽、『東京新繁昌記』1874
5	本於神權	Divine right	神權、『日本開化小史』1877	
6	實業司長	Superintendent of Industries	實業、『米欧回覽實記』1877	
7	秩序不紊	In perfect	秩序、『西国立志編』1870	
8	優勝劣汰	The superior will conquer fittest	優勝、『当世書生氣質』1885	
9	本黨支部	Branch organization of party	支部、『司法省令第三号』1890	

この表が示すように、「2字和製新漢語＋2字中国製新漢語（近代以降の漢籍で出所が確認されたもの）」が4語あり、「2字和製新漢語＋2字中国製漢語（近代以降の漢籍で出所が確認されなかったもの）」が5語ある。

それ以外の組み合わせも併せて4字漢語の「2字語基＋2字語基」における語基の現れ方や語数の割合を全体として見ると、『新爾雅』の場合との類似性が高いとすることができる。

6.2.2.2 和製漢語の語基

4字和製漢語は『NEW TERMS』での当該者はない。

6.2.2.3 和製新漢語の語基

4字語において確認された4字和製新漢語は34語である。その構成パターンは(2＋2)の1種類だけである。それに関係する2字語基を語種で見たのが以下の表である。

2 字語基+ 2 字語基	合計
漢語+漢語	17
漢語+和製新漢語	6
漢語+中国製新漢語	4
漢語+準和製新漢語	2
和製新漢語+準和製新漢語	1
和製新漢語+中国製新漢語	4
合計	34

この表から言えることは、以下とおりである。

- (1) 「漢語+漢語」のパターンを取るものが半分の 17 語である。
- (2) それに次いで多いのが「漢語+和製新漢語」の 6 語である。「漢語+準和製新漢語」は 2 語ある。さらに、「中国製新漢語+和製新漢語」も 4 語ある。これらは日本製の漢語が語基として関わる和製新漢語である。
- (3) 「和製新漢語+準和製新漢語」という構成をとるものが 1 語ある。この和製新漢語は語基の語種から見て純粹の和製語と言えるものであるが、該当する語の数は極めて少ない。

6.2.3 5 字語

『NEW TERMS』の 5 字語は 49 語である。そのうちの 47 語は漢語であり、和製のものは 2 語だけである。

6.2.3.1 漢語の語基

『NEW TERMS』の 5 字語の漢語 (47 語) における語構成を調べてみると、以下の点が判明した。

- (1) 5 字語は、基本的に (2 + 2 + 1) の構成を持つ。すなわち、2 字語基を 2 つ持つと言える。関係する語基の語種を見てみると、2 つとも漢語語基であるものが最も多く、33 語 (約 75%) である。古い漢籍にある語基を組み合わせたものが

18 語、古い漢籍にある語基と近代以降の漢籍にある語基を組み合わせたものが 9 語、近代以降の漢籍にある語基同士を組み合わせたものが 9 語である。

- (2) 和製漢語が語基として関係するものには、「漢語＋和製新漢語」が 3 語、「中国製新漢語＋和製新漢語」が 3 語、「漢語＋準和製新漢語」が 2 語である。
- (3) 例外的に、(2 + 3) のパターンを取ると見做されるのが「亜西亜協会」である。この場合、音訳語の「亜西亜」が和製新漢語の 3 字語基として、「協会」が漢語の 2 字語基として働いている。

6.2.3.2 和製漢語の語基

5 字和製漢語は『NEW TERMS』での当該者はない。

6.2.3.3 和製新漢語の語基

5 字和製新漢語と認められるのは 2 語だけである。その語構成には 2 字語基が 2 つ認められる。その 2 字語基の出所を調べた結果は、以下のとおりである。

2 字語基の初出		
無政府主義	政府『資治通鑑』宋	主義『史記・太史公自序』漢
高等小學校	高等『陈留太守胡公碑』漢	學校『孟子・滕文公上』戦国

この表が示すように、関係する 2 字語基はいずれも漢語である。これらの語は漢語から派生的に作られた和製新漢語とすることができる。

6.2.4 6 字語以上

『NEW TERMS』の 6 字語は 11 語あるが、それらはすべて中国製新漢語と認定される。その構成パターンは、基本的に (2 + 2 + 2) と (2 + 1 + 2 + 1) である。前者が 8 語、後者が 2 語である。その内訳は以下のとおりである。

- (1) (2 + 2 + 2) のパターンにおける 2 字語基の組み合わせについては、「漢語＋中国製新漢語＋中国製新漢語」が 3 語、「漢語＋漢語＋中国製新漢語」が 1 語、「中国製新漢語＋中国製新漢語＋中国製新漢語」が 1 語、「漢語＋中国製新漢語＋和製新漢語」が 3 語であった。宣教師が作った 2 字語基が含まれている語は 1 語である。

(2) (2 + 1 + 2 + 1) のパターンにおける 2 字語基の組み合わせについては、「漢語 + 中国製新漢語」が 1 語、「中国製新漢語 + 中国製新漢語」が 1 語である。

(3) 例外的に、(3 + 2 + 1) のパターンが 1 語認められるが、この場合、3 字語基は音訳語であり、2 字語基は中国語新漢語である。

また、『NEW TERMS』における 7 字語は 5 語あり、それらもすべて中国製新漢語である。関係する語基は 2 字語基であり、その内訳は、「漢語語基 + 漢語語基」が 2 語、「中国製新漢語語基 + 中国製新漢語語基」が 1 語、「漢語語基 + 中国製新漢語語基」が 1 語、「漢語語基 + 中国製新漢語語基 + 和製漢語語基」が 1 語である。

6.3 和製新漢語の造語法をめぐって

本節では、前々節と前節で見た『新爾雅』と『NEW TERMS』の新語のなかの和製新漢語を対象として、その語構成の特徴を探ってみたい。

6.3.1 日本語の漢語における語基の問題

語の構成を考える際に基本となるのは、語を作り上げる「語基」と呼ばれる要素である。ここで、「語基」の概念を論じているいくつかの先行研究を少しばかり見ておこう。

まず、宮地 (1973) では、「語基とは、語の構成に意味的基幹としての役わりを果たすものの意であるが、基幹と基幹でないものとの区別は、これが意味にかかわる概念であるだけに明確でないところをのこす。《中略》語基は語の意味的基幹であり、語を前提とする概念あるいは予想する概念だからである。」(p.68) と述べられている。

野村 (1976) では、「「語基」とは、「語」の意味的な中核をなす部分という程度に解釈してさしつかえない。必要があれば、名詞性語基、動詞性語基というようにいうこともできる。以下では、ここで問題にする二字漢語や一字漢語を、それぞれ複合語基、単純語基のように呼ぶことにする。」(p. 885) と述べられている。

また、荒川 (2003) は、「中国語において漢字（厳密には漢字で表記される言語単位であるが、以下便利上この表現を使う）は最小の意味単位（morpheme＝形態素）であり、現在中国の言語学界ではこれを“語素”という名で呼んでいる。漢字＝“語素”は古代中国語においては、それがそのまま語であることが多かったが、現代中国語においては、語の構成要素にしかならないものも少なくない。」(p. 50) と述べている。

さらに、高野 (2004) には、「「語基」とは、語を構成している要素、造語要素のことで

ある。語の各構成要素は、承接の関係で結合している。そして、すべての語の基本となり、かつ造語要素として機能するのは、漢語では、1字語、2字語、3字語である。4字語以上は「2字語+2字語」、「2字語+3字語」のような構造になっている。ただ、このうち3字語は、たとえば「語彙論」という場合「語彙/論」のように分解できる。「語彙」は2字語、〈論〉は1字語である。このようにみてくると、3字語は基本単位として認めるが、語の構成要素としては、1字からなる要素と2字からなる要素ということになる。このようにして得られた要素のことを「語基」(stem)と呼ぶ。」(p. 56)という指摘がある。また、「漢字は、原則として1字が1語を形成し、それがそのまま漢語の要素である語基(造語要素)となることができる」(p. 244)という指摘もある。

本研究では、これらの先行研究、とりわけ高野(2004)の研究に基づいて、「語基」という概念を次のように捉えることにする。すなわち、「語基」は語を構成する最小の造語要素であり、承接関係によって結合するものである。漢語の語基は基本的に、1字語基ないし2字語基であり、3字語の場合は「2字語基+1字語基」のように、4字語の場合は、「2字語基+2字語基」、「2字語基+1字語基+1字語基」のように分解することができる。言い換えれば、和製新漢語の造語要素は、1字からなる語基と2字からなる語基の2種のみである、ということになる。

この点を『新爾雅』と『NEW TERMS』における和製新漢語に当てはめれば、次のようになる。まず、1字語は和製新漢語として作られる可能性は極めて低く、実際、『新爾雅』にも『NEW TERMS』にもその例は見られない。

2字語は、2字語基がそのまま語として機能する。例えば、2字語基「社会」は語である。そのうえで、他の語基と結合して3字語以上の語を作ることがある。例えば、「社会」は「政策」と結合して「社会/政策」という複合語(compound word)を作ることができる。この場合、前接(pre)の「社会」も後接(post)の「政策」も語基として働いている。

3字語では、2字語基に前接語基または後接語基が付加されることがある。例えば、「外交家」は「外交/家」のように分解できる派生語(derivative)である。この場合、「家」は後接語基(post stem)として働いている。

4字語については、2字語基が2つ結合したもの、つまり「2+2」の構成パターンを取るものが多いが、3字語が関係する場合もある。例えば、「半開化国」はまず「半+開化国」という「1字の前接語基+3字語」に分けられるが、そのなかの「開化国」は

「開化+国」（「2字語+1字の後接語基」）の構成になっている。

5字語は、（2+2+1）のパターンを取るものが多い。例えば、「実験心理学」はまず「実験+心理学」という「2字語+3字語」に分けられるが、このうちの「心理学」は「心理+学」（「2字語+1字の後接語基」）の構成になっており、1字語基と2字語基が基本的な造語要素となっているとすることができる。

以上に加えて留意すべきものとして、高野(2004)による語基の分類がある。高野(2004)は語基を以下のように、「自立形式 (Free Form)」と「結合形式 (Bound Form)」に分け、さらにそれらをそれぞれ3つと4つに下位分類している。

I 自立形式 (Free Form)

- 1) 単立語基 (Free)
- 2) 単立・前接語基 (Free-pre)
- 3) 単立・後接語基 (Free-post)
- 4) 単立・前接・後接語基 (Free-pre-post)

II 結合形式 (Bound Form)

- 5) 前接語基 (Bound-pre)
- 6) 後接語基 (Bound-post)
- 7) 前接・後接語基 (Bound-pre-post)

また、語種の類別として、以下の3種が設けられている。

- a) 既存のものを用いる「既存語基」
- b) 他から借用する「借用語基」
- c) 新たに造成する「新造語基」

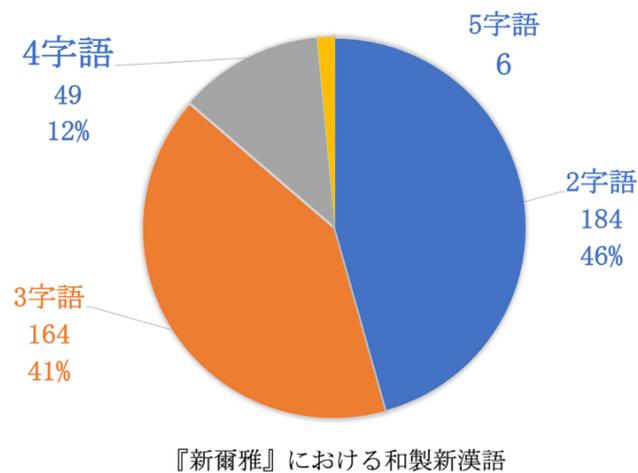
以下、語基に関する高野(2004)の見方をもとに、『NEW TERMS』と『新爾雅』に収録されている和製新漢語を対象として、その造語の仕組みの実態を明らかにしたい。

6.3.2 和製新漢語の統計

前述のとおり、『新爾雅』における和製新漢語は2字語から5字語にかけて全403語が確認された。その403語を字数で分けると、以下のようになる。

和製新漢語	2字語	3字語	4字語	5字語	合計
『新爾雅』	184	164	49	6	403

これをグラフ化すると、次のようになる。

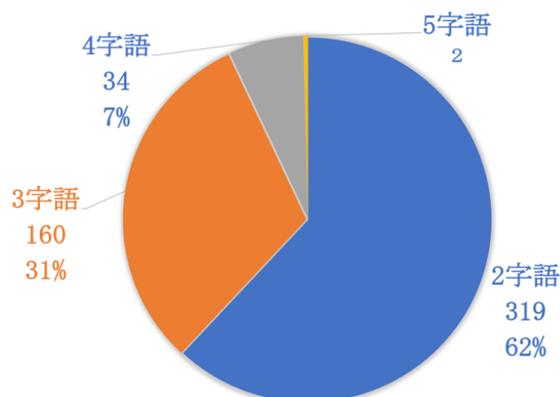


表から分かるように、2字語が最も多く、約46%を占めている。それに次ぐのが3字語の164語（約41%）である。

それに対して、『NEW TERMS』における和製新漢語も2字語から5字語にかけて確認されたが、関係する515語の字数による内訳は次のとおりである。

和製新漢語	2字語	3字語	4字語	5字語	合計
『NEW TERMS』	319	160	34	2	515

これを同様にグラフ化してみよう。



『NEW TERMS』における和製新漢語

表が示すように、『新爾雅』の場合と同じく、2字語（約62%）が最も多く、それに次いで3字語（約31%）が多い。2字語と3字語を合わせた数の割合（約93%）は、『新爾雅』における割合（約87%）に近い。

『新爾雅』と『NEW TERMS』の和製新漢語を照らし合わせてみると、42語が重出していることが分かった。該当する語を以下に挙げておく。

1	人格	『思出の記』1900	23	法制局	1885
2	美感	『小春』1900	24	裁判所	『太政官日誌』1868
3	宗教	『航魯紀行』1866	25	唯物論	『哲学字彙』1881
4	智育	『教育学』1882	26	唯心論	『哲学字彙』1881
5	徳育	『教育学』1882	27	教育学	『筆まかせ』1884
6	器官	『真理金針』1886	28	不動産	『講学余談』1877
7	概念	『致知啓蒙』1874	29	審美学	『西洋学校軌範』1870
8	秩序	『西国立志編』1870	30	心理学	『百学連環』1870
9	美術	『美妙学説』1872	31	生物学	『覚書』1875
10	電話	『郵便報知新聞』1891	32	植物学	『医語類聚』1872
11	義務	『泰西国法論』1868	33	論理学	『明六雑種』二三号 1874
12	政策	『国会議』1888	34	社会学	『斯氏教育論』1880
13	理想	『利学』1887	35	生理学	『百学連環』1870
14	範疇	『哲学字彙』1881	36	局外中立	『中外新聞』1868
15	整合	『哲学字彙』1881	37	個人主義	『春酒屋漫筆』1891
16	憲法	『仏蘭西法律書』1875	38	立憲政体	『立憲政体』1868
17	国籍	『国籍法』1899	39	国際公法	『敵国に対する礼』1894
18	衛生	1876	40	愛他主義	『濟世危言』1891
19	組織	『明六雑誌』1874	41	共産主義	『仏和法律字彙』1886
20	教授	『帝国大学令』1886	42	治外法権	『東京日日新聞』1878
21	系統	『文明論之概略』1875			
22	現象	『哲学字彙』1881			

6.3.3 各字語の構成パターンとその特徴

続いて、2字語から5字語までの構成パターンとその特徴を2字語から順に見ていくことにする。以下で対象となる和製新漢語は、『新爾雅』の収録語と『NEW TERMS』の収録語を合わせたものである。

6.3.3.1 2字和製新漢語

高野（2004）に従えば、2字和製新漢語は自立形式であり、それ自身で語になるとともに、3字語以上の語の語基として働く。2字和製新漢語の例には以下のようなものがある。

1) 2字和製新漢語の単立語基 (Free)

	初出
科学	『哲学字彙』 1881
投票	『附音插図英和字彙』 1873
地峡	『慶応再版英和对訳辞書』 1867
欧風	『玉石林志』 1861
禾本	『生物学語彙』 1884

2字語が前接語基として働く例には以下のようなものがある。

2) 2字和製新漢語の単立・前接語基 (Free-pre)

	初出	
総合	『哲学字彙』 1881	<u>総合</u> 考察
個人	『流水日記』 1894	<u>個人</u> 主義
国際	『国際法』 1873	<u>国際</u> 公法

また、2字語が後接語基として働く例には以下のようなものがある。

3) 単立・後接語基 (Free-post)

	初出	
範疇	『哲学字彙』 1881	統一 <u>範疇</u>
電話	『郵便報知新聞』 1891	公共 <u>電話</u>
預科	『朝野新聞』 1874	留学 <u>預科</u>

さらに、前接語基と後接語基の両方で働くものには以下のようなものがある。

4) 2字和製新漢語の単立前接・後接語基 (Free-pre-post)

	初出	
哲学	『真景重ヶ淵』 1869頃	<u>哲学</u> 思想
		道徳 <u>哲学</u>
政策	『国会論』 1888	<u>政策</u> 支持
		国際 <u>政策</u>

次に、2字語基の語種を見たいと思う。ここでは、高野 (2004) の「既存語基」・「借用語基」・「新造語基」という3分類を用いることにする。2字語基については借用語基と新造語基が見られる。確認された481の2字語基の語種は以下のとおりである。

2字和製新漢語	新造語基	借用語基
481	369	112
	77%	23%

この表が示すように、2字語基では新造語基が77%と、多数を占めており、日本製の語基が重要な働きをすることが分かる。

6.3.3.2 3字和製新漢語

次に3字語であるが、3字語はほぼ(2+1)の構成パターンを取る。そこでは、2字語基が重要な働きをする。その場合、2字語基は前接語基になるもの、後接語基になるもの、前接・後接の両方になるものの3つに分けられる。『NEW TERMS』と『新爾雅』で確認された3字和製新漢語は合わせて324語であるが、そのうちの13語の重出語を除く311語で見ると、2字語基の前接・後接の現れ方は以下のとおりである。

	3字和製新漢語の2字語基
前接語基(Bound-pre)	285
後接語基(Bound-post)	22
前接・後接語基(Bound-pre-post)	4

この表から明らかなように、3字和製新漢語における2字語基は前接語基として働くものの数が圧倒的に多い。

次に、3字和製新漢語における2字語基の語種を見てみよう。該当する2字語基が既存語基・借用語基・新造語基のいずれであるかを調べたところ、全311のうち、既存語基が197、借用語基が11、新造語基が103という結果であった。既存語基が全体の約63%を占めている。この場合、3字語としては和製新漢語であるが、それを構成する2字語基は漢語語基であり、造語において中国製の語基が大きな役割を果たしたことがここでも確認される。

6.3.3.3 4字和製新漢語

4字語の構成は(2+2)のパターンを取るものが多い。4字語のうち、4字和製新漢語は76語確認された。その76語を構成パターンで見ると以下のようにしており、(2+2)のパターンを取るものが大半であることが分かる。

構造パターン	数
2+2	71
3+1	2
2+1+1	2
1+2+1	1

そこで、次に、(2+2)のパターンを取る76語における2字語基の語種を調べた結果、以下のような語種の組み合わせが確認された。

2字語基の語種	数
漢語＋漢語	32
漢語＋和製漢語	1
漢語＋和製新漢語	16
漢語＋中国製新漢語	5
漢語＋準和製漢語	1
漢語＋準和製新漢語	2
和製漢語＋和製漢語	2
和製新漢語＋和製漢語	3
和製新漢語＋準和製漢語	1
和製新漢語＋準和製新漢語	1
中国製新漢語＋準和製漢語	2
中国製新漢語＋和製新漢語	5
合計	71

これを既存語基・借用語基・新造語基の組み合わせに置き換えると、以下の表のようになる。

〈既存語基〉＋〈既存語基〉	32
〈既存語基〉＋〈新造語基〉	22
〈既存語基〉＋〈借用語基〉	3
〈新造語基〉＋〈新造語基〉	10
〈新造語基〉＋〈借用語基〉	4
合計	71

この表が示すように、「既存語基＋既存語基」のパターンが32語で、約45%を占めており、それに次いで「既存語基＋新造語基」のパターンが22語（約31%）となっている。ここでも、造語における既存語基の役割が大きく、既存の語基を活かして和製新漢語が創出される場合が多いということが確認される。

6.3.3.4 5字和製新漢語

最後に、5字語であるが、5字の和製新漢語と認められたのは8語だけである。その8語の構成パターンと語基の語種は、以下の表のとおりである。

		語基	語基の初出	語種
1	刑事訴訟法	刑事	『良人の自白』1904	中国製新漢語
		訴訟	『後漢書』宋	漢語
2	民事訴訟法	民事	『礼記』漢	漢語
		訴訟	『後漢書』宋	漢語
3	実験心理学	実験	『論衡・遭虎』漢	漢語
		心理	『文心雕龍』南朝	漢語
4	本初子午線	本初	『稷下賦』宋	漢語
		子午	『唐長安西明寺塔碑』唐	漢語
5	無政府主義	政府	『史記・太史公自序』漢	漢語
		主義	『史記・太史公自序』漢	漢語
6	高等小学校	高等	『孟子・滕文公上』戦国	漢語
		学校	『孟子・滕文公上』戦国	漢語
7	準禁治産者	禁治産	『民法』1896	和製新漢語
8	十二指腸虫	十二指腸	『解体新書』1774	和製漢語

これら8語のなかで「準禁治産者」と「十二指腸虫」を除く6語はいずれも2つの2字語基が構成要素となるが、それらはすべて中国製の語基である。このように、中国製2字語基の組み合わせが造語の基盤となっていることが確認され、5字和製新漢語においても中国製の語基が大きな役割を果たすと言える。

6.4 本章のまとめ

本章では、第4章と第5章の考察をもとに、和製新漢語を中心に造語法の問題を取り上げた。6.1で『新爾雅』における新語の語構成を、6.2で『NEW TERMS』における新語の語構成をそれぞれ観察した後、6.3において、そのなかの和製新漢語に焦点を当てその造語法の有り様を検討した。

まず6.1では、『新爾雅』における3字から6字以上の語を漢語・和製漢語・和製新漢語の3つに分けて、それらの語構成を分析した。その要点は以下のとおりである。

(1) 3字語

3字語は663語であるが、そのなかの479語は中国製漢語である。そのうち、476語が中国製新漢語と認められる。和製新漢語は164語であるが、それを構成する2字語基については、中国製語基が多くを占めている。

(2) 4字語

4字語は558語であるが、そのなかの507語は中国製漢語である。そのうち、

363 語が中国製新漢語と認定される。和製新漢語は 49 語であるが、それを構成する 2 字語基については、3 字語の場合と同じく、中国製語基が多くを占める。

(3) 5 字語

5 字語は 211 語であるが、和製新漢語の 6 語以外は中国製新漢語である。和製新漢語の 6 語については、それを構成する 2 字語基はすべて中国製語基である。

(4) 6 字語以上

6 字以上の語は 122 語確認されたが、そのうちの 94 語は 6 字語である。その 6 字語はすべて中国製新漢語である。

続く 6.2 では、『NEW TERMS』に収録されている 3 字以上の語について、『新爾雅』の場合と同じ方法により分析を行った。その結果をまとめると、次のようになる。

(1) 3 字語

3 字語は 693 語あるが、そのうちの 511 語が中国製新漢語であり、全体の約 74% を占めている。その割合は『新爾雅』における中国製新漢語とほぼ同じである。3 字中国製新漢語を構成する 2 字語基を見ると、中国製のものが大半であり、和製の 2 字語基は 11% に過ぎない。3 字和製新漢語は 160 語であるが、関係する 2 字語基の 78% は中国製である。

(2) 4 字語

4 字語は 349 語であるが、そのうちの 330 語は中国製新漢語であり、全体の約 94% を占めている。4 字和製新漢語は 34 語であるが、関係する 2 字語基で見ると、『新爾雅』の場合と同様に、中国製の語基が多くを占めている。

(3) 5 字語

5 字語は 49 語であるが、そのうちの 47 語は中国製新漢語であり、残る 2 語が和製新漢語である。その和製新漢語についても、関係する 2 字語基で見るとすべて中国製のものであり、全体として和製の比重は極めて低い。

(4) 6 字語以上

6 字語は 11 語、7 字語は 5 語確認されたが、それらはすべて中国製新漢語である。

最後に 6.3 では、『新爾雅』と『NEW TERMS』における新語のなかの和製新漢語に焦点を当てその造語法を検討した。語基が造語法の基盤をなすという見方のもと、和製新漢語において、どのような語基の組み合わせが認められるかを詳しく分析した。その分

析において力点を置いたのは、和製新漢語を構成する語基の語種である。具体的には、主に高野（2004）による「既存語基」（すなわち、中国製語基）・「借用語基」・「新造語基」という語種の分類を用いた。その分類をもとに、2字の和製新漢語から5字の和製新漢語までの構成パターンとその特徴を探ってみた。その要点は以下のとおりである。

- （1）2字語は単独で語として用いられるだけでなく、語基としても働く。これらを語種で見ると、新造語基が約77%を占めており、日本製の語基が重要な働きをすることが分かる。
- （2）3字語は（2+1）という構成パターンを基本とするが、そこでの2字語基の多く（約63%）は既存語基である。
- （3）4字語では、（2+2）の構成パターンを取るものが多いが、そのパターンにおいては「既存語基+既存語基」のパターンが約45%を、それに次いで「既存語基+新造語基」のパターンが約31%を占めており、造語における既存語基の役割が大きいことが分かる。
- （4）5字語では、和製新漢語と認められるのは8語だけであるが、それに関係する2字語基はすべて既存語基である。このことは、和製新漢語の創出において中国製語基が大きな役割を果たすことを明確に示している。

第7章 結語

日本は中国にとって一衣帯水の隣国であり、歴史の早い段階から中国文化の影響を受ける形で、中国との交流を行ってきた。しかし、近代に入り、明治維新を迎えた日本は、国策として積極的に西洋文明を受容、吸収するようになった。このことは、中国文化の受容から西洋文化の受容という歴史的な転換を意味する。

この歴史的な転換により、日中の交流の形にも変化がもたらされた。明治期前後の急速な近代化の時期に、日本の知識人は、西洋の概念や思想などを漢語によって表現した。彼らは、中国語由来の漢語を再利用して、西洋の概念に充当するだけでなく、中国語には無い新しい漢語である「和製新漢語」を大量に生み出して、新概念に充当した。これは日中語彙交流における一大転機であると言える。また、この近代の新概念を表した「和製新漢語」は日本の近代化に大きく寄与しただけではなく、中国語にも流入して、中国語語彙の欠くべからざる部分を形成することとなった。

本論文は、言語と歴史との関わりを背景に、近代に創出され、新しい概念や思想などを表現する「和製新漢語」を対象として、非中国語母語話者（非漢字文化圏）と中国語母語話者（漢字文化圏）という2つの観点から、「和製新漢語」が中国語で受容された様子を明らかにするとともに、「和製新漢語」が中国語へ流入した背景、経緯、経路の解明も試みた。併せて、出版年の異なる複数の版本を比較することにより、中国語に受容された「和製新漢語」がその後どのような変遷をたどっていったのかも明らかにした。さらに、和製新漢語の語構成（造語法）の考察を行った。

7.1 各章のまとめ

本節では、本論文の構成をもとに各章の内容をまとめていく。

第1章は序論であり、日中両言語における語彙交流をテーマとする研究の背景、近代の社会背景、及び本研究の目的を述べた。

第2章では、先行研究を検討したうえで、その問題点の洗い出しを行うことにより、本論文が採るべき指針を明らかにした。先行研究に従い、まず、日中両言語における「和製漢語」に関する定義を検討した。従来の研究では、日中両国とも和製漢語に関する研

究は和製漢語の形成、背景、及び分類に重きを置いてきた。しかし、その対象範囲を具体化したり、中国語に受容された「和製漢語」を分析する研究は少ない。また、非中国語母語話者（非漢字文化圏）の観点からの分析は、著しく不足している。そのため、「和製漢語」の研究には再考の余地があると認め、中国語母語話者の観点からの比較研究も必要であると考えた。さらに、先行研究において不十分な点は、本論文で提起した「和製新漢語」という概念に相当する語に焦点を当てた研究が少なかったという点である。そこで、本論文では、「和製新漢語」を提起して、それを定義づけた。さらに、このような「和製新漢語」が持つ語形と意味を区別したうえで分析を行う必要があると考え、「準和製新漢語」という概念も提出した。また、「和製新漢語」の語構成（造語法）に関する研究も十分なものとは言えない。そこで、「和製新漢語」の全体像を究明する必要性を認めるとともに、それを深く研究すれば、日中語彙交流の有り様を明確にできると考えた。

第3章では、中国における和製新漢語の流入について考察を行った。考察にあたって、近代における社会背景を中心として、日本における近代化と中国における近代化の状況を明らかにするよう努めた。その際、近代における社会背景からの影響を考慮しつつ、近代に見られた日本留学の高まりに着目し、日本留学の動機と渡日留学生の教育及び文化吸収の分析を試みた。また、中国人留学生による翻訳活動の問題を取り上げ、その考察を行った。渡日中国人留学生による翻訳活動によって、西洋の先進的な知識、文化、思想などが日本を経由する形で中国に流入しただけでなく、多くの語彙（和製新漢語）が中国国内に流入した。これらの語彙は中国への流入後、日常生活に溶け込み、中国語を豊かにしていったのである。

第4章では、中国語母語話者（漢字文化圏）の観点から、『新爾雅』における和製新漢語が中国語にどのように受容されたかの分析を試みた。『新爾雅』は、19世紀末から20世紀初頭にかけて編纂された、中国語の新語を集めた用語集である。この書の出版は、新語を分かりやすく説明する辞書や用語集の出版に対する強い求めに応じたものである。本論文では『新爾雅』を「和製新漢語」受容の実態を反映する重要な資料であると見なし『新爾雅』に現れる2字語から6字語以上までの語彙を分析し、それらが属する意味分野と語種について考察した。その考察により明らかになった点をまとめると、以下のとおりである。

- (1) 新語全体のうち、和製新漢語は17.6%を占める。
- (2) 2字の和製新漢語と3字以上の和製新漢語はほぼ同数である。

(3) 和製新漢語は単独で中国語に流入しただけでなく、流入後に語基として使用された。

(4) 近代の中国語で流通している新語全体に占める和製漢語の割合は、21.6%である。

第5章では、非中国語母語話者（非漢字文化圏）の観点から、『*NEW TERMS*』に記載された和製新漢語が中国語に受容された様子を考察した。『*NEW TERMS*』は、米国人宣教師による著作であり、英語が理解できる外国人のための時事用語集である。1900年から1913年までの様々な新聞からの新語が収録されており、出版当時の中国社会の動きを映し出す高い時事性を持ったものであると言える。この章では、『*NEW TERMS*』に収録された2字語から6字語以上までの語彙の分析を行ったうえで、それらが属する意味分野と語種に関する考察を行った。

その考察によって明らかになった点をまとめると、次のようになる。

- (1) 和製新漢語は新語全体の約20%を占める。
- (2) 和製新漢語のなかでは2字和製新漢語が最も多く、3字和製新漢語がそれに次ぐ。
- (3) 近代の中国語で流通している新語のうち、和製漢語は全体の22.3%である。

この章ではまた、新語の語種の変遷を明らかにするために、『*NEW TERMS*』の初版から第4版までを比較検討し、変遷の様子を具体的に把握するよう努めた。

第6章では、『新爾雅』と『*NEW TERMS*』における和製新漢語の造語法を分析した。3字語から6字語以上までの和製新漢語を対象に、それらがどのような構成パターンを取るかについて詳しく検討した。その検討にあたっては、語構成の基盤をなす「語基」の特徴づけを高野（2004）に求め、高野の言う「既存語基・借用語基・新造語基」の種分けをもとに、和製新漢語がどのような語基の組み合わせにより構成されるのかを考察した。その考察から、和製新漢語の創出において中国製の語基が大きな役割を果たしていることが明らかになった。

7.2 今後の課題

本論文では、和製新漢語研究の深化を目指し、和製新漢語が中国語に受容された状況を明らかにするとともに、和製新漢語の造語法の特徴について考察した。本論文の研究成果が近代の日中語彙交流の解明に貢献できるとすれば、本論文の目的は達成されたことになる。

今後の課題としては、本論文では詳しい考察を行うことができなかった中国製新漢語の分析がある。中国製新漢語は、和製新漢語と並んで、近代中国社会に流通した重要な語彙である。本論文では、中国製新漢語に多少触れる機会があったものの、中国製新漢語の創出の経緯や語構成の特徴は明らかにできなかった。また、中国製新漢語の現代中国語への影響の問題や中国製新漢語が日本語にもたらした影響の問題も興味深い問題である。これらの問題については今後の課題として検討を続けたい。

参考文献

【日本語の文献】

- 阿部洋（1990）『中国の近代教育と明治日本』福村出版株式会社。
- 荒川清秀（1979）「中国語と漢語—文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて—」
『愛知大学文学論叢』62 pp. 8-9。
- 荒川清秀（1986）「字音形態素の意味と造語力—同訓異字の漢字を中心に—」『愛知大学
文学論叢』82 pp. 592-569。
- 荒川清秀（1988）「複合漢語の日中比較」『日本語学』07-05 pp. 56-67 明治書院。
- 荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播—地理用語を中心に—』白帝社。
- 荒川清秀（1998）「日本漢語の中国語への流入」『日本語学』17 pp. 39-46 明治書院。
- 荒川清秀・荒川由紀子（1988）「現代中国語の造語力—日本語における漢語との関連で
—」『愛知大学文学論叢』89 pp. 350-323。
- 荒川清秀（2002）「日中漢語語基の比較」『国語学』53 pp. 84-96。
- 荒川清秀（2003）「中国語辞典における語素のあつかいについて」『文明』21 pp. 49-59。
- 荒川清秀（2012）「日中両国語における漢語語基の意味と造語力」『日中対照言語学研究
論文集：中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴』pp. 49-
59。
- 荒川清秀（2018）『日中漢語の生成と交流・受容—漢語語基の意味と造語力—』白帝社。
- 荒屋勤（1983）「中日同形語」『大東文化大学人文学科紀要』21 pp. 17-29。
- 區建英（2009）「中国のナショナリズム形成 一日清戦争後の移り変わりと辛亥革命—」
『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』12 pp. 75-90。
- 広田栄太郎（1969）『近代訳語考』東京堂出版。
- 菱沼透（1980）「中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例—」『日本語教育』
42 pp. 58-72 日本語教育学会。
- 彭広陸（2001）「日本における中国語新聞の用語に関する考察」『日中言語対照研究論
集』3 pp. 132-142。
- 彭広陸（2005）「中国語と外来語」『国文学 解釈と鑑賞』70 pp. 148-166 日中言語対照

- 研究論集。
- 彭広陸（2013）「中国語の新語に見られる日本語からの借用語」『日本語学』 pp. 14-25
明治書院。
- 華東方（2005）「歴史変遷にそった和製漢語の語構成—二字和製漢語を中心に—」武漢
大学修士論文。
- 河住有希子（2009）「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本
語教育研究』 7 pp. 53-65 早稲田大学。
- 金田一春彦（1988）『日本語 新版(上)』岩波書店。
- 金田一春彦他編（1990）『日本語百科大辞典』大修館書店。
- 孔健（1994）『中国新聞史の源流 孫文と辛亥革命を読む』批評社。
- 曾根博隆（1985）「現代中国語の語彙」『駒沢大学外国語部論集』 21 pp. 91-101。
- 曾根博隆（1988）「日中同形語に関する基礎的考察」『明治学院論叢』 424 pp. 61-96。
- 松井利彦（1987）「漢語の近世と近代」『日本語学』 6 pp. 25-36。
- 松井利彦（1991）『近代漢語辞書の成立と展開』笠間書院。
- 宮島達夫（1967）『現代語の形成—ことばの研究—』秀英出版。
- 宮島達夫（1994）「日中同形語の文体差」『語彙論研究』 pp. 1-18 むぎ書房。
- 宮地裕（1973）「現代漢語の語基について」『語文』 31 pp. 68-80。
- 森岡健二（1969）『近代語の成立—語彙編—』明治書院。
- 中川正之編（2000）『日本と中国—ことばの梯—』くろしお出版。
- 中条修（1992）「近代新漢語における中日語彙の交流—逆移入された和製同形漢語の異
同を中心に—」『静岡大学教育学部研究報告教科教育篇』 pp. 1-15。
- 日本国語大辞典刊行会（1981）『日本国語大辞典』小学館。
- 夏曉麗（2006）「現代漢語の中の日本外来語研究」遼寧師範大学修士論文。
- 野村雅昭（1976）「現代漢語の語構造について」『情報管理』 18 pp. 884-891。
- 野村雅昭（1988）「漢字の造語力」『漢字講座』 1 pp. 55-72 明治書院。
- 野村雅昭（2008）『現代の漢語・漢字の位相』明治書院。
- 野村雅昭（2013）『現代日本漢語の探究』東京堂出版。
- 沖森卓也・陳力衛・木村義之・山本真吾（2006）『図解 日本語』三省堂。
- 沖森卓也・陳力衛・肥爪周二・山本真吾（2010）『日本語史概説（日本語ライブラリー）』
朝倉書店。

- 沖森卓也・田中牧郎・陳力衛・前田直子・木村義之（2011）『図解 日本の語彙』三省堂。
- 大河内康憲（1997）「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集』 pp. 411-447 くろしお出版。
- 王永全・小玉新次郎（2007）『日中同形異義語辞典』東方書店。
- 王曉雨・陳其松（2019）「清国人日本留学生の見た「世界」とその言説」『北東アジア研究』 pp. 19-31 島根県立大学北東アジア地域研究センター。
- 尾崎知光（1972）『古事記』（原著：太安万侶（712））白帝社。
- 李運博（2005）「日本借用語の近代中国への移入－梁啓超の場合－」北海道大学博士論文。
- 李協京・田渕五十生（1997）「中国人の日本留学の百年－歴史的軌跡と現在の留学事情について－」『奈良教育大学紀要』46 pp. 21-35。
- 劉曙野（2005）『中国語、日本語、韓国語－その源流を探る－』金剛大学出版社。
- 劉徳友（2006）『日本語と中国語』講談社。
- 劉凡夫（2014）「近代中日交流の風景－清末の漢詩にある日本語－」『名古屋大學中國語學文學論集』 pp. 1-12。
- 呂明臣（2003）「中国語における日本語の漢語をめぐって」『日本文藝研究』 pp. 1-16。
- 斎藤毅（1977）『明治のことば』講談社。
- 斎藤倫明（2004）『語彙論的語構成論』ひつじ書房。
- 斎藤倫明・石井正彦編（2011）『これからの語彙論』ひつじ書房。
- 阪倉篤義（1978）『語構成の研究』角川書店。
- 実藤恵秀（1960）『中国人日本留学史』くろしお出版。
- 実藤恵秀（1973a）『中国人日本留学史』（増補版）くろしお出版。
- 実藤恵秀（1973b）『近代日中交渉史話』春秋社。
- 実藤恵秀（1981）『中国留学生史談』第一書房。
- 佐藤喜代治（1971）『国語語彙の歴史的研究』明治書店。
- 佐藤喜代治（1979）『日本の漢語』角川書店。
- 佐藤喜代治（1998）「和製漢語の歴史」『漢語漢字の研究』 pp. 169-186 明治書院。
- 佐藤喜代治・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・飛田良文・前田富祺・村上雅孝編（1996）『漢字百科大事典』明治書院。
- 佐藤亨（1980）『近世語彙の歴史的研究』桜楓社。

- 佐藤亨(1983)『近世語彙の研究』桜楓社。
- 佐藤亨(1986)『幕末、明治初期の語彙の研究』桜楓社。
- 佐藤亨(2013)『現代に生きる日本語漢語の成立と展開』明治書院。
- 佐藤信(2009)「日本における漢字文化の受容と展開」『法政史学』72 pp. 1-21 法政大
学史学会。
- 沈国威(1988)「近代における日中語彙交渉の一類型－「関係」について－」『国語語彙
史の研究』9 pp. 17 和泉書院。
- 沈国威(1992)「近代語彙体系における訳語の造出と借用－類型－「影響」を中心とし
て－」『国語語彙史の研究』12 pp. 155-180 和泉書院。
- 沈国威(1994)『近代日中語彙交流史－新漢語の生成と受容－』笠間書院。
- 沈国威(1995)『『新爾雅』とその語彙』白帝社。
- 沈国威(1998)「新漢語研究に関する思考」『文林』32 pp. 37-61。
- 沈国威(1999)『六合叢談(1857-58)の学際的研究』白帝社。
- 沈国威(2000)『植学啓原と植物学の語彙－近代日中植物学用語の形成と交流－』関西
大学出版部。
- 沈国威・内田慶市(2002)『近代啓蒙の足跡-東西文化交流と言語接触－『智環啓蒙塾課
初歩』の研究－』関西大学出版部。
- 沈国威(2008)『近代日中語彙交流史－新漢語の生成と受容－【改訂新版】』笠間書院。
- 沈国威・内田慶市(2010)『近代東アジアにおける文体の変遷－形式と内実の相克を超
えて－』白帝社。
- 沈国威(2010a)「日本の術語、中国の術語－その歴史的歩みと展望－」『日本語学』29
pp. 36-45 明治書院。
- 沈国威(2010b)「異文化受容における漢字の射程－日本の蘭学者と来華宣教師の場合
－」『アジア文化交流研究』pp. 231-251。
- 沈国威(2011a)『中日同形語小辞典』白帝社。
- 沈国威(2011b)「新名詞と辛亥革命期の中国－日本の影響を中心に－」『辛亥革命と日
本』pp. 237-259 藤原書店。
- 沈国威(2012)「新名詞與辛亥革命時期之中国」『東アジア文化交渉研究』pp. 195-206。
- 沈国威・内田慶市(2014)『環流する東アジアの近代新語訳語』関西大学東西学術研究
所研究業書 ユニウス。

- 沈国威 (2016) 「漢字の意味とその獲得」『関西大学中国文学会紀要』 37 pp. 15-36。
- 沈国威・奥村佳代子 (2021) 『文化交渉と言語接触』 東方書店。
- 進藤咲子 (1981) 『明治時代語の研究』 明治書院。
- 孫建軍 (2015) 『近代日本語の起源—幕末明治初期につくられた新漢語—』 早稲田大学出版部。
- 孫倩 (2011) 「清国人の日本留学に関する一考察—1890年から1910年まで—」『社会学研究』 pp. 188-203。
- 鈴木英夫 (1978) 「幕末明治期における新漢語の造語法—『経国美談』を中心として—」『国語と国文学』 55 pp. 143-158 至文堂。
- 鈴木修次 (1979) 『漢語と日本人』 みすず書房。
- 鈴木修次 (1981a) 『文明のことば』 文化評論出版。
- 鈴木修次 (1981b) 『日本漢語と中国(漢字文化圏の近代化)』 中央公論社。
- 鈴木修次 (1983) 「嚴復の訳語と日本の「新漢語」」『国語学』 132 pp. 40-50 国語学会。
- 朱京偉 (2003) 『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に—』 白帝社。
- 朱京偉 (2004) 「蔡元培の日本語翻訳と哲学用語の導入」『漢字文化圏近代語研究会予稿集』 4 pp. 77-92 漢字文化圏近代語研究会。
- 高野繁男 (2004) 『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法—』 武蔵野書院。
- 樽本照雄 (2012) 「ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書館」『清末小説』 pp. 1-54 清末小説研究会。
- 陳力衛 (2001a) 『和製漢語の形成とその展開』 汲古書院。
- 陳力衛 (2001b) 「和製漢語と語構成」『日本語学』 20 pp. 40-49 明治書院。
- 陳力衛 (2004a) 「漢語造語力の盛衰」『國文學解釈と教材の研究』 49 pp. 82-87 學燈社。
- 陳力衛 (2004b) 「近代日本語における中国出自のことばについて」『アジアにおける異文化交流』 pp. 17-29 明治書院。
- 陳力衛 (2005a) 「新漢語の産出と近代漢文訓読」『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開—石塚晴通先生退官記念論文集—』 pp. 287-302 汲古書院。
- 陳力衛 (2005b) 「和製漢語の形成」『国文学解釈と鑑賞』 pp. 38-46 至文堂。
- 陳力衛 (2011a) 「「民主」と「共和」—近代日中概念の形成とその相互影響—」『経済研

- 究』194 pp. 9-35 成城大学。
- 陳力衛 (2011b) 「近代日本の漢語とその出自」『日本語学』30 pp. 34-46 明治書院。
- 陳力衛 (2012) 「和製漢語と中国語」『比較日本学教育研究センター研究年報』pp. 217-222。
- 陳力衛 (2013a) 「近代日本漢語の形成と中国語」『現代日本漢語の探求』pp. 290-316 東京堂出版。
- 陳力衛 (2013b) 「「主義」の流布と中国的受容— 社会主義・共産主義・帝国主義を中心に」『経済研究』199 pp. 31-58 成城大学。
- 陳力衛 (2014) 「明治の科学啓蒙家の苦心— 「一力」「一性」の接辞化へ向けて」『日本語学』33 pp. 58-68 明治書院。
- 飛田良文 (1987) 『日本語・中国語意味対照辞典』南雲堂。
- 飛田良文 (1989) 『日本・中国慣用句対照辞典』南雲堂。
- 飛田良文 (1992) 『東京語成立史の研究』東京堂出版。
- 藤堂明保 (1982) 『漢字の過去と未来』岩波書店。
- 張麟声 (2009) 「作文語彙に見られる母語の転移— 中国語話者による漢語語彙の転移を中心に—」『日本語教育』109 pp. 59-69 日本語教育学会。
- 張厚泉 (2017) 「造語意識から見た近代漢語の成立— 『百学連環』の造語を中心に—」『言語と交流』pp. 46-63。
- 上垣外憲一 (1982) 『日本留学と革命運動』東京大学出版会。
- 内田慶市 (2001) 『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版社。
- 内田慶市・沈国威 (2007) 『19世紀中国語の諸相— 周縁資料(欧米・日本・琉球・朝鮮)からのアプローチ—』雄松堂出版。
- 内田慶市 (2020) 『言語接触研究の最前線』関西大学東西学術研究所研究叢書 ユニウス。
- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館。
- 山田孝雄 (1958) 『国語の中に於ける漢語の研究 (訂正版)』宝文館。

【中国語の文献】

- 陳山务 (1898) 『張之洞劝学篇評注』大連出版社。
- 丁声树 (1961) 『現代漢語詞匯』商务印书馆。

- 冯天瑜 (2004) 『新語探源』 中华书局。
- 高名凯·刘正琰 (1958) 『現代漢語外来詞研究』 文字改革出版社。
- 高名凯·刘正琰 (1984) 『漢語外来詞詞典』 上海辞书出版社。
- 戈公振 (1955) 『中国報学史』 商务印书馆。
- 顾海根 (1988) 『日本語概論』 北京大学出版社。
- 蒋绍愚 (2005) 『古漢語詞匯綱要』 商务印书馆。
- 李建华 (1995) 「中日文同形词形同义异的探究」 『国际安全学院学报』 4 pp. 14-19。
- 刘凡夫 (2009) 『以汉字为媒介的新词传播：近代中日间词汇交流的研究』 辽宁师范出版社。
- 刘凡夫 (2012) 「以黄遵宪『日本国志』(1985)為語料的日語借詞研究」 『日语学习与研究』 3 pp. 10-18 商务印书馆。
- 李华兴 (1997) 『民国教育史』 上海教育出版社。
- 马祖毅 (1984) 『中国翻譯簡史』 中国对外翻譯出版公司。
- 潘钧 (1995) 「中日同形词词义差异原因浅析」 『日语学习与研究』 3 pp. 19-23。
- 彭文祖 (1915) 『盲人瞎馬新名詞』 东京秀光社。
- 沈殿成 (1997) 『中国人留学日本百年史』 辽宁教育出版社。
- 沈国威 (2010) 『近代中日词汇交流研究』 中华书局。
- 沈国威 (2011) 『新尔雅(附解题·索引)』 辞书出版社。
- 沈国威 (2014) 『漢外詞彙教学新探索』 遊文舍。
- 沈国威 (2017) 『嚴復與科学』 凤凰出版社。
- 沈国威 (2019) 『漢語近代二字詞研究—語言接觸與漢語的近代演化—』 华东师范大学出版社。
- 沈国威 (2020a) 「漢語詞彙体系的近代重構與語言接觸」 『国际汉语教育史研究』 2 pp. 63-77 商务印书馆。
- 沈国威 (2020b) 『新語往還—中日近代語言交涉史—』 社会科学文献出版社。
- 史有为 (1991a) 「外来词研究之回顾与思考」 『语文建設』 11 pp. 6-12 语文出版社。
- 史有为 (1991b) 『外来詞-異文化的使者』 商务印书馆。
- 史有为 (1995) 「外来詞:兩種語言文化的融合」 『汉语学习』 66 pp. 99-122。
- 史有为 (2013) 『漢語外来語』 商务印书馆。
- 孙常叙 (1957) 『漢語語彙』 吉林人民出版社。

- 譚汝謙（1988）『近代中日文化關係研究』香港日本研究所。
- 王立達（1958）「現代漢語中從日本語借來的詞彙」『中國語文』2 pp. 90-94 商務印書館。
- 王永全（1997）「日語學習中要注意對同形詞語的辨析」『日語學習與研究』pp. 35-39 商務印書館。
- 徐通鏞（2008）『漢語字本位語法導論』山東教育出版社。
- 翟鵬（2004）「新時期現代漢語新詞與日語同形詞及外來語的關係」煙台師範學院漢語言文學院學報。
- 章黎丙 解海江（2015）『漢語核心人體詞共時與歷史比較研究』中國社會科學出版社。
- 張之洞（1898）『勸學篇』中江書院。
- 周光慶（2001）『漢語與中國早期現代化思潮』黑龍江教育出版社。
- 朱京偉（1994）「和製漢語的結構分析和語義分析」『日語學習與研究』pp. 19-30 商務印書館。
- 朱京偉（2019）『近代中日詞匯交流的軌跡-清末報紙中的日語借詞』商務印書館。

【英語の文献】

Masini, Frederico (1840) *The Formation of Modern Chinese Lexicon and its Evolution toward a National language: The period from 1840 to 1898. Journal of Chinese*

【インターネット資料】

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp>